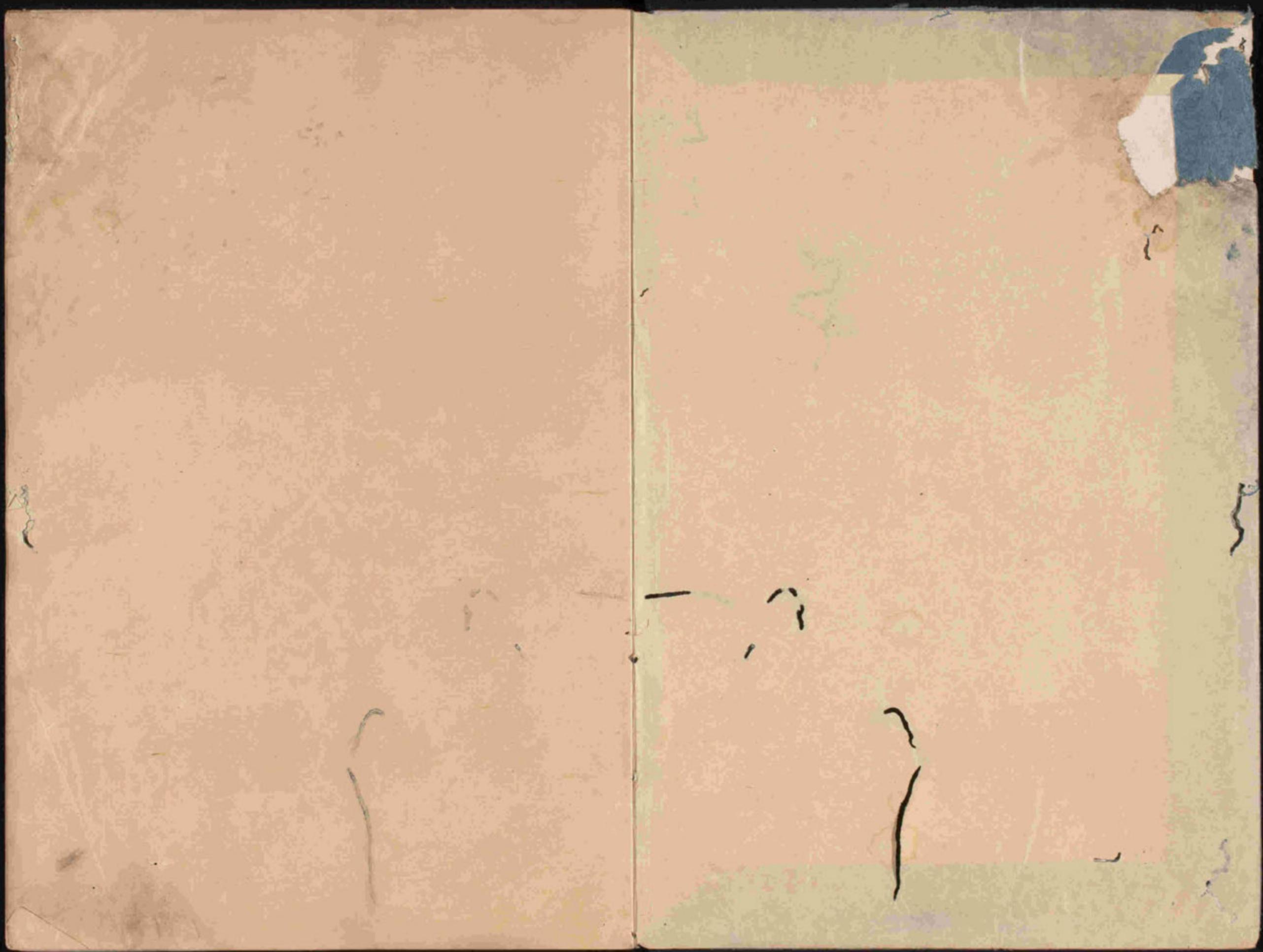
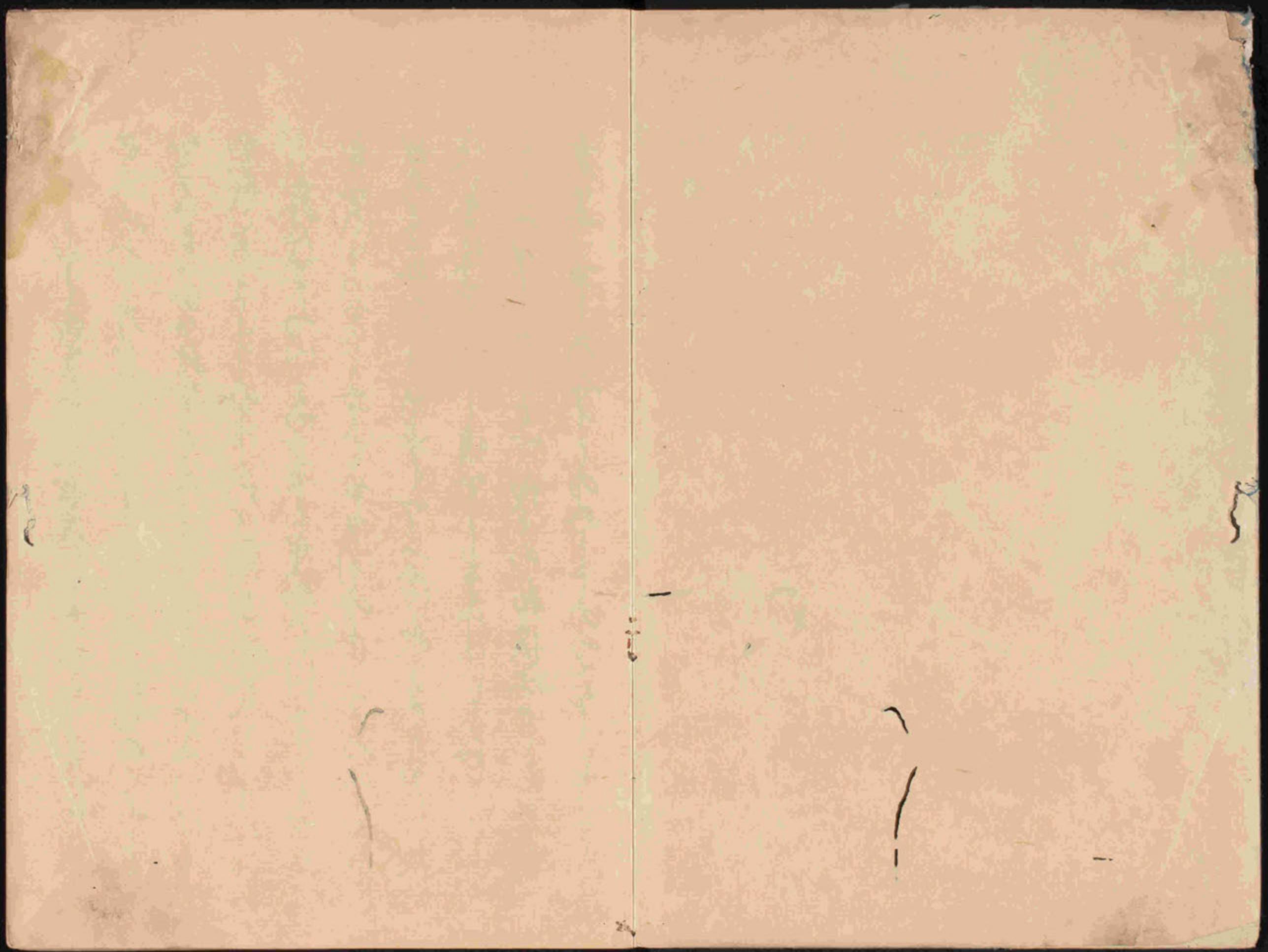


續古今和歌集

5





やまくうへりうれ素書めじりのうとよひわ  
ともちと乃まをりそくにほほ鶴のこみま  
そつもふれをくみくみやまとそじけ  
よおこころうのうわはうよもこううのぬ  
しゆくもづくよづくまよ風一いぢもけを  
年をいふすてこやう用の戸きくねばくら  
まくまく思ひをえくまけれどもあけれ  
人春妹をそく情をそくよい野よし  
もおもかくわくへせの勅撰や中よがま高  
葉集ひやうろみとのみよのづをうゑくと

くまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
くじきをくまくをやふなうい偕くまくまく  
よわくいわくアシトキテキト葉のあくわく  
りまくみわくひとアシトキテヒくまくまく  
通やうくみわくと花木とよほくまくまく  
にひやくとくとあい草のまよくにわくとくと  
のぬこむくとくわれこ難波江乃わよすく  
くわくともわくまくくじくとねのにま  
乃きしゆくもくとくわくくのとくと  
乃きしゆくもくとくわくくのとくと

えくものうとくをくよじこすよばうをそ  
りくふにうるりくをゆく月日をゆよマニ  
りうちのきよてぬやくくみとくマニあ  
きくりえい雪こりとをつけて民の怨没する  
をもとい今い事のりはーさくとせばあぬ  
にまへとつてま地いちつこのつとむむを  
もれこじよあまでうりし人のみをぬされ  
斐アラリとれい野たる草とのふれ業あくう  
くみ各の埋木トウリルたままに内あくしわ  
りよマキトロヒハ、我我よやう考の凡よざくと

かよしこねひつ、の浦もゆく、國をす嫌也  
月をみをわよどりじこ思へれによく古今  
のあくをわよどりじこ思へれによく古今  
けんに藤原納戸民部卿安原納戸為家は反  
ふくもあよく萬葉集のう十代集の外を  
ひくともあよく、萬葉集のう十代集の外を  
ひくともあよく、萬葉集のう十代集の外を  
乃付ちうきをつれどれをうきとあんじく  
のうりえますをうきとあんじく、新古今

乃トモシのアリニテ  
タキモヒツラのアラモシヒヤクチの月  
のヘにアリモトハ錦のミエツヘモカ  
ルのキヒミテアリモツルミエツヘモカ  
ル此外にもナガ川もミエツヘモカ  
ルモアリモトハ錦のミエツヘモカ  
ルモシカレモヒヤクヤリモアリモカ  
ルモシカレ今もスリナリケンキ  
フニギヤウラヒシニキニ名前を續古今和琴集  
ニヒア春尼静ヤサカムキヒタモ夏モ  
ソサトノ人モアリヘヌ付鳥娘ハシミト  
アキル月モヤクス冬リソニシヒトモ雪モミ  
テカク代々く付モヒケニ情ナリヘシマ又  
春日明神ニ三十一字モナリカヤケニ月モ  
テモヒテえをうヘ傳教大師ハサハ品のアラハ師  
の如木のアラヒミツアリモナリモナリ渡  
ミヘラヘモヒトモ鳥モミツアリモナリモナリ  
アリモナリモナリモナリモナリモナリモナリ  
モナリモナリモナリモナリモナリモナリモナリ

とてよしとしをゆつせよのひいそよ  
かれ露雪えきる折やましアフリケリ  
しやにわくはすこりまくじとこの集  
を續古今といふかは姓小古今集をえり  
て後地の勅撰本くつうれとかくねく元久  
新古今之名序をもと古今の字をほむら  
り則ちうるいの集をとらへあらとゆくよ  
うちあいりあくやくせもじくうも  
人よとくじよやかりどくもるよかの  
二代のあくと今と又年よめくうれ  
くけゆかくつかふくわくよにわも  
中門にあらうのトシテテの野のつふ  
八年とく年とく雪のあくとすくべ  
ゆとゆよ雪のよかれきとくとアくもの  
うちあくひとくとくわくとくとく  
里のよそのこととくはくとくとくの  
浪とくとくとくとくとくとくとくとく  
しよせうのじわくと用のあくの行のうち  
ものあくよくらすくとくよいひくとく  
すくよくとくわくとくとくよいひくとく

てまくらきいれましに古よりいたまきる  
ぬりたまこすりわざのいじとまじ  
う乃毛つてとさゆるてひれじよくときふく  
ゆせとまちあてとくわく勧懲ともいとやう  
よえふ草と板とをまやんと舊相承い及あゆを  
りすく雪のくちえいとうまつて曆じよわ  
くよみて乃小のれきとれくねのととを  
てみかくとやう野邊の草とてのとてとをし  
まいり朝夕よわくよまくわすくわすく  
集よもぎとれくわくとせくわくとせく

年月日文永二年十二月廿六日記

まくらりとまくらてとくにとよむよみく  
てとくのみやのくとくとくとくとくとくとく  
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

續古今和歌集卷第一

春爭と

ゆめ考のくを済なげ

麻中納言家

名ふうううと天乃くくよす一社雪わにひち考つま西原

崇徳院と百首すぢかけ考争

藤原清浦切

いづか年の人もめぢをれいよのむくゆくくよ

右人臣よけ舟家よ百首すぢかけよ

立春争

後は忙も入道前房白雲下

今朝みれどもとの衣もとひて上りて山に春來るを

考えちうを ちか門山市平

朝あけ乃つとお衣りうきし春くらすとえづ

初春度をよみけり

麻人納言考家

僕子とあるの衣いのゝル小もまよをアシケンシ

寶治二年三月早春家を

太上天皇

りくよわ考えきよし天のわくをゆすと立家

考えの中 中務卿親王

かうと乃みの演ねとじてとよめに考えよ

百首すほけり考え

光明筆も入道前持久ト

久のえか戸あきく出る野アホ代のきくらめく

初春のを 化貴え

春鳥もちううしれみづ野のアホ子へ雪いやうけ

中務ア親王

凡そしゆく雪きて坐て坐て元氣とあて考えよん

考えを 並用にた大也

今も仕事もよみてわいきうち春といふ字す雪やうけ

建保二年四月に百もすうすけづけ

承中納言宣家

音羽河雪行のりよももちて用のくすに考ひまつて  
考へ一めのす 後京極持取承中納言

もや一冰のくはるてあ清滝川より考へすあく

百首あすか中す 後鳥外院即す

考へといふのあけとこけてよとよつと志願すく浪

建保二年百もすうすけづけづけ

支羽章も入道京極持取たぐ

吉野川邊の冰と雪きてくぬりよいにうちのくは

者あす中に 順徳院即す

考日野アゆくをつせの考へすわをすくと兵乃鶴原

歌一す 桜中納言長方

みこととづるにじて處をとくらひのとの秋の楓原

正治二年百もすうすけづけづけ

承大納言忠良

あがいじ秋のやけくねくとすかのあく雪

文永二年七月白けしとくとく七百もすうすけ

とすよ

前大納言

防うしき雪申やくすのとよとよせらる拂

君を庶はけり

麻人内言為家

ある門じつ夜もとゆかにうすのへあく雪うや

衣笠麻口人

浅千ア東のつむらしきねすのあま今マレキ

ほ二佐加隆

うちじてわづかじのたゞいのそと春の雪ハアシナ

ち席門ゆきう

ゆううう乃つるはなわうよ野澤の火神が蟲ア

雪中子日こゝろをよどとねけり

白雪のきくわゆのふねゑかくてよ考のえハアシナ

田融虎のつけしとき野の子日

平氣盛

你のひてあこくちみゆくよのゆきせよハムニ

承保四年内官子日

贈太政大臣行實

さくわくもよみのねをす万代よのさくにハミを

子日のことを

太上天皇

子口とすよ代乃あら道わく先首をうるねむかわ

延喜六年三月吉日書寫

おうううううきよまそいれとくとゆく是事のよ

考のむすの中よ 今上御平

力ちつづけこすきをうけぬまへ初もゆれて  
道助は親王家六十度雪中嘗

入道赤

入道赤と奴人大

ももアシミ草ハトメ思雪の中よしすりれど嘗め未  
西園ち入道赤と奴人大

うらぎアシミ草ハトメ思雪の花のよしりつまうるをあわせ  
梅にあうのあくねまの初もよしわ雪うら  
雪乃やうけうほどまのやうけう

道助は親王

上東門北

嘗め花よみふる雪ふれどもとわせの國やう  
雪中梅花こづくら

花と鹿とく

稀に花よみふる雪ふれどもとわせの國やう

印と

藤原基後

紅に花よみふる雪ふれどもとわせの國やう  
正治二年もやうけう百日の考

皇室后宮大支後成

こゑのひがひありすもくとくとくとくのあいとく

北洛春月

延喜家隆

考アラニルアマハシムテ雪けの月凡モ勿チ

延喜年中うけ百三の考チ

入道前を取人ト

かうれ三輪の松原のタレミモ首ヤニコアキモ

ちケ門は大き家ノリ野鳥を

多至隆信朝

アミアツヒトニマアヌアヌアリ野ヨリシカの木枝

シト

ト色あ人

ト方く月のつづく夕暮ハカリツツト有リシヤ

柿本人丸

ウエ未く考日の至キシムヒト小ねくノニ鳥ムリ

私モ二年の万字ニ鳥モ

中務卿親王

考未くハ萬アラシじ白雲のやうとして生れ松原

百首うめけるにかく

順徳院

浪曲よりタロツガラ高砂のねのうくをすよ爲

延喜元年二月すうちト西陽處村ニリまし

赤中納言宇吉家

月夜に、月也のねむとよくすくまし月  
江ノ島

後鳥羽院御子

塩の浦のいはれをうるほの松  
人やし人のうえマシとしおの月の君の月ほ

又十三三のゆゑ江上霞

太上天皇

子すはくマツテヨリの江の浦もとじきもと鳴

元久のうきよ水江考詩やどりと

醍醐入道承ち取人た

春乃くわをのうへ舟ほくごくとてうきを

百尋す波はなし 皇太后文も更後處

月弓の浦をけくみこといのうともよし門の波  
後二位家隆家りく浦扇さりくとを後出で

け。 美京充後朝

月夜の浦のちうてアシヒシヤアハラヒアシ焼る

大納言経信

煙にあまの因やとすまえとすまうる塩の浦

江上鳥羽院御子

順徳院御子

なま江乃へうみのくアレヒシカヒトキムサモの羅

名所百三十ヶ所中

河のマ乃さの山アの天のとさに切るテモハシ

朝氣を

辰ニ佐家隆

春のくじか月よりあらわすやせう切りとばつとし

川北長政家の方三十すよゑを

吉田半十入道赤松家子

考のまうあううううがまうしはううのわよみ假てて  
月花門に正梅花ゆく因いきを既て

今工即テ

ちううへうううううう書ときわうれとの梅の匂いと  
延長六年三月三十日梅を

中納言高氏

まううへううう梅の花のにおひへゆのしきの山里  
内々年三十日を梅にソレシ

院大納言典は

こりくふる宿といすゝ梅の花人ぬうけたにゆく  
三百三十中よ 中務ア親

今度入へてこりてアくわきのううべ物のものとすを  
寛永元年六月入日屏凡

入道斎を致大也

野よりとくにひきうる紅こうめの梅の花のとす凡  
寛治二年百三月す中よ梅並風といふまこと  
つは黒い梅の花をとてこの外にうりらむる

五治二年百三月す 亦中納言定家

うちわすりよまへひきうやくとく野の梅と  
梅とく 交至義春

春風のうきよる種い梅のも本すとおれもとくとく  
亭よば取り訥トのまゝ家と梅ともに風ト  
よもよとれやうけづ内後ふけ

行勢

思ひ出くみよこさうと、梅花泣にうしのびうじよ

廉系殿の女郎家うかに

平氣風

つ、富よ吹く風のにうひ垣の山梅のもマちうと  
更衣え善すとよとぬりつけ、日

光孝天皇山寺

拂花ちうとゆくよとあしんくこけといふうとく

毛一子 桃本人丸

つ、富よ吹く風の月げにあくつきにをしとく

梅花と後はけ、衣笠麻衣人丸

ノ乃とよつとうち月はくわくとてよつこをにゆふ稀

百三三中

後京極持段前を久太

あこてももことつや文書にうれめの考あつて成  
かこてももことつや文書にうれめの考あつて成

柳をとみる

一追赤人

せんとアテサケムカミヤウシニヤウシの柳ハトヒムウ

序柳を

人納言通方

無事てほすナアヒタマツ考風は流すら序の青柳の系

百三三中

中勢ア親ニ

利アヨシヨシヨシヨケツトモ若风の吹ともゆても青柳の系

前左兵衛皆改字

あやこにしナリれやま柳のいづれで考風の吹

道助は親ニ家六十三三中

辰二位家隆

えがくの考風吹くへあくゆうとあく月也ア

中務卿祝王家万首三中

中納言

えがくの考風吹くへあくゆうとあく月也ア

後久我前大吉大友家十三三中

士門小室相

春ナキハツシレシトキクはくの衰モナリ月也影ト

春戸の月をよみ　信人納言那須

月氣乃ともしうとといひて考へあくれば思ひすめ多

中勢で觀る

かす川もあけてもさうの神よりすら考への月

延喜二位家隆

掉姫の氣比神もゆくよもうとする考の月つを

建保二年万三のま事

入道赤鬼大木

月がるるよきすをみてくわくあじえふ

ゆゑをもん

衣笠赤け太

い乃くこすりよののめに月をみてくわく

ぬ万番うるよ　二条院讚岐

アヨリこちは雪でこしよど考ひしののよもすみ

まのすけよ　延喜二位家隆

うつ中にきくうまいにいのういほやう考のかうふ

後京極橘麻鬼大木

今してよしむかづか全の洞あけとしよべく那

あまう候はけよ

前人納言那須

御りあること考へて人引くよふしも

たすこ

たたた

やまとねえと思つて構ひる間にとげつまつ

後毛野虎之郷

みことやまとに候初てももくわくすの上

後堺河内民アマ典は

よきよみかにの白毛又見うな(たアミ)

建保二年百四  
延二位家隆

梯たまゆきけりがくの上すよ(は)白毛

まよこりキモ  
順徳院ヒテ

白毛ア花むら(よし)構うるも(か)この上

よみ百番ヒタチ  
大毛ア有家

タリ(ア)うちの(一)也む塵(の)く(ち)あ毛モナト  
行路(の)花(の)シノコ

文原清輔納

ヒキ(よ)花(の)柄(の)成(こ)まつとよそみ(い)る(事)白毛

たす中(よ)  
藤原雅有朝(た)

す野(一)たま(か)の白雪(ま)つとよそみ(い)る(事)の(こと)も

左事(た)貞(ま)遠

白毛ア花(の)れ(よ)こみ(い)も(か)て花(の)白(を)

入道前右段(た)

梯子のくじもうちのうえきじアラサコ考みの  
は成ちへるあ折家屏风よ

文五七桂

日くよつ考のくじにゆくにけろと梯のふ  
名所たごいふを 前中納言家

りよみくよするのまの梯花考せきこうアシテ

速ち六年三月三日す今よ梯を

前左段大木

モヒナリすたすとあよしや梯よ

日くよつ考の内ほの

續古今和琴集卷第二

春琴下

龜の山内と吉野の偶をあらうべし  
うへふへたのつけをすく

天皇

春の山内アリテミテ野の花<sup>モミジ</sup>アリテ  
家のすきよもものう

中務卿親王

さくねとすくまやまくまの神のむよつ代る  
百三十人よよとひけ

洞門持教大法

多々やうれ衣の神アリテシタマニテ花のむよつモ  
麻人納言翁家

御とう乃事の偶比た向くええよく匂ふ春風  
清慎云月輪ちだたみよけぬははは

平兼盛

山偶あくゆくをみにふもぢくと風やねよ  
達磨の山南殿の花あしてゆすとてうそ  
ぬけ

後鳥羽院

吹風もゆゆれうせよ花すすめえまに

建も六年三月三首す

小施行家

かにそくもあわねのえやくはうじらうつマもえうほ  
たすゆ

右と中将經平

書やすし考の日教ご思へうをみくわふ事へよあれ  
寛治二年正月三日見だりて

太宰権師為經

みくわ作りのことを承りてのくよとあひ事へよあ

致へ

考可也按察

吹風のうめをうひて是をちよと許へたのけ

さへきよけくはの有ることをよめ

後は性もへ道麻用ひを取下

こゑぬいみれひといわ家のたう人のふけぐれ

元月正月三日よとけく

後京極持政前を歎大

よこすに座すやものいひせんと人のものさうを

ひも二年十三日誦へふくよ静見花さり

しき

太上天皇

めれまねやとの孫のたう我あづくちうくう

赤用白丸大

ちのぬのたゞりをにくく合ひをのべてあはれいとす

衣笠前内大夫

花<sup>ハナ</sup>くとも考へのこけどもくせよやうに、あを

延保元年内裏詔<sup>トシマニシテ</sup>御<sup>マサニ</sup>中<sup>ミ</sup>たタ

前中納言家

構<sup>ハラ</sup>う氣<sup>ヒ</sup>のくに<sup>ク</sup>書<sup>シ</sup>め<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>ヤ<sup>シ</sup>セ考<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>うち

月二年の<sup>ムツニ</sup>の<sup>ムツニ</sup>詔<sup>トシマニシテ</sup>御<sup>マサニ</sup>河上<sup>カワ</sup>花<sup>ハナ</sup>

花<sup>ハナ</sup>のむ<sup>カ</sup>れ<sup>ル</sup>御<sup>マサニ</sup>手<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>トシ</sup>と<sup>シ</sup>くら<sup>シ</sup>河<sup>カワ</sup>も

久壽二年二月人丸<sup>ヒトマル</sup>船<sup>ボウ</sup>清浦<sup>キエイ</sup>納<sup>ハシメ</sup>志<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>

は花<sup>ハナ</sup>下<sup>ト</sup>言<sup>ハシメ</sup>志<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>と

左京大史郎補

余あれいもくの考<sup>シ</sup>よあひ是<sup>トシ</sup>に<sup>シ</sup>斗<sup>トシ</sup>花<sup>ハナ</sup>み<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>と

延保四年の百三<sup>ヒ</sup>と

入<sup>ハシメ</sup>道<sup>シ</sup>赤<sup>シ</sup>太<sup>ヒ</sup>木<sup>ト</sup>

ゆりく無<sup>シ</sup>くと花<sup>ハナ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>くの考<sup>シ</sup>人<sup>ヒ</sup>思<sup>シ</sup>し

花<sup>ハナ</sup>の<sup>シ</sup>中<sup>ミ</sup>に

枝<sup>ハシ</sup>毛<sup>モ</sup>根<sup>ル</sup>也<sup>シ</sup>等<sup>シ</sup>

ち<sup>シ</sup>考<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>野<sup>ノ</sup>の<sup>シ</sup>は獨<sup>ハシ</sup>つも<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>むの<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>て

故郷<sup>シテ</sup>た<sup>タ</sup>て

民<sup>ヒト</sup>都<sup>ツ</sup>て<sup>シ</sup>花<sup>ハナ</sup>

左<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>せの<sup>シ</sup>人<sup>ヒ</sup>と<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>

事<sup>トシ</sup>よ<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>

元方

あまねす花ノソと思へどアシカシモトナ鶯の鳴  
近ちに東家之屏风

貫

かくみにわうとこ思へ候もぢりを後うつて寺上  
西園もしくたうわうく候はけよ中よ

入石兼義太夫

昔里のそとをモシム子し都つじし寺の夕書  
かうえてもうやうう候たゞるゆきにようて  
弘長元年百三十日うちけよむと

赤人納言翁家

ううううちうゆみーと候たのこうを面氣りて  
む乃はぬいしこせけりへよづりけ

月花門院

聖朝御花のゆうと草木下に拂ひ多々のつゝ  
花よりぬうけりへよ

堀河院中官

まゆゆくとーと候たうの多よゆーと  
日吉社(又多よゆーと)れけよ

後鳥羽院中官

あらゆうとくよあ夕暮れもむのえいと

夕暮りあむやうにくる月をといてや花火とも思ふ

五七二年百三十

後京極持致赤を表す

アヒトてねえわふとのつゝくよ月を起玉休け

百三十中

九条左大臣

笑ゆふもそわづきうづくまの風をもくちゆの月

月のはじ裏の女房あ園中の花す風すけく付

かわゆかよ

入道を致す

あすみうたのまの月をと月は圓乳さくすのと人

春う乃中

參議貢平

あつるむ乃つみの秋は雨よかうはてくすら考の月

月前落花ごつづきをよみけ

内大臣

今して月をふうとやりしとむちくの有明のえ

千五百番う乃中ニ多聞賛岐

よしよし考の有明ちむつ月をおりとおもひも

日吉社よりみくちあげまうに

五三佐知家

今まく雪をあけりわからみよつづいたれど

歌ノ子

船恒

すうひのやう日あれと櫻花ちうみのすいみを絶  
あは皇后宮ちう門右大臣家より因多  
内三月桜のこわに上達部殿上人參りてあ  
うひけよかもくとさかく

大納言經信

をちうへよ吹ゆ凡のまつとちうじじもとえよ扁

花うらえ 鴨長明

吹乃いさきうのまつと翁凡よ梢とよくねもをみト

百三十中よ 左大臣

恨じつと凡のまつとよくねとまつものうに年よ

前用白左大臣

上稱られとやわに喉うりものうてよ考見うく  
歌ノ人通 性助は親王

うすくに上りくそくちもとあつと見のほうと  
文承元年内裏に上りける百三十度上院

花を 大納言良教

支川うち花のへ雪吹ひそぎて凡のう度のほうとせ

支百番す合テ 大納言通具

吹くへやくへ凡ばかりきて門もくわ度の花のうとせ

宣教門院丹後

春山よあづれぬ毛やゆくしおば元くもと門さう

陽明門院房姫まこ半はけの内内よりおる  
れけと又の日むのちうけをもとてちくば  
けよ 杜杞是を度

あこたすやうじうちとのもやうらへんをも候うが

致す 式子内親王

夏乃うらうりうも風かげに走りすまきの懶寝

正治二年七月十四日

麻大納言忠良

思ひのまほよ向もまくとすとまのをト

宣媛門院丹後

・ つとみにむちう事の朝りを後すやのうとむ

春ううく 人丸

あやといくよとくとく稀考の氣はうくゆを

躬恒

ちううにあゆわを稀もゆくと風のうとむ

名高道助は親玉家又十日よし花を

ほ二佐家隆

・ とくとくめりうのひまう氣の他、むとあります

西中思花ことを後鳥羽院とす

山姫のことをお地アリともとてあれてます

雨夜思をこりてとくのまことじつありけり  
けりがそよ 一葉庵印

くもよみの雨うるしてあむを考のとすれど思ひけり  
寶治二年百三三日

麻門大老

かよつてと思へよつてふつむをこすりと印 別を  
たす中に 入道麻門収大老

お風せくさゆうすくのもうくはうすく風よかとやれ  
源隆頼朝

しわく凡てやんを恨うせりうしめくわく

税部成彦

よ野河もに水ア風アもちれハ底アハ隠アハ波  
近喜十一年卒るたす

坂上毛利

水アヒリヤウたのをみれい考ふくと脚にけくふ  
近喜

山邊赤人

考の野にすまれしとすら我のをかゝとづのよ  
夕草葉こよまと ト上天皇

あらうのそつき生ひ夕方こよまと ト上天皇

阿蘇キ

後鳥羽院御

おけの所の所とをすくそつて名波にかどりをす  
文永二年七月十五日とことうとく七百三十六人

くよもとからよ鴻款を

藤原光俊朝来

安田一郎のアマタ金子のうらのがうを

田家款を

徐賀門内堀付

咲木をアキラ水よれにて田中のやとひのるのふ

款を

衣笠衣ゆえ

山口へ考ひまわのまよとアリよ風とれと吹のむ

序款を

麻大納言考家

もと詩流せつをすいと序にかねくこげよのむ

田代持家方をす

前中納言宣家

久より考じれりよのたうむば中門の義丸

支那半島入道赤持家方の三井百三

言考を

考じうかしりうのちよ愧つとく月にほろ

百三十九けよ印を

麻大納言考家

ふとすすすす所の文嘉のまことと考小

父もをばけり。中務卿親王

嘆すをアモ代り折々のもじともあわきをとすで

五郎右衛門

従二位家隆

おれにもおてゆるる匂いをよしとあをす

毛一子

貫之

まいかやうねのうてよあやまくしてれらを嘆てまト

三月にさうの日あえを

近島ち奇

う言てもすよあはい後浪のつきてのこすとをせん

建保四年正月三日ナリ

慈鎮大僧正

なたのてよきのわざはおもづきとくものあよげト  
暮春のことをよすとれけ

後三季庵ち奇

引考乃とくとめこゆかわく相坂山のたもち

四月花こりふとよもけ

後院光後納也

稀よあつアシ人の月比較アツキ考をくわせむを

三月畫のと

かうくのアシくとゆれ行くやうよ考のやうけ

右と人将通雅

かづくくまそといくみれりしとあよ(け)の考の引

人江より

わがれこいやうかのこく思ひれちつう考をすすふ無れ

立至え方

毛也代考のくらむおもていづくり教と令下すすマ

入道前を教人未

人ハツニ毛也代考の考のやつれ

フヤカツドリ矣

續古今和歌集卷第三

夏奇

更衣の会よまとぬける

ち即門にちテ

きのゆくるれい被のものにてゆくらむえつとト

文治六年女即入内屏风秋

後京極御教前を教人未

今下りしよ代をとれ初えまに即(け)ま交夜ト

肯支人のま

中務マ親ミ

花うち乃他まくじからく更よ事と山稱る

三百三十三中

雪れやうをし鳥乃とす構へるくとの風りつふ  
みむのくを

冬上天皇

とけねやまのとせきを爲むのこは、考のこゆり、

源後頼幼丸

桙くよちのつゝいへてもみてとす考の年上

弘治二年三百三十三中にやむを

中務マ観

わようう考のつてごみくはゆもくはゆも

牆やれよとたと人ね家行  
まくこうてとみりてとけのうやうもくにかうふやう也

文永二年七月七日承とくづくく七百三十三

人々によよとふくよくやむを

大納言考家

やもれゆき雪のじくとて四月三月の乳マニスし

夏うの中

延喜後家隆

きくめゆつゆとし方モアツクナカヒキをマテ

承元二年冬使秋館にこぬつとくわく

にけり

前中内ちくま家

思ひうちのゆかへ草毛をアフクふく不

堺川にゆは三百三十三

祐子内親王家紀行

年をへくぬのむとのやひもえもうねる

歌子 小辨

きよめし人よアレ郭うつせひは我ふきとよ

郭三月をまくよぬとれつとこりく

麻大納言云

月あうと絶うぬのゆゑもみをいそりをとく

歌子 天曆序

かううぬのゆゑもみをいそりをアヨミ

むし虎序

何のよのううりをまうそひはうあ

寛治二年百三すよゆめうごくと

太上天皇

かよちくわきつとくぬ三月を絶うく

家に百三すよとけよ

内虎持歌太夫

書乃あすの行

中務卿親王家百三すよ

源真氏朝夫

くわきつとくぬ三月を絶うく

建も三年十<sup>ミ</sup><sup>テ</sup>中<sup>ノ</sup>

衣笠前<sup>ル</sup>人<sup>タ</sup>

まの先を我の手御<sup>リ</sup>引<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>我すやと<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>正  
百<sup>ミ</sup><sup>テ</sup>中の<sup>ノ</sup> 朧<sup>ル</sup>人<sup>タ</sup>也

休<sup>ム</sup>也<sup>ハ</sup>いつたる里<sup>の</sup>を<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>郭<sup>ム</sup>も<sup>レ</sup>ぬ<sup>シ</sup>也  
名所<sup>シ</sup> 俊久我<sup>亦</sup>を<sup>シ</sup>人<sup>タ</sup>

引<sup>リ</sup>す三輪<sup>の</sup>秋板<sup>す</sup>さ<sup>シ</sup>國<sup>ア</sup>あ<sup>シ</sup>津<sup>シ</sup>御<sup>リ</sup>  
取<sup>リ</sup>す 皇<sup>モ</sup>后<sup>ヌ</sup>又<sup>シ</sup>更<sup>シ</sup>成<sup>ス</sup>

何<sup>シ</sup>を休<sup>ム</sup>也<sup>ハ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>わ<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>被<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>也  
謀<sup>シ</sup>功<sup>ス</sup>也

休<sup>ム</sup>す宿<sup>ム</sup>ふ<sup>シ</sup>郭<sup>ム</sup>雪<sup>ム</sup>な<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>也<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>  
大<sup>シ</sup>ナ言<sup>フ</sup>行<sup>フ</sup>信<sup>ム</sup>の先<sup>テ</sup>は<sup>ケ</sup>タ<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>ほ<sup>シ</sup>の時<sup>を</sup>

きて 小<sup>シ</sup>ヒ

き<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>ヤ<sup>シ</sup>行<sup>フ</sup>可<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>度<sup>モ</sup>風<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
始<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>の裏屏<sup>シ</sup>凡<sup>シ</sup>

乞<sup>フ</sup>け<sup>シ</sup>行<sup>フ</sup>恒<sup>シ</sup>

引<sup>リ</sup>すよ<sup>リ</sup>すよ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>月<sup>ム</sup>風<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>人<sup>タ</sup>入<sup>シ</sup>  
月<sup>ム</sup>け<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>也<sup>ハ</sup>中<sup>ノ</sup>

貫<sup>シ</sup>

東<sup>シ</sup>風<sup>シ</sup>じ<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>え<sup>シ</sup>月<sup>ム</sup>の里<sup>の</sup>月<sup>ム</sup>鳴<sup>シ</sup>

郭<sup>コト</sup>

月花門<sup>ツキハナモン</sup>

かうふる霜としのすゆる雪のいいくの月を鳴ら  
人ぐよよとけら白に郭<sup>コト</sup>と

中勢<sup>ミサセ</sup>親<sup>シヨウ</sup>

一季<sup>イチジ</sup>をわすれ月を鳴らすやか<sup>カニ</sup>うり<sup>リ</sup>す  
山<sup>ヤマ</sup>路<sup>ル</sup>郭<sup>コト</sup>と

り<sup>リ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>の郭<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>月をかくち

歌<sup>カタ</sup>

山<sup>ヤマ</sup>邊<sup>ヘン</sup>人<sup>ヒト</sup>

足<sup>アシ</sup>引<sup>アヒ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>すやもく<sup>ムク</sup>代<sup>ダ</sup>き<sup>キ</sup>後<sup>アフ</sup>ま<sup>マ</sup>だ

中納言<sup>ミナガクニ</sup>敷<sup>ス</sup>忠<sup>トシ</sup>

つ<sup>ツ</sup>の<sup>ノ</sup>く<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>男<sup>ハ</sup>ア<sup>ア</sup>マ<sup>マ</sup>リ<sup>リ</sup>す<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>か<sup>カ</sup>や<sup>ヤ</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヨ</sup>う<sup>ウ</sup>

五<sup>ゴ</sup>七<sup>セ</sup>二<sup>ニ</sup>年<sup>イ</sup>人<sup>ヒト</sup>と<sup>ト</sup>百<sup>ハ</sup>そ<sup>ソ</sup>う<sup>ウ</sup>や<sup>ヤ</sup>け<sup>ケ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>エ</sup>よ<sup>ヨ</sup>

よ<sup>ヨ</sup>と<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>け<sup>ケ</sup>

後<sup>アフ</sup>島<sup>シマ</sup>み<sup>ミ</sup>か<sup>カ</sup>う

や<sup>ヤ</sup>む<sup>ム</sup>の<sup>の</sup>を<sup>ヲ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>す<sup>ス</sup>や<sup>ヤ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>す<sup>ス</sup>の<sup>の</sup>初<sup>ハ</sup>音<sup>モ</sup>う<sup>ウ</sup>

夏<sup>ハ</sup>乃<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>の</sup>中<sup>コ</sup>よ

秋<sup>ハ</sup>よ<sup>ヨ</sup>う<sup>ウ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>郭<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>す<sup>ス</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>す<sup>ス</sup>

日<sup>ヒ</sup>裏<sup>アヒ</sup>に<sup>ニ</sup>百<sup>ハ</sup>そ<sup>ソ</sup>う<sup>ウ</sup>け<sup>ケ</sup>く<sup>ク</sup>付<sup>ハ</sup>や<sup>ヤ</sup>月<sup>ツ</sup>郭<sup>コト</sup>

中納言<sup>ミナガクニ</sup>敷<sup>ス</sup>忠<sup>トシ</sup>

う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>月<sup>ツ</sup>を<sup>ヲ</sup>け<sup>ケ</sup>て<sup>テ</sup>あ<sup>ア</sup>ひ<sup>ヒ</sup>か<sup>カ</sup>き<sup>キ</sup>

西園<sup>ニシイ</sup>も<sup>モ</sup>通<sup>ス</sup>赤<sup>アカ</sup>を<sup>ヲ</sup>家<sup>ハ</sup>す<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>海<sup>シマ</sup>邊<sup>ハ</sup>里<sup>リ</sup>に<sup>ニ</sup>云<sup>ウ</sup>

とを済はる  
麻人納言考家

今雨ノ夜は野邊にてすなみす浦にまじき  
弘治二年七月には河の十三日野外郭を

小豆行家

今夜も雨にさそつて馬車より野のことを鳴らし  
五十三日度観郭を

麻人納言考家

リリリリ鳴一矢も切アレハナリよとのこすをの壁を  
弘治四年七月十四日

入道麻人考家

かくさんと人よろしく内鳥居のへい報のもうぐく  
建ち弘治三年三月三日里内

是屋入道麻人考家

やうけわすの里内郭をくねり下りてからくらむ  
信人納言朝家とくとおとおとこくわてた  
うとみゆけり郭を

安京院實納

胡芦あざ小めりあてきけ、内ちづくくらうてよ鳴す

夏三月中

光後納

あそごとくとくうちれりすうゆまほに進よせて

宗身は師

ゆきふねすせんにほくとすく度鳴し初ねども

侍守國平

草乃名よ毛丸アーラウ内ち二月セニシロニヨリの里

寛治元年十月有のすくニス月東

大師門に小室相

黒子すを毛ア二月のアラスモサヒシテアリ

中官人史雅也

アラスモサヒシテアリのアラスモ今い二月ニキアヤウシ

雨中郭と 蓮生は師

かきうと毛アナムニシミテ泉アマリツコ月の西に鳴ラウ

歌人 貫之

みくれくす、る二月のもやも草アマリツコアウハハハ

堀河院山寺

エモツモヒの町アマヤ草アリツクレヌ脚よけくも、  
人のモモシクす毛まじきてつづりけ、

和泉院

カナタモ毛けくわやうのあらふく人の脚よけくも、

百萬石の申上 ちくに院山寺

あやめす毛の黒アキアリツクレヌ脚よけくも、

竹下

寛治二年百三月に早苗をよめる

斬伐并行は

をひ田にまつすら水の邊と社地いそくうこまへまえ

兵部卿隆親

く社ある山田のまむれをやうてアサモニシテム

延喜二年中支屏风

貫

けとハ平扇もいゆくを以てわざとせきこりうる

早苗を

よみへ

今朝すもよきこめて社有門アカクハシキヤヒ

五月五日

多羅比耶

五月五日多羅比耶レシタ水のわとこす風と風け

洞院持取た太夫

支う乃やーのものでの施<sup>レシタ</sup>よめにえてもさく五月五日

洞院持取家の百三月

辰三月行能

五月五日火のまなびとアツマヒトヒムカ布引の

麻中納吉室家

玉鉢アツマヒトヒムカ布引の

唐琴門院少将

思ひけりうちはのゝ月面にとて水の闇でうらと

立タリす

祐感は師

又月面にうきゆうてうき葉ハラカうてうき葉ハラカこの、要鶴

雅鶴親シロカ

まく、秋月門にてあれ、あす月圓ツキツヅクもうらす

海シマ立月面タツツヅク

辰二佐家隆

ゆくよ／＼波ハタハタしわよ／＼波ハタハタ人の波ハタハタす／＼波ハタハタ月面のう

立タリす

まく、秋月門代ゆくえの町をさの、鳴ヒナギきまくす／＼

百萬ヒヤウの中ノミ

土脚門トコドアむけす

うつ神乃匂いを凡のうりいとも鶴ハクより仰アゲうらを  
ひつそ／＼花鶴ハクよせりとしゆくまシユクマをまく、神カミよ／＼那  
山ナカニよすりうけ／＼百萬ヒヤウの文モチ

寛連は師

わちうか花鶴ハクのうりいともわぬよの、ま／＼じつ／＼ま／＼

守寛は親王家の又十ミテよ

皇太后カウテイと史後シホ

あか／＼う花鶴ハクの神カミよ／＼ま／＼あけ／＼う／＼の、左

ま／＼右カウと花鶴ハクよ／＼ま／＼あけ／＼う／＼の、左

み／＼右カウと花鶴ハクよ／＼ま／＼あけ／＼う／＼の、左

致一ノ子

慈鎮大臣

ララ神のちくららうと古里の花鶴はあうかりあ

大内言様人

鶴乃花ちくらのリサスアシヒヤウル

順信花ちく

ミタテアシヒヤウルセキトニモアシヒヤウル

正治二年百三月ニ  
前中納言室之院

ニキモトモアシヒヤウルセキトニモアシヒヤウル

鶴けと

後久我前を改大内

もやと阿ミをこつてある萬火のよしむすれ勿々とすめ

寛和二年四月裏ニ

桔大内言成

ニキモトモアシヒヤウルセキトニモアシヒヤウル

夏三月 中務卿親王

アシヒヤウルセキトニモアシヒヤウル

前内大臣基家百三月ニ

鷹司院師

アシヒヤウルセキトニモアシヒヤウル

百首ナシナケルは是を

外庭行家

毛呂思ひマナリとくれぬの下り盡のひもへこむ

夏の月中よ

源重之女

支乃へまほへとすと横の戸をあわててあづ

中勢令婦

月の下枝の板戸ごとくすらあきよして印水鶴を

支乃を

入道旅を支乃

あよしすよもわの清水うごみてれよみの支乃の月

覓性は親も

さわよみかわよみのをゆれてお支乃月月

旅を支乃

魔ねえといとう支の下をゆよひふるも月の月

引く

後鳥羽にけり

支の橋がまよつて吹風に入りゆくよひくしの支

家

後京佐持をあく下

鳴き声をかくふは旅ひてお清淨いふ夕暮れ度

百丈三ツす

中勢マ釈

ね凡てらぎくく旅をかかほのまこと夕暮れ度

後鳥羽にゆきりけり百丈三ツす

入道旅を支乃

凡てのゆきりの夕暮れ度

村々をこしよもと 正三月和室

かやの火の煙すのとふ々をねむすとあらわすと

歌へ

吉宗業平勢

言ふときえがくしむしむのまことくわせ

瞿麥を

小庭の家

あそびようともんはなきこぶくつう中をひらひら

タツイのけいとすくよも

平政村納

五郎のちうのやのねくよわやうてうちタツイも

正月二年正月

小庭

、咲玉をアキラムノトヒテアキラムトアタシの

歌へ

桝中人丸

あさ道に秋アキルシテノ野中ハ草トモアカヒ

百日かうよ

後鳥羽院御子

ちうてのくくうふよか草モアリトヒテシヒト

支う中

後京極橘貞兼

れ川アキルシテアリトヒテシヒト

百日かう中に支う

後京極橘貞兼

出づる水をとく入く水落す——中河の岩

ちとほ親王家の又十ニテの中ト

赤中納言室家

うちかひくをみつてあらものとて税也經よ身小難凡

杜納涼ニシテリト 延ニ佐實

タスニカヨレシリナガスモアタムのノムニ其のトセ

ルモ元年百三ニテナラヤ

信實納

はの國からアリタタスアガのノヒテ難凡トキ  
支凡ニシテモ 德も大ト  
タミ代ノタタケ吹風の風ミテ故ナシト

支後ヤ

橙中納言長雅

ナニア河をくえアシトテ流のアヤヌハツナラシ

延ニ佐家隆

ヌクヌクアシトアヤハツナラシ化上にシテモアリ  
延保百三ニテナラケヨ

赤中納言室家

ナニア河をくとの流よシテモアリ

テのナラケヨ

續古今和歌集卷之第四

坂哥上

秋三日後は今 中納言家林  
はやまの坂うき思へ衣も小吹くは凡のとよくとも  
百弓三つせ中に 順徳院坂哥  
限わざきのよぬるかさうれのとすみののとすみののとす  
建也三年新作うちよ

入道前多久人未

白あ乃引くをの唐赤系にあらまよ坂うき  
前右人未

あひすの衣も涼 祢めうよのあはてを坂うき  
式より親正

坂うきひくとあはてを吹風のまよしむゆけト

寛治二年百三三弓早坂の名

新作山ねは

坂うきひくとあはてを吹風のまよしむのやうを

麻左人未

吹うきていくとあはてを坂うきりや他の方けも

坂うきの

急鎮人臣

洞すうづりく他よあぢうくゆく人の坂の見

後鳥日也の片断を撰むる

前中納言家

すくやくあまの風やもとへ恨てう吹抜の初风  
江早林と云ひて 中務卿親王

凌<sup>ニ</sup>テリタ流もくし伊と水海のまくやくの風也高風

道助は親王家のふたりに早坂

參議雅経

え蟬乃ちよそく春も歌きてうどん夜と故にう吹

歌<sup>ハ</sup>と 錄金右介

今ようは寧<sup>ハ</sup>く風よりくのまくとよ坂の夕<sup>ニ</sup>セ

嘉保二年柳芳門<sup>ル</sup>前武令の詩

捺入納言<sup>ム</sup>實

西葛<sup>シ</sup>山<sup>シ</sup>もと<sup>シ</sup>もと<sup>シ</sup>ね富<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>くア坂の風<sup>シ</sup>や

坂<sup>ハ</sup>ナ<sup>シ</sup>の<sup>ハ</sup>中<sup>ト</sup> 今<sup>ト</sup>上<sup>ハ</sup>脚<sup>哥</sup>

故<sup>シ</sup>まく<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>け我<sup>シ</sup>吹<sup>シ</sup>の音<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>秋<sup>シ</sup>や

更<sup>ハ</sup>二<sup>三</sup>條<sup>ノ</sup>兵<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>佐

かよ<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>方<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>上<sup>ハ</sup>脚<sup>の</sup>背<sup>シ</sup>風<sup>シ</sup>

中務<sup>ア</sup>親<sup>シ</sup>王<sup>ノ</sup>家<sup>ハ</sup>百<sup>シ</sup>み

平<sup>シ</sup>村<sup>シ</sup>訥<sup>カ</sup>た

あを<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>秋<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>來<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>日<sup>シ</sup>秋<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>日<sup>シ</sup>

奴寺中止

母は師

疾乃まじうよし用て吹凡よもじう洞アホミシノル

後も外既下ノノく奴ナモ撲テ今はけト

反二位家隆

秋凡ばらくとわの事アリと疾乃まじうね文書ト  
文百番テ食に 後も外既下ノ

ノミトシタタラタのノリ よしもあそね高疾のとを  
百も七十の中止 ち席門也ケテ  
タタラタの疾を吹凡のとみや奴を一も洞ふ  
ミーだす 女席風よカミ

故乃よりアマリニ御のとテ吹よ疾アリのとを用ト

夫董也ト付事人馬のとつ名は疾哉

よみ人ノ

吹らうとトナリモ秋凡のアドアハ疾乃うりアリモ  
疾凡セ 天台庭も邊覺

疾のとあつけやをむゆ(よ考)ううノルのア

奴寺中止 犯左則

吹よりアガリモトケテ吹凡をえまくやとづけふト

山鳴赤人

天のけ冰ヲ草の秋凡ヨナリヒトモ死はシムト

天河アリの河ゑに私しとて故にあくこいよしをや

七夕ニテ

小野驥を収めた

あまの月夜立てりやうやうにやまのものあすじも

七月七日東ニキルヒトナリとされけ

上ま門也

言を西門モアの私トカド門外<sup>トフ</sup>ありよ鶴の鳩

七夕

まニキル

鶴乃ち一のアリとするえりわいのえを存<sup>スル</sup>也

延保二年の百<sup>二</sup>三<sup>二</sup>夕

乞明幸ち入石麻<sup>シマ</sup>改<sup>ハシマ</sup>久木

天の川くもあをら<sup>ク</sup>と題によりわいを私物のと

七夕のじ

素還<sup>ハシマ</sup>は師

あまの河<sup>アマ</sup>のあく<sup>アカ</sup>、極<sup>ヨリ</sup>や望<sup>アシテ</sup>とまく後<sup>アフタ</sup>とけく

乞明幸ち入石<sup>シマ</sup>あ持<sup>ハシマ</sup>家娘<sup>ミチコ</sup>ニテ<sup>シテ</sup>よ

正三<sup>ミツ</sup>は志家

かうくう乃<sup>アマ</sup>雲<sup>アマ</sup>の鳩<sup>アカ</sup>をけれども中<sup>アマ</sup>月<sup>アマ</sup>日<sup>アマ</sup>

ルモ二年百<sup>二</sup>三<sup>二</sup>七夕<sup>ト</sup>

中勢郷親<sup>シマ</sup>

七夕乃<sup>アマ</sup>云<sup>アマ</sup>の鳩<sup>アカ</sup>をけれども中<sup>アマ</sup>月<sup>アマ</sup>日<sup>アマ</sup>

あたは是<sup>アマ</sup>后<sup>アマ</sup>えじよ<sup>アマ</sup>人<sup>アマ</sup>と<sup>アマ</sup>う後<sup>アマ</sup>はけり

六条右大臣

いづれうれつとまセすのゆうねがわすらと、

歌一曲す

康資王母

やくてもかれてやわシ七夕の印シよきよみの取衣

七夕のことを

箭中内言追角

天の河アマガタ初夜ハツヤとやしちの空アマとさううえ

故のちうゆ中シる

今上御哥

ひきと乃姫のよしとよし思シハキコ一星ヒツキもえ

中納言告氏

天乃けいじふゑてシ七夕のうよわシとへづくシとへづく

天台庵アマタニも隆覓

銀川アマツチのりシマ娘マコトとくらむれシとくらむれ錦アマツシ

まむ香アマす良シに  
麻人アマヒ言忠良

竹アシのまにわシとくらむやシのれシとくらむやシのうれシとくらむ

ちシ別シとくらむシとくらむ

望アシは河アマツチとシのうれシとくらむシとくらむ

七夕後納シと

天皇アマテラスと天アマと

立アシつまシ河アマツチを吹アマツシのあシし冲シし冲シ下シ

乞アシ命アシメ入アシ道アシ赤アマツシ持シ家アシ候シ三シ月アシ奉シ

用白麻アシメたシだ

りどやも候句すとよきのうへや宿の姫姫の花  
妹姫のあト月のやうれうを

後頼納木

・ 松姫の下年一月のやうすわをア原の松をよしは  
正月二年 五郎百三すよ  
さるけり祝也

う衣うれよいわむ様らかく風の野の姫代納露  
糸と 大貳三臣

きゆうにかけみまき姫姫の原井せ丁又桔の风  
交治二年百三すよ姫房

鷹弓把抜寒

えふか庭の坂とあけのとれすよゆう宿いわしと  
十三すすりけり

前左人丸

引てアゆく床ひよしの坂によし安えいく庭の姫

三九  
人丸

姫乃花ちかみにいはの坂のあとりふやうくまのつむ  
女姫女郎の麻糸合のすと判とく廢れま

よしと行け、 近身郎等

花乃花ひよしにみゆき大娘のひきじりあひ  
娘の野ゑのりよす

行勢

咲もあをみれこもわづね故の野、りともれすにゆきと

草花とよちる 中務卿奥平親

夕景、がのじにみゆき女郎も我すとよよかやしす

後患は仰

うしきをまつて是れ女郎花思ひ、やれてあけうそ

本花贈り収入未家の前載今よ女郎むを

讀人不知

ふきとやへみゆき女郎も思ひ、よも見て吹け、

まゝ、五百三十七中、後も歌に片寄

女郎むにのゆすとにあきて、つたくれの聲と結び

達も三年九月新作、すと朝草花といふ

と、左を中持経平

白あのしれの、乃女郎もこれこづきけ、やまこうを

廉義家、すと清風を頬花

紀時文

ゆ水玉乳をうじき、女郎もとこのつを達よとむと

長久二年八月ね尾祐、行幸はけを考文

の女房車、もう車のもととて、さつ野も

う乃うへすうて、くわみほけをとま可え

にまつてはけよすまへるも

はうつとく後うしろ 中納言實

うらゆめくとすもありすまへるも

さひむけよあわす車くるま ようひ

りそけ

牛乳母

りそせうどもすも扇おうぎ よごまつへ

ひそ

清涼涼養文

たすくとくいもくとくがいもとあだうじ

中務<sup>ア</sup>親<sup>ニ</sup>家<sup>ハ</sup>百<sup>ミ</sup>三<sup>ト</sup>よ

中納言

わ思<sup>フ</sup>人の世<sup>ハ</sup>いわふかくもなけよけうも扇<sup>ふ</sup>

六<sup>シ</sup>宿<sup>ク</sup>く<sup>テ</sup>後<sup>ハ</sup>一<sup>ホ</sup>す<sup>ム</sup>と

ト上<sup>ヒ</sup>天<sup>タ</sup>皇

ゑすくとくとくよ<sup>ト</sup>氣<sup>カ</sup>わくわくの聲<sup>おこ</sup>を

建<sup>ニ</sup>のほ百<sup>ミ</sup>三<sup>ト</sup>レキカト<sup>ト</sup>

後<sup>ヒ</sup>丹<sup>マ</sup>内<sup>メ</sup>伊<sup>ニ</sup>郎

ことすくものゆくもよきくてもも<sup>ト</sup>まようね

妹<sup>ヒ</sup>中<sup>ヨ</sup>

中務卿親<sup>ニ</sup>

花<sup>ヒ</sup>扇<sup>ク</sup>かうの野<sup>ハ</sup>くとくとくに放<sup>ハ</sup>くうやく

夏<sup>ハ</sup>路<sup>ミ</sup>すくとくとくに放<sup>ハ</sup>くうをゆ<sup>ト</sup>並<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>笔

百三十中　後鳥羽院御

よりて坐て御納にうかがひこの用をとし

延保四年百肯

中納言家

までりうかまちの納す草へ枝のとう手に

あく門は小室相

なるとあたたえりえりよやうすやう匂い

上御門にうち

香乃おこわよきうるえのぬれにまえ後よき

夕言じくの宿からふと思ひわざりや神を

百三十の中　中務卿親

いたをふもとて故凡のやうにげてもかうはと

承久元年四月十三日

入道前を収人

吹く野ゑの風よ夕くれと袖よこゆうい故の白衣

印をよみ　控へ納言取納

故によび夕よいたづらに代りの袖よとく

寛治二年の百三十故夕

正三位志家

女娘じうらわよすをくをやうのわざぞりす

日吉社百三十九  
急鎮人臣

タリ書時々門澤のやうな水思ひにまも神は我をし

林久と  
麻中納言室家

秋より詔すとし出でりては黒のまゆりてと思ふ

建に元年辛未三月十九日

延二位家隆

日比くみへりあはばの國めぐるの里北極の夕書  
建承乃より秋官にすと詔けり辛未  
九月廿四日

後鳥羽院寺

えすといけの故に夕よりあそくやと他のやうを

みのりの是れからをやじらへてほの夕の夕書  
建にのむりくすと詔けり辛未の日  
神のをいにこころとてかくえの故に夕れ  
故すと辛ノトヨウケ付

中くよ凡てととと夕書のこの故に夕けま

詔すと  
控入内書及勅

夕書にいれるのかられいしるをとよ故の事記

中務卿祝

神乃どよごすれいしる用ふわいひす故の夕書

吉切家も入念前後家政三月十九日

前用白丸太

何事こうつるやかのと氣こう思ふ娘の夕言

寛治二年百三月廿日

入通前立多

ふしふいわよもじくまくといづれを娘の夕言

娘す中よ

おと天皇

我がこゝ思ひやね因ふそつ秋月の娘の夕言

月花門也

いふれいにモヤ、夕言の夙そ娘の夕言

前内大臣家百首す今よ

ちち門院小室相

月之妹のあいはりやうくうれび人の娘すすし

歌ノ久

平重時幼た

今すいかうてめのふくいそてといづ娘の夕言

信實幼た

わのまう思ふまくよのじくひや娘の夕言

左とすわら雄

吹風やうてまくし所をこいつやかの娘の夕言

平長時

さくまうりそくうとまう思ひあうれわ娘の夕言

百三十中よ

右と中お行平

う乃く思つゆのまゝやねのうれしきを

藻壁門にせわ

鳴りのゑひづくみわせうき重をし故の文言

ちえは祝玉家幸三と

皇太子后文子史後成

妹にゑいする所を我らの野狐のちもあく鳴す

三百三十中よ

中務卿観

かく鳴むるものきくすゝみ花の洞す

天保三年八月野まうきのう

親子内親玉家治馬

あらう乃かるくじすく風よみれててらものこ東  
百三十庚未けよ

衣笠麻門人

夕立氣が吹キとす頃風よもよとすよとす風  
娘のむすの中よ

後もねむけす

里のわようくの煙くとく月のとくとくえよとく

刀をひく

ほ二法教

出ゆまのへわよとをそひとくやまと月をうそと

文永二年八月十六日

太上天皇

おうへれ雪とのよしん吹すて凡と月のりくふる

承久二年四月裏まで秋月といふと月に

りとけり

正三位家

やみのあそてあそびとしのつまゆるすの背

七月をとせろ

ゑりとも雪あらすにとくよめタと月をうき

内侍持家家。万葉集八月

延ニは家隆

きくのと鳥のあゆすみとくとくの月

後鳥羽院とすけり。万葉集八

入道を家充

かくいの河との事。すとくのひとを出月新

月をとせろ。先後納た

りくあひていつく月を代ひゆく月とをせし

ひとす

前田大内 基

わすやくつづけ。雪落てかくと月落

後鳥羽院ひとす

やの秋月は朧マ。すと神よまごと夢をせしと

ほむおりゆけ。月をとくとくとすと

ぬけよ

素波陀ウ寺

是をこうモ乃アヒルノアヒル月のすみづに  
延保六年板を月さりしと人なり  
因とけつて、順修尼也

心わくは未士のアヘタもあゆレシトコヨムを故の月にま  
湖と月を

光明まち石原、夏安<sup>タカ</sup>不

うらやくじつみの月の鏡<sup>カミキリ</sup>すすめうちばの月に

月万葉すよ

前大内言忠良

いづむ代子の園マキモ月のわいの浦よき風<sup>ハタケ</sup>し

海邊月さりを 源師充

北乃園マキのまくら骨清<sup>カツラ</sup>をかくら風津<sup>カツ</sup>に

色紅<sup>カツラ</sup>も黒月 ちと天皇

黒乃名モ久<sup>ク</sup>く聲<sup>シテ</sup>の様<sup>シテ</sup>のこよ遠<sup>ハシ</sup>く聲<sup>シテ</sup>のこよ月  
延<sup>ハシ</sup>も二年八月うち月<sup>ハシ</sup>月<sup>ハシ</sup>凡

入道<sup>ハシ</sup>麻<sup>ハシ</sup>を<sup>ハシ</sup>木<sup>ハシ</sup>

すし月の氣<sup>ハシ</sup>を<sup>ハシ</sup>更<sup>ハシ</sup>よ<sup>ハシ</sup>い<sup>ハシ</sup>妹<sup>ハシ</sup>の<sup>ハシ</sup>凡

ははも入<sup>ハシ</sup>月<sup>ハシ</sup>用<sup>ハシ</sup>の家<sup>ハシ</sup>と

源後<sup>ハシ</sup>頼<sup>ハシ</sup>約<sup>ハシ</sup>夫

夫<sup>ハシ</sup>門<sup>ハシ</sup>ふいすを<sup>ハシ</sup>し<sup>ハシ</sup>う<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>こ<sup>ハシ</sup>ひの月<sup>ハシ</sup>を<sup>ハシ</sup>に<sup>ハシ</sup>ね

文永二年八月十五日<sup>ハシ</sup>ト停<sup>ハシ</sup>午<sup>ハシ</sup>月

鷹司院 帖

月照流水こうとを 豊草は仰

月報をあこみてアラナギアリテモ水のあきこよき  
ちゆ門右人た家三うきよ後更月

少辰乳母

のくともかううと書生ていろとまうと故やとの月  
鳥取も山と月と 京極前用口を教へた  
もうちもいのすとて是をきこよひそえすより月の  
晴りけはけは月をみく

僧の行意

よしとせよ野のことをおもむくと及ぶお月とみづ  
野外月と云ふと はや實行

雪とそらよつてあけ下の城とぞねよづ月ト  
ルも元年百三十二月

入道前を教へた

うのうあみの處の夕陰はきみちる故のま月  
海邊月と 平政村朝夫

凡くよしとせの夕陰に氣うつのいふ月のまげ

浦月を

摺大佐都官向

まゝ乃處のゆよのきすをやうやく月のうねりとし  
爰系信實納

名すよりてうひでんく明るさ夜浦をくすり月ト  
け月を 午内直

みすき月にうりとも月の氣を飛ばせばわうそり水の白浪  
歌へす 人内言行院母

みすみのうつはよあくわせて月のきのすすうち寄る  
よめ白春す家

みすみのうつはよあくわせて月のきのすすうち寄る  
名所あうゆ 朧月夜也

あらすまくちくこめよ月にうりかつぬにて月半も  
月五十三度よけよ

後東社移改麻衣子ト

まくもく心ゆよの月うよゆく行く類也因う  
月のうあうよけよ

慈鎮大僧正

えきまくらよ人のゆうよやよし月のうよむ

延に二年八月までをす所月五十三度

朧月夜也

あくやうよのりをやくえすア月のものう

皆りく人よすよすとまうとふと壁

支那之後納也

人をこうますわくあくとだいと見つ秋の月  
月す中よ 中務マ親也

人こわいの肩背氣よかうすみれ凡モゆく

赤中納言家

神かア心の下にアともりとをれぬ月

八十度中よ見月

ト上天皇

幾うくアラモチテ身を思はず走て月は暮る  
百度度ナウ一月セ

衣笠赤門太

ふうなうこの月とお廻さんて走て月は暮る  
走り年も入道赤門太家版三十度

中納言家氏

奴乃よの月、うそけせ中よ今もじつの三度  
月裏マハ十首うそくにうそけ月赤

草かと

ほほり家

我やね草矣よ月のうそくに神より外のあと  
宗法院内万度度ナウけ月

皇太后文書

秀しけるにのそしにやアトモ野原ア月のすとつあ

寛治二年百三月すよ野刀を後ほけ

麻大納言考家

草乃木野トとのゑよ宿りてえようの月の新ゑ  
建保三年四月のすちよ

大納言通方

レテの月の入てまももおむりまよつるとも  
之後幼き人くよ育むすよくとふけつ

五三佐和家

更ゆをいわよじをすらすよーしすくう月いさうす

月すす

麻大納言考家

すすきに牧風毛し一冬のゑこりる月ねせうえよけ

歌ノ

柿奉十人丸

よのじきよくみか地三月はえうよ雪の月マツシ

中納言家持

じと玉ねが更ゆアドキアをやくまよ月さよま

文永二年八月十日すうちよ漸傾月を

麻大納言考家

きよやじの八月十日文書

赤誠貞平

カミキチは更り氣の下にけどいあこす故に月つ半しと

欲入月

をと天皇

玉乃切くよじくよじのとへつてもる月の面を

引一ノ子

雅成親王

月のりき精ひゆくあくべれて阿房をやまと

さうのよし

續古今和舞集卷之第二

姫哥下

霧向朝康こりふしきを後けり

麻人内吉翁家

放弟乃切くよじよ妻こうてゆくやかくと康の弓を

文永二年九月十日天皇御野席

をと天皇

神代下やまをかすとおゆく紫のゆき康うみす

用白丸大丸

よもじなるやつの鷹の放風ようこそ康と妻をあ

左六九

夫ひよの妻アラシニモトノハ潤ヒヤドリテアシテヨリ

麻久乃言貢季

アヒシテアマアモチヒ奴凡イリヨア康の鳴も

中幼言為氏

タツクシテ野原の小森コラ故ニヤハルカヘ康の事也

巣山に仰ヒテ又モテ講トシトヨリノコト

斬伐キロ

アリムニ一殊モアリア故ニヒテ是モテ鳴ミテアシテ

十首うち今ハ一ノモ康モ

ちケ門代小室相

摩毛モアニ事モアリヒ故ニヒテ是モトモ康モ鳴

床モトモル  
貫之

娘もコロニミテアリ亦ハ鳴一ノ度モアヒトモ之多

建保四年百萬ニテ名ト義モ

順信院ヒキ

支城跡モアリシ森アモサシ尼モテ鳴ミテアシテ

狂子  
舞羽天皇ヒテ

タミヤハ大意の上ニ鳴康モアリシテアシテノヨリ

人丸

やううのぬの切の夢かくれあう、康の夢のやけ

十三年正月

延喜家隆

又乃け林の引よりの壁より野よ康のゆきをばし  
康安何方よりしてとしよりとおけ、

後にけにけ哥

宝室の娘のゆきをわく代すうことをもての夢のやけ

十五年正月

參議雅行

まくちもよきの夢の元代よりの夢をきくの夢  
弘も元年百二十八康

前大内吉高家

・大義の娘ひよひく康をいもわぬ因をあく

致へり  
死を則

をれきをこなへつこに持康のゆきよを独り

家七首二十三月下康こりふくを

左明幸ちへる赤持故を下ト

三室二月うのりうえもれてよもうちもくさくみを

延保四年正月裏正合秋

前中納言家

きづゆの月乃るまわいわじゆが月うすくまよ

百三十の中よ

娘のまごをすと床のこ」「ト月いそつよみと思おる

秋すとてよしみ 午氣感

月氣と床のよきこゆ高砂山尾上の道のもやぢと

雅成親王

娘のまごをすねまじく今よすやねまきの高のともじと

かくもと始化凡と

大納言經信

わざりてよもーう繩のよもじ里て娘にうす小と田の高

娘のゆ中々 行会は師

是ノ乃よ田のゆのこすもよ處にこもれて娘にうせ  
入道前を教人夫

白鳥のよくてのよす娘にうけりに田中ひよしの娘にうせ  
大官に信中納言

娘にやさすあるからのむすと小翁うすとマ高けうる

紀貫く

初うう乃よ高よしとアズテのえひ娘とり人のよもと

鬼石と 前ゆえに基

衰うもキモマ高むと「くわくらにあじ」と先の國と

延保二年四月の十日肯。うとに

延二位家隆

居る事きこゆうもアカセアセナリトモをトモトとねけ  
名所持衣シリトモトモトとねけ

ち郎門代内亭

汝草マキアタマタタタタタタタタタタタタタタタタ  
久元年ゆ裏ニ名モ因持衣

入道前立教大末

ちくよのわづくらふまつじよがめとくくに衣  
ヌヌ百番寺方ト ちく門りん

浦凡マヨシシヤウノ松鴎アヤマの宿ア衣シケナリ

源興親効た

こわ人を継ゴ同ドウの浦凡ヨミ黒小郎イ衣シケナリ

海邊持衣シリトモトモトとよもけ

藤原隆博

田ヨミヨテヨテ田ゆうすゆのわよ仕持衣シケナリ

名所持衣シリトモト

中務卿親

あもくちうを黒小郎の役凡ヨモトモ衣シケナリ

效テ中ヨ 静には親

きくうすをすねまきよひ三日セラススモロヌ

漢壁門代内将

まことにかうしよの姫風といふある家の女うつて  
二位成實

今よりかうじやく放風の吹としきくア女うつて  
山家様衣と 太上天官

かくのうるる家のこもれりうりそと外ヌテ  
ナミテ右ト因縁衣シムシムを

順徳院ヶ哥

娘凡ハいゆね地トキカトテツ黒モウツ衣うりそ  
名前百三十人トヨサケヨシムシムの里

のあと

三月トキヤトモス四月の里へトキコモスヒテウレ  
シテトス 京中納言室家

久三乃からくち黒のと女衣をとと月ねえよアヒヤ  
九月十三日わうの拂月く十日テ候はける  
中に 京大納言室家

わう三日じうの禮をととひくことと月は地也トテ  
文永二年九月十三日もと月の内日くうるふ  
一月と 人印言通成

魯ノ木尾門川のむちくらの松子姫の八月

百三十の半

順徳院御哥

奴よりよその草木アホリと月はまよふれを代て  
月をと見る 素還は師

主より入野の庵をつけてもれどしの奴のよひ月  
古ち魔月ミソハシヒト

源真氏納

かづくやこゝろのちの奴の月アリよ廣ゆておを詔き  
奴<sup>の</sup>うの中ト

後も假にち等

ちくよもあらずすまじき久の天のとよも有明の月  
五度二年百三す中ト

後京極持政貳吉翁、今

三ヶ月の月初の氣よかりうゆく奴のいとをゑき是  
もうこの廿日は月くゆすづけ、更もひ  
いと豪をれ、赤深萬門

三月乃月いわむすむつれりくゆくのまのをや  
ほの<sup>生</sup>の<sup>生</sup>リヒ、愛玉秀彦

きけいはなみれ月氣のまくアモリとあし  
足保百三奴<sup>の</sup>、參議雅経

ちの下といひみくゆくの小郎の沙翁ひえりや

歌<sup>の</sup>子

鎌倉右太夫

りのやうやうのた廢れも序故ひま紫はるやまく春

是ち后文を之後廢止

うつれく下矣とまじく故郷をあちら見る鶴をくわす。

妹三うの中よ

用ひ前古たたか

吹風とまうとしつゝ鶴をくわつのまう故の又えれ

寒起は師

ほ草むとのすうのけあはせと夕凡きむうづくや

建保二年四月裏故十三三うの中よ

辰二佐家隆

やつ草マ行のとよひタキトヨ人こすみねうて鶴をう

行路旁にそよとをよすととぬけ

後ニ多喜むち三う

妹の歸ニ橋のまよとアタ旁のりまよをまよ

妹三う中よ 月花門也

すま乃わゆのすまの鶴をうひくかくまわ用の教

琳景舎女郎

妹旁のうひくをみしむはよううる肩月をうか

文永二年八月をよこすかをりくすくすよ  
あもとふくよ水錦娘をこうと

たよ天皇

達をもくとくとく行房のをよ風とくらむ鶴娘

さうの、てそりてゆくわよの言つ候ふけ

用ひ麻た大に

あをやへもとす思ひに阿房のけどもそくのとて葉

歌一子

ひこほと家

ひくゆうとを七月の名すく切るもととよの扇界

戸子ゆひ秋王賀彦（うき）の秋虎（かゑ）より仰け附

菊もよしよしよしよしよをぬけ

車の鹿

ゆうとお人のよしを思ひよしめりやまうきの白

延喜の宴

後藤納夫

初音ごとにいよいよかれどもあこうとうけせらまも

晚风とよまごりして

白河鹿

夕音の風かすとし菊のもよしゆきをいそよは

百葉のすの申よ ち郎門鹿

よしよし娘のはすうじうこまくしてよ庭の白

歌一子 中務卿親

今よやこぶよとくねれ凡そしよとこの里

捨サ便がら納

物乃多をいたるに於くしきとす物事と處とぞりと思ひ

延長六年春正月十四日くふまニテ傳へ

日初の至を

衣冠麻衣人夫

皆里ハいじきとて死事と文書にててにえみねまのよよりへ

西三位基雅

吉田トノクセキタマノヒリヒトハ行くさむを矣也

致

中内言事氏

委々々々廉子呼名ノ御事也のひととの萬事無事す

慶治二年正月十四日経矣

入内前立家久木

今より乃切るト奉といふ事

故哥中止

きのノクシキトニシテカキのノクシキトニシテアラモ

中勢ア親王

ノルモヤシニシテトモ原時テヌイノの娘也即ちモ

御内侍女家百二十日又経矣

前人内言事家

ノラウノノ入内ノトスノキイモチノハニテアラモ

文治二年九月十三日又合トニシテ経矣

天皇

外よりハシメれといはゞワツテテヨリハタキ

參詮賢平

初出るゝのまぢきをもつてさて行ぐのトヨウト

爰京先後納毛

冬ふりよてそとく代々ハニカムゆかねア因え

歌子

坂上郎女

こちうひ乃じにとのひまに也因るのわを波よほ

或ノマ真精

春日野よしとれやうめわすむいわ葉づみじよあひよ  
百葉すゆよ

皇天后えん史後成

雪とすり西と處てやめり娘娘ひがまのまとうに

林葉聞寢こいつらとくとくとぬけ

白け鷹山亭

もうゑへくすり松の川とれやみくらとよえうら

紅葉とよえ

爰京信實納毛

うちゆよすらつひみきくこののまうよよそ

たと中將義良

まほまじにけりひよとて因りまよのねは故のおまへ

内裏百葉すね向み紫

右と中將經平

朝ニシテ御内侍御にうりのねのとてぬうりを

内侍持家百三十トロニキ

西園ち入道麻呂取太

娘也よとく我也ねもすうくもすこわきのうつ

皇太后官も支度處女

歌子

前左人夫

はくきりゆきほりくゑ君のとくうひまのひま

左人夫

下葉ゆく處と繁とうからむよつけとうじうじ

東治二年右三月一日

ト拿持怖者經

參とて代りゐるのよひと娘のわき乃とまひを

娘子中又

辰之佐通兵

はて今うかどり候ととすとゆふとよむ娘のわきえ

建中二年九月十三日行路紅葉を

春日院

桜もゆくづらのとおもてうらがもとよほくわきえ

日吉社す合。紅葉添丙

前中内言室家

あり國を國とてすうちつ祀のよりる故のよも

百三十トヨトヨトは一内村に至

衣笠前ゆく

レ所の樂ノハシテシテシの事ニシテの事ニシテ  
モレヒキニシテシテシのけりニ三輪のよみの  
スルサケ代ハ

後玉割後

タクニカの外枝ノハケトキトテソガミヤウ  
二百三十中ノ順徳院中奇

娘凡モアシキ御弟ノ君ノ代トシシテサマセマチ  
ムニ百萬ニシテ

キテニシテシテシの凡の事ニシテシテシの事ニシテ  
九月の日真親<sup>親</sup>姫ノハシテシテシの事ニシテシテシの日

ノリハシ

天皇

トシテニシテシテシの事ニシテシテシの事ニシテ  
夏至先後納丸

亨子虎子屏風

作成

トモナリモトシテシテシの事ニシテシテシの事ニシテ  
ノシテシテシの事ニシテシテシの事ニシテシテシの事ニシテ

始志十三年陽月廿二日

よし入

情やとて故にゆるをとくをよしも

麻ゆえに某家百もすきよ

中納言

立因行よりうるれでゆく故のりつよもせやけりくわ

百もす中よ

入道前を教人た

うてに謝りぬく夕言の故のくみを成そゆよ

故として

麻大納言忠良

り故乃あらすみとくも草筆を凡の吹くすし

九月盡日け裏よくこまう海とくけりよ

高坂菊

中納言為氏

竹林乃くみくも堅苦をうりう高のもとくも

くよう風を拂し百もす中よ暮遊を

わ夜吹のまやとのぞめとくうれでゆく故のくわ

九月盡夜のくわけれ

中務卿観

えむは故のくわけれおもんをくよけり

史のじる

續古今和歌集卷第六

多哥

初冬のことを詠ひけり

壬生志冬

よのくわくしき故とて元つすむけどもそこ

皇太子宮大史後成

うへとやうへけの因ゆト空とゆえひ故ゆちあ

太白門虎行

玉ゆふ君の下草ゆきうきてのハ根ごとお歸へト

百尋のさりけり

麻門大長基

おりをきね相ひ處をうすて神よのこむかねともほ

ひ

鎌倉右介

娘はと凡く本紫い教里くつひうらきとよまを

中務卿親王

きくわいとをくもれと我地の洞よぬつ聞るやう

源真氏納丸

いとよもやう地の因よわづとえこうくよれをやまね

独岡山とづるを

後出人ちたとト

神也々とて乃は乞の物切角に祀よまく人ヒト

立リス

藤原之後納木

うやんをの松山城にて年節用之乞

庚人立リス

カニ神のりすもあれア秋月立くまくち風立

祝邦成賢

吉田の木立と秋月立くれるくまくち風立

千石齋す方に 東陽門に越前

あまえとくとすく丈の力あそくもく差風立

立リス

中納言家林

吹風立ちまよおこなうとよらうとれぬふう

百弓立人立くまくけ弓

後鳥羽院ゆき

もしよとくれこれ吹風立れぬふくちまかまく

元日大吉奉家百弓立人立

藤原伊長納木

柄足立すはう夕向よりとひやう本祭立人立

延喜五年十月立人立よし家落祭

右兵衛督為義

紫戸下立人立よし家落祭の外に神代也

多忙の日

急鎮人價

よひ乃ゆべとねまをまく祀也てけんにやうも鳴かず

百多あす中

後も羽ばせ

おまちうと因のねみ羽河を越す後をうさんしかふ

堀河たけ付百多あすむらげとよ初冬

藤原頭仲幼夫

おわくと乃森山を度て下草つるをよしむら

歌へれど

三木因延秀

紅葉のちくはかとやもししくさわじ吹せ秋の物

札杞昌と后官

こゑ人のわづひのみくをまうとこうひなうふ末桔の花

躬恒

かうれり紅葉のまのほけれり立田のけい園とよし  
竹籠裏こづくちうと

中内吉考氏

凡そくうじと水のまづみじよ所様とそのまづみまく  
京極麻用と人井川よゆりて水邊紅葉といふ

まを淡ぶけよ 堀河たけ付

こゑと川音より滌さきて門代とみきとおまの園とぞをり

承暦二年卯月遅遙月水色霞を

大納言行信

凡やく一乃わきやとちとをこすとの庵よまくを  
承久二年十月吉明幸ち入と前持後大内河の  
おまみゆゆりけつようへとせけ

順信院寺

舟川よりかえりてやまとひの船をもと  
古井

紅葉入江乃ねよやう思ひよせぬゆきの元よりを  
後鳥羽院御内春日社の事會

もと庵入道麻右大夫

庵乃むよみういとよ生て候れの又

文承二年ニ首ニ清一はよ庵

麻右大夫

をせやに故ナハれりえくもの難よちく又紫ト  
歌

平重内朝夫

おまみゆとくわくうのえをも月とさううひよ  
よみ百萬千石

歌

泰康雅経

せう月もいとくわくうのえをも月とさううひよ  
よみ百萬千石

延保四年百萬千石

入道院を歎く

本業まへやくありて爲トわくとゆくとまくる  
内裏ノシニ首ニテ薄うれはけり。又爲紫  
御手をよせら。皇后また実師徳  
エリヒミモアヨのましにねとのしてちうの集  
合志 道助は親と家みたまう約切ふと

西園ち入道院を歎く

紅葉ちよしを朝日乃えまくとくとくの后

歌

塗門すまばくもとて文切ふとぞやうお紫フタふ

三百三十三年 中務卿親王

千秋ノ御門をみすよし風門をうそちを除  
百々三中ノ門と

もうちうの門のまつたよと風門をれてくと

魔更付と 後患は師

いぢりとくれととお寒と老のとくい神アヤシ

百々三十七初冬を切ふと

鳴きに拂案

うそとえ神アヤシく秋月をすと切ふのやうとも

歌

月花門也

ミトのゆきの夜アにまつて萬國をあしらひ神也アシテマ

けゆる

前田人夫

基

いふ事もこの内リよりもかくもけたり神の切るやうとも  
わざマジケルをきて

入道麻を歎人夫

石子テナギ

氣象信實、鞠長

すくまを仰のこ内アのや簾えとすけてやう内ア  
すくまを仰のこ内アのや簾えとすけてやう内ア

石子テナギ

氣象信實、鞠長

建ほ三年六月和氣風す言ふ鳴鶴を

後も附に叶三

こすくまをよこしておれづ有明のよがま村

円四十年に裏ナニテ今に

參議雅行

白妙の良やとけすまつてめアツキモタマのく

き奇の中ヨ

前田人夫

りまばじに神のよわくよとてれどもくも

因るこりへと 中野マ親

凡ちやもまづて馬車ひづアセヨシテやう内アト

寒草絶滅こりへと

前田内吉家

吹門アリす又坐の下りあれとぞわをのま草  
あみ百卉うきつ

後京極院政麻呂義大

あうじつ因幡紫もすよしれのく原木林をふら

ひづる あら門地ちう

日射す草のきつともひむかれまし

頃度季ほ

野へまがれづれをアレシテのひやト雪トや  
藻のよゑくるえのねりとみく

人江近衛勘太

藻かくふはすくえのじけぬれいのあた廣よけト

きすの中よ 中勢郷観

日射す桔野のゆくすをさけてとす放つてか

強氣と 持人納言殿納

桔子と後生とアタマのしらきりまくら

印しを 延喜和

ちりくもすくのまか代いうつまのおりくも

源順

うひじきやかしきのあと引によじげり

百葉中を 朧ゆべた基

かれてに充てゆきまほのゆづをとお過もとと草  
弘治二年春正月同月とすまほのゆづ

御朝を盡 トヒ天皇

切あらびのつをすけよ流どうあひそしの紀

印ノ子 後鳥羽院

種波江よりみにほのやうてまちや秋葉山御朝充

寛治二年正月廿七日時鳴房

麻人内言資季

けはるへいせいたじつめ充をゆう鷹の毛衣

少鳥とすみ 麻人内言資家

三月凡そして吹くしてとわづはすのよひよひ

先後納長八十百三十すすうはけるを

辛 中納言充氏

丁度ての鳥をすりねのふのけんよじや

延も又年三十す清いかくよ寒也よ鳥

源雅言朝長

鳩毛とすりにしむは津波もすく廣よ鳥也

麻人内言資家

さくやの社えのよもねうとよその枝と用うて

すすあらうるる 朮中納言資家

鳴ふる神の邊をもくとておのづの社荒  
子鳥をすまとれけり

あら門だれう

夕毛の浦にさすやまとひよの浦を

白千鳥を 中務ア親

皆のち磯の浦の浦を

尾ふ鳥を 夏至之後初来

えつれのよし野の尾風にてへりとすとすと

歌一首 大納言通方

しきのゑやくれこゆき風アラヒタケスの鳥

小弁

うすやくとひにうゆふよ鳥鳴きて更よけり

すま百萬三十六工 畠蓋は吟

金ア御とアわづの浦ふ鳥なゆくとよの月

光羽春も入道赤持双家の百萬三千

後絶けり 衣笠前ゆべト

柳てアよこのやけの浦ふ鳥もすむちゆにすら月

歌一首 夏至暮後

いと鳥アもうて月ぬ氣すてをまく引くよ鳥鳴

用白麻左木た家百萬工

休庭行家

おれ又をまの門へ神にておとの月よりの思ひ  
西暦二年百三月 二ふちえは親王  
かくわゆみれりてゆき氣運く月をすく初モみえ  
歌一子 順徳院  
やまとみのやね月アミタニモヤシカツの様  
百番三の名よ  
うちのく八野田のまけみの波風にてうる月詠  
歌一子 大納言御信  
モリモリ月は月うてよかこむゆううう  
きすとてよあら 真選は師  
すの庵はもやと十七月アモトシナムカシ  
歌一子 真照法師  
よもぐく演凡さしゆのゆへにのまる今うみぢ  
水島を ますゆれ  
カモノのうひとわくとまつてよくけてうみぢ  
清慎の家屏风 中勢  
すのね凡さじ人玉やまて野の山アミカミ  
江雪寒不散 うみぢ

もとくに儀乃浦ちとて言ひてやうみう雪のりとは

物を後はり 指大納言院朝

きくいすと入のとよりやも凡そしりしつらわ

氷面も度どりと

皇太后えも更後成

きくまつも水のとをつゝむとあらすとすと見立

ひく

中納言

かくじこせすよぢ若水をもすすさうこ見立

近事也と

このよゆよのり見アリと見の水だけに不れ

家よすまう合へけりにも本もどり

しと 後京極ちぬ麻を取ト

！此水をいた風の吹よきてこうれう御のこりくと  
貞丸元年百三十日後はけりと物を

えぬ事も入念未持取ト

さくれねえれいわすりせ風のとアラヒと黒色  
はくまはすくはける春は初よみよ先

乎 大納言良友

圓とこすとくとくあすりかうてまほの事ト  
三月三日清一は一びよけもと

冬上天皇

あす阿ゆとの水やとあしわすアヨミアレ

麻左太ト

きてのるよし阿マシカシシモの貳テスムニ

ルセニ年十二月ゆ裏アシニモテラ海ナキ

けヨウノミ

中納言若氏

吉野ケノ門ノ凡モアテテヨリトニハムロ院

ミノ

麻大納言若家

絆代アシテシシテシモのアシト阿マシカシ

五三佐之家

アラウチアシカシテヤロカシアシテアシテアシ

麻ゆくに奉家百三寺吉

はド實行

冬の園シモアシテアシテアシテアシテアシテ

水セ用白麻左太

アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

アシテ祝正家スナミテ

寛運は師

アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

人ノ百モテアシテ

後鳥羽院ちう

きよみ門里ひきよみやこりよしやのきよみもじと  
を西とよえろ

麻中ゆきゆく家

さよごす都に宮とゆきわどとよとよみと書の事

きよみに

ちか門にとせ

さよよみてやくいはくにれをて義とが門をねまひ東

赤ゆくと奉家百を三う令よ

ちか門に小室相

らよくとむくべきゆくもよのよよみよなぐわよと

達ほゆ裏うちよを野敷を

え朝奉ち入道麻持家百

也行うとあてこりゆく持ちまのくと野敷をちじ  
百をけくの中よ。 ちか門にとせ

ちよきひらのとつのゑねくとて入りの是にさくへりや  
え月をもとへて麻持家百をよそくす

ふ三は家

入りテタかとまうとくまき草うち鳥のゆくせ

寛高女郎入内屏风よ野外鷺鴨を映ゆり

けま

に二は家隆

くみのみよりの娘かよくね雪づくのとく

後ちゆみにちうける百三よ

光明寺も入る赤松坂左下ト

さの息あり人のつゝとてよこしと初けの雪がやう

ひーす

そくねむ忠

さるく野やうよをすまむいきかへ山宮はゆ

後はたなたなた家すまよ園中雪を

皇太后えも之後成

津うとうをぬに雪ハ結じをつやこすいに詫えよ

寂勝は天王院の障ふよ

赤中内言家

きどりとやまとくまくま吹くわざにくまう雪のか

ふ宿の百三よ ちとほぢと

獨波人あくとあくと浮雪のうじとのじは船やけま

は下良守無野サモニテすすうけく

雪を 美京季室翁

うのやくへ雪の門をもとむす浦の里

ひーす 平春守幼丸

やう雪のれゆれの原のうきののれややの鳥

寛治二年百三十一日雪

吉井鶴隆親

新鹿年印

よしとよやひゆえ三この一雪よは道わかることを  
を雪を

夏至隆祐幼木

そつまちもいとてゆゑあらすまく雪也度の一月  
山家雪こりてを後休け

はよどみ海

山里の雪乃うらこうまいれすわ月日もへこすこ

山鷗雪を

は戻り家

かとひう我さうときの雪をみ雪うらのとてアラシ

きうの中に

戻ニ佐家隆

岡のゆうてゆゑと白雪のあすきやうへゆる後を

建保四年百三月

麻中幼言室家

ゆうてゆゑのゆうてゆゑと白雪のゆ草のゆ

ルも元年百三月

雪

中幼言室氏

りえつやくと人のゆうてゆゑと白雪のゆ草のゆ

すもうち下野外雪を

太宰檜拂考経

至る野のまゝもとて今うきのむすび

ルも元年も千一百三十六の中よ

文皇原ゆゑた

天の原原もととすすりやう雪のいくともみゆの

雪のくまえ 後は人ち左大た

久の原原もとゆいぬもつらうかひよ雪のくまえ

納む持取家の百三十六

安原信實、朝ト

ひやくよしやかうけあうじわげうかよのに雪

書く雪をとくと 今上御す

ゆきよしとみゆくタ書を尾とよしとてのまゝ雪

後はれも入通麻用の家うふ

是を后また史後成

う門のまゝうみけれよけり雪と月と見引アみを

きまつ中に に二位家隆

拂りもとめといそく雪のうけふ月をみよ

ルも元年百三十六を

前大納言考家

うめにまつゆふとゆふやくの有明の月よかがふる

後東佐持取家の詩 うよ雪中松樹

佐

卷二 佐家隆

因雪さへわづのまうにれて雪もそよぐまよ宿  
百三三中の中ふ 緊鎮人臣を

けみれ雪とくまうの浦をアシムねこの波よ見くえ  
日吉社よりけくすきと雪を

五三佐和室

月新乃よりく一雪すにあけ尾上のねの雪のましむ  
寛元に年へ嘗會も暮方女工所よりお  
ゆふらへ正けくま雪の、る日ひつりけ

前を取る

九月ねくらのいすへかきアモトテトマスく雪ふ  
冬月の背のすくとおけくま

後鳥羽院寺

三月ねくらのいすへひら立くをしうのゆを月よみよ  
豊明節人曾をくまとおけく

今と即寄

雲かくべくのわづよ月よておとこゆく一かひの地

麻人納言貞季

今すかの豊のゆのりと草、川の代おつをり

寛元二年十一月東三桑井樂のよにりは

卷之三

白雪乃あつて江より流れ入也アホシニテ

是屋入道麻持取を取ヘト  
ナ

キモのやうに江を下すともひいのうたびのよき  
はも二年冬山に内月と人と十日三日

とほくよ  
麻用に左大夫

アマ代ハアツテ江より立ツカ又サ坂の用アツム雪

冬す後けよ  
麻大納言考家

年乃うるの雪をましくねたごみくまを遙さきある事

貫

者ちくやうめうきのかいをもとひみてそ雪く薄り

庚寛

皇天后えむ更復成

小節とやむくすみぬいアリシトナミタモトヨリモ年ト

致  
麻參議長

立ツアシ年のゆゑと同此ハ義つ方よ門もく今

ちか門ゆく家ニテ海邊

講波

アマ代乃はうらのうとし度のよくとゆう年か書か

東吉かうど

麻大納言考家

ふくふる余らよまのくとよわよきわる年の書か

年のくれよすみけ

皇室歴史後閣

てとせひとよりうとへぢくアラウアモモト

アモモト

續古今和詩集卷弟七

神祇哥

つれあひし人のみひを西にえう世よゆうじのほひ

あれハ捨行の人月秋のむすこをし

我そ一介釋迦年尼仲のせふくさやけ三月の母を守

これい春日大明神のむすこをし

捨る乃うとくとこくまうれいも人馬で思ひうそ

竹の下も我せとこすよをすとくらへやすとけり

ねひえいさくらんマテナリとくみかくまくじ

七三首ハ山野の片寺ニモ

みにのつとゆあらりとてかひ有けあをうのこゆ  
此年は二升ちよく新豆初秋の後かすを  
あよきてきよとゆまほつうやあらえよ  
せうはあらまよきよとゆまほとこれをもく  
さうく一けづに水のよすれけしを

我わよも消えて高麗とくすくらほのやまと行  
き野へ高野とよくすまをぬけぬれ親王  
ぬけぬくに念へぬけぬけよやの明神と  
音よしをぬけぬけしを

歌

元げ内躬恒

きよもくわたりとよもぢややちゆのとゆくよ  
三百三十万中よろこび

天皇

小車乃すとよもじくとゆかよとよ年ヒタチ三月  
文永二年八月十五日ゆまのとくとれもくよ  
あよきてぬけぬけしを

三木田延季

まねぬ門こういのねぬ月入いくもひづくとすと

歌

延季

秋風よあくすとくすとゆじくと萬葉のむのとすと

寛治元年九月十三日下付社頭税

皇太子宮大支師健

秋風アリすの河のいづれやとせの波のまゝの風  
走に元年又十日三日

馬陽門内越赤

神主はくわくれいくせ又鹿也と源よりれもあくま  
人納言通方よりをとけける清水すちよ社久  
月こよまをとすト部兼直

久月のかつてのモニシヤケト彰ハカツカ書

後鳥羽院

石清水すとける月のえよしの神をみそく壇す  
朱雀院とて守る清水の院付久をもーもー  
きんりとくらくもくとれけ

純貫

ねとあひまくとおしする清水りまこをくじくま  
八幡玉こむらふーと

天皇

石清水すとけるやし、(を思ひ)門代半しきつ下

石清水後番すとける連輪を

六条入道承と承へた

川口主我とすし」とての古代をちりめんに  
大喜産の御詫宣の文とすよとほげの中に  
平モ附

久主くもきみめれどもよしの國より我くよのう  
神祇めうの中に そ嘗々々々々々々々々々々々  
まこと死ゆるゝにけの座あくくをくえおひとく  
賀彦附多のうづを

用白麻たへた

務やくく賀彦の行ゑにゆひつまのさのりあはせを  
用陰附多の使にゆひつまのけをうしら  
東人<sup>加</sup>信良やしけつを思あて秋毛を保  
よしのりつけ、藤原隆信幼長

もみじや萬<sup>カ</sup>かづく秋のうぐみつまを院  
斬北<sup>カ</sup>の付賀彦行事の日えりに墮て還  
仰のうちあづとけられ後け

サわけは

ああ<sup>ト</sup>くまきく神乃也多<sup>シ</sup>の行事の後<sup>ト</sup>くもれ

百<sup>ミ</sup>三<sup>テ</sup>ナキウ<sup>ト</sup>付寄神院<sup>事</sup>夏秋先後

かうこうかとの社<sup>ト</sup>かく<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>おき下<sup>ト</sup>もれ

秋波の中よ

三木の近處

行きて我乗しのひやゆよひりち代はれうとす是

光明年も入道前持取家すと名所月

夏至は實胡夫

すくい尾とのねび假しよ秋代もやかすすう月秋

牛野祐合よ

に二月豊隆

雄波津にまことあきらめ代て牛野山ねむか代る白雪

雪乃わくと野えぬこく風うく後け

入道前を取人夫

林すすまかみのひくよ行つをうふ雪つにゆ

三十ニ奇よこけり中よ

祝鄰志成

世をいのとせといひく秋垣の我をとて年うづけ

三十ニ奇よこけり中よ

賀彦氏久

毛をわらうて引くと乃神のと二んをうへりとる

遣名はくとくゆう御とこくけは春日の案

旨讀けり

泰義清抄

春日野よいか三室の梅花さきりゆすやくとくまえ

後一室に春日行事日上まつたへきつけり

は處も入道前持取家矣夫

ト乃ミタリシニシ春日野の印をもとよりる  
百三十中に 入道麻を収めた  
リす。ト秋のじ生すかといつて、印よカハおじト  
春日社よりよみけり  
春日社よりよみけり  
春日社よりよみけり  
春日社よりよみけり  
建保三年百三十中の中又ここの行章の事  
を考へて、いとぞれけり

順徳院ちう

者日野アニテの生のむのたゞすんを林す上をも  
百三十中に  
百三十中に

後素行院亦を収めた

タウレマヒト乃ト松ノ木アキルの交をみ  
花麻園を候かまのうちーの松を候ゆ

は東行清

タマタマホギヨウト一宮寺乃ねハタトヒタヤナ

歌一寸

五三月知家

まわさうのりうする上やうかねこ到マハモ  
後素行院亦を収めた

いふうやう乃浦風かうすくえりう乞玉津修娘

正治二年十月う合

夏至隆信朝

すくよやうろくらに沿せてもとでゆく玉川源氏  
之後初長より風をひけり位告祐三十日より秋祇

セ

ト郭秉圭

あの油やわをきつてのぼらもう原をかすとすの界  
家より百もすすむとせひけり

後京極持取麻を取入ト

まかう一年もしむのほか氣れ代めゆくねの風ト  
位告にゆくとけり小松のひけりを又ま  
りくみれもまよ成にきれひと先る

麻中納言資長

神坂にみづすねともと元をアヌヒトアヌヒト年のむト  
四室に付八十鳩多皮のまくらでひけりよし  
ゆくとけりとゆくとけりうの後位告又  
ゆくと我家よりあんじいにこうから  
キテ黒いにきくとひとひけり

無戸の隆親

みづすねにみづすねの秋はしきととれども  
位告にちうけりすと秋祇をよゑ

中納言

位より乃神御事のゆゑもすとアヨシのかねすとも

延保二年六月一日和三所御坐詔記附經年

衣笠麻衣久

経吉のキテのニシテ御上ひくうのせとあらねぬ

延もみ年はかに又極院の日

麻衣久

タマヌアツシヨナキ年を賜てし首より御吉や内  
経吉社の遷官の後くぬのよまうてくゆ  
りかくにかの社と改てトカヒー

天皇

ホウミト仕すよりこみうるを我世トあじるまむす  
くぬのけらかく

無野河さうとらしに校木のアヨシ神の御上けうト  
くのよぬくはけくのくのくもとを改

人を延一辺きひめやうしと黒ハリトキく淡

無野のホウミトの石すのアヨシと異くとねいのくふ

人のすくくくぬのよみてかうけ

武丸門を改入

ふちのよづかに落ぶ滝川とまもくくわちもくわ

建春門院皇后太文太と申けり太内に吉祐太行啓

さけら東人太と申けり太内に秋樂太万景行

万景太と申けり太内に秋樂太行

ちか門ゆえ太

万代太と申けり太内に秋樂太行太限太と申けり太内に代太也

日吉百多子太の中太よ

慈鎮人太信

りの太有月太の月太いわく太と申けり太立れの簾太もし

客人太のまよ太ゆけ太

後宮極持太前太久太大

うよ又太ゆわ太と申けり太と申けり太雪太の太ち里太

貞慈元年大嘗會太化太秋樂太子太枝村

五三後家衡

林葉太ちく太の村太ゆ太書太のあ太と太向太も

文永元年大嘗會太化太秋樂太子太枝村

民部卿行光

やつみ太と申けり太の太林葉太と太て太いの太万代太の太先

祐頼太と太と太祝部太成太度

桜花太と太や太て太れの太よ太方太花太や太也太也太

白河太度太付太わ太こう外太も太よ太わ太て太き太也太也太

金子丁はけは付を鏡を小野に又へり  
シテみのうにいそりる

左京大史承補

かねてすく出あきやく厚守鏡つらもとくもわざ  
も後すく名わへれけしを

通院のひきせん ちか門にちか

泣ゆふちりゆゆうをとりて木のいつあつてし

我國がむちむちむ木われわれしうマスケルヘケリ

先後納すめはけは百三事よ

承たぬまを家

かねてすく出のことくともとくもとくもとく

百三事をわけよ寄社院を

承け人を

みか代うすとみ初のあよいと毛ゆへこそ

江たまめ

續古今和詩集卷之第八

釋教序

は華經廿八品<sup>欣</sup>の中より方便不

傳教大師

この阿彌陀のゆきうち村父利弗のとくに後經

は師昌

このはをゆきしてしまふが佛乃りひやまと  
か別功德不

わづ今や一こきてよきこゑにまつねこすりも

薬草喻ふのちくも

慈寛大師

モトニテやうもあやひを極のとれいあつまく  
維摩行此身如火泡こよひし

赤染毒門

あやれいをにうつらうてみえーと無力<sup>アカ</sup>くま

古方如夏

承大納言<sup>源</sup>昌

常やうの我身はまか<sup>アラ</sup>くうわとみづよ<sup>ア</sup>ト

足心毛のとを

伝教復信

トモツト佛へ通とせしれは我アテモもりつも

鐘のとじぬきて

ありて乃錦の、あことうだけまちうるよみや

覧者何還狀夢中事

捨人内書家

アミヤ思し佛<sup>おが</sup>はまのせといづくのさわすあり

辛常心是道

因<sup>カニ</sup>佛の通をめんれいづよの事ぬまあけま

君離我仇急左辱大我

シナシヨトの野<sup>の</sup>の草木すきつまひもに先<sup>ハ</sup>我勢<sup>ハ</sup>今

故<sup>カニ</sup>子

玄暉は辱

ノ月かづえアミハ四<sup>シ</sup>月<sup>ハ</sup>はせよめくら氣<sup>ハ</sup>う免<sup>ハ</sup>

隆<sup>ヒ</sup>尊<sup>ヒ</sup>師

ミテ仰<sup>ハ</sup>ノ乃<sup>ハ</sup>アラムシ月<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>テ<sup>ハ</sup>アシモウ

久日経の十<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>向<sup>ハ</sup>セキ<sup>ハ</sup>テ<sup>ハ</sup>テ<sup>ハ</sup>テ<sup>ハ</sup>庚<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>水<sup>月</sup>と

克後納末

アツモトアモトモト<sup>ハ</sup>芦鶴<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>の故<sup>ハ</sup>のみ月

毎<sup>ハ</sup>東<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>禪<sup>ハ</sup>紀<sup>ハ</sup>水<sup>月</sup>

ち<sup>ハ</sup>門<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>寺

ヒホ月<sup>ハ</sup>の承<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の志<sup>ハ</sup>、<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>猶<sup>ハ</sup>

月<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>禪<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>よ

ち<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヒ</sup>天<sup>ヒ</sup>皇

かくの月アカシヤシムニヤサカシのカハリヒキ

非有非空の心を

かくえをしゆごとれ、ゑゆのあつまわすまくう  
はた經序不<sup>レ</sup>是志今佛欲<sup>記</sup>祝は華經  
は乃も今トカクえよまやハモリムアヨヒツ  
十如是をテト後はけよ如是相

後京極村久前を教下

朝ノ乃ノスノニムシモナシテフケツセマツツ  
キマ完竟等の心を

大藏卿有家

唐葉五風<sup>見</sup>と翁のまかがいよりうれと身との事を

信解品

景祐院<sup>記</sup>テ

かづ代<sup>ハ</sup>ミタウハ里<sup>モ</sup>サレテ<sup>ハ</sup>ミタウモの年<sup>ヲ</sup>給

薬草崎<sup>馬</sup>

麻大僧<sup>ニ</sup>ラ豪

甲野にツツナメ<sup>ハ</sup>シモハシモアツモ草<sup>モ</sup>アツモヌ<sup>ハ</sup>シ

弟<sup>三</sup>ふ

年<sup>豆</sup>は師

テ<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>神<sup>モ</sup>レ<sup>ハ</sup>シ<sup>モ</sup>トモク<sup>ハ</sup>テ<sup>ハ</sup>シ<sup>モ</sup>ア<sup>ハ</sup>シ<sup>モ</sup>ヌ

麻<sup>持</sup>臣<sup>ニ</sup>ラ雅

対塔品

はむち入道<sup>麻</sup>用<sup>ハ</sup>教下

國人ともうて、此をやまとてえとほそくをは

東三事院のうちうつみ行告養とくられ

にかく

前人内言ひに

う乃のものぞくられ、幾せどもとねひをえよみす

毛婆足郎は南方のことを

前中内言ひ家

トシハ海の底の玉より宿つて南を西す月つを  
土樂行ふ於無量國中乃至名字不可得

國ミソト

宗は鹿ちう

名をもにときわむきをこしりきいを笑をあひまを

壽景のことを 後患は師

今アラムコトナシ月日ノシルモアヒテ

は桔原服

驚ひよいたすみけく月を代へての後もとを四と

空を后まく更復成

アラムコトの旅のアラマタマ驚のまみにてふと毛

令列功徳あれぬ於まえも多度衆を空を

よみへす

りあさるアラ木の木すてにまよすとく人を後ま

印を

はれも入道前用ひを矣

せのまへ人へアモリやあよつていだちこちふき月の月

神力石尾ニ青空遍至十方のくを

はやむ室

御ゆきも撃ちうちのりすみ二度す室のよ用に

七十二景詠は花のくと咲ひけ

人臣と隆弁

七十乃まきかうのうさくはの良ひもの／＼も  
釋迦のくを 平時廣

摯のじつの考をけれ即ほの花がくらむいす  
玄／＼す 麻庵白左大夫

りあようゆくまうるうけんの花立ちりくわせこ  
ルも元年六月春の仙山もくねは室や  
は／＼内十種供養の散花辰一臣貞／＼調  
へぢう／＼しらむ花よ

入道前右政大夫

半身をくじこすは花たちのまゆくねすすめ  
印は洞すくまみてねは室や／＼内普賢  
人士白妻象意のくとよみふけ

挾人唐都憲實

みを夏乃面を用ひマテスシキハハ川の玉明の月

三會の事を以てよきけり

は下良覺

ノレモシテナリのニヤシ休閑も多キモ  
熾盛えはきこすひける内也いへりあはる

麻擅僧成源

トモシカヒハの水ひ引まよとのひわう名をやすト  
一切経一巡みそつゝかく思ひぞらふれかにと半  
身に及けれいさのまつといそ、余のまつにと  
思ひにとくよをなげり

衣笠貞内大

じうらゆく今とす男ハの水せよすまほほやくつ

歌子

後鳥羽院ちう

まよよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

津名居士

景祐院ちう

ほくよんなりといひ下と一升の水ひ度をよし

天台大师

中務卿親

あたまくまのまよやくはの水ひ度をやうめを

釋尊のまゆ

せをよき先風をすすまひアテルはの内とく範

かくとせりあけぐをそく

文宗通信契ト

ナカニよまにまつて庵下圓はくとすと  
教是佛詣禪乞佛心處有深深否と聞  
けり人の如事ト

思順上人

老いりて身の如きを章と思ふ事より死すあら  
に觀の又即散而衆の如

もじりて身の中の墨のさへもぬき夕雨もト  
僧と信恩と階も引まし居く初て三十度を  
さういはげる龍岡雪のさげる風うそ  
ひげる種儀のさへもあげると増井は師  
すそゆくへもひづて忍もあげれどひさ  
よのこに書いて出はけ

貞慶上人

古事記にてては雪のあらと通こうにとえられ  
高弟よゆくへもあげるはおののれも  
入道前を収人ト  
世を捨てすよれ也方、うるせんげれある  
十波羅室中の檀波羅密火を

後京極持取前文

しと月をもと詠てよりしに思ひとうき

歌一

えの事もとふむ

思ひれりとも我かともすがふのうづみを

え観のを

は下實行

うそけようやくわたりけのこすらし

色別をそのを

信とは師

かしきちむとて夜アムクシキニナミタ

歌一

色故玄賓

三輪河の傍をまつれよすみー我名を更よメヤケモ

後鳥羽院御

諦め、ほけの園をよそをとぬる限に

薬師如まと

正三位家

ちつあれひげやうやうもんじいのをアリ別色

歌一

麻律師承観

いすにいすを失わすは後よりうかこゆ

佛のじつをゆと 伝都源信

松葉をねる思ひのうとくじくやまとてすらめ

擇友の辛うて は印宿海

しきの雪ひじくをぬるかばんの月をせせらゆ

源興親納

トモニカハトテモウチシヒキサヒヒノモヨモアモサ  
ミタヒ壽經四十八部もテ後はけづ供養迄佛

證惠上人

多のむかひを期してよしとせ佛より向ひてうか  
樹說<sup>告</sup>吉モニモニモニ 大悟已隆弁  
ムキテテ又とはとくまれいももこすうをさうを 逸  
泡の室に極樂を觀とて慶びゆく

もと庵也

あくまちう花みすにモキモキモキモキモキモキモキ  
歎苦縁ゆゑを 通惠上人

三つ三世のりうかうさうう力より社界<sup>アマ</sup>アマ  
引<sup>アマ</sup>テ 天台度<sup>アマ</sup>度<sup>アマ</sup>隆寛

三つ三世のえをとて度<sup>アマ</sup>度<sup>アマ</sup>度<sup>アマ</sup>のゆるにヤアリシ  
大正經畢竟空寂

多<sup>アマ</sup>清浦納ト

何レトシ<sup>アマ</sup>小<sup>アマ</sup>圓<sup>アマ</sup>カ<sup>アマ</sup>ト<sup>アマ</sup>セ<sup>アマ</sup>ア<sup>アマ</sup>テ<sup>アマ</sup>欲<sup>アマ</sup>ト<sup>アマ</sup>レ  
未得真<sup>アマ</sup>覺<sup>アマ</sup>恒<sup>アマ</sup>處<sup>アマ</sup>夢中<sup>アマ</sup>故<sup>アマ</sup>佛說<sup>アマ</sup>為<sup>アマ</sup>死長  
夜の<sup>アマ</sup>ト<sup>アマ</sup> 法<sup>アマ</sup>長惠

多<sup>アマ</sup>のま<sup>アマ</sup>らにモ<sup>アマ</sup>シ<sup>アマ</sup>シ<sup>アマ</sup>シ<sup>アマ</sup>の鳴<sup>アマ</sup>ト<sup>アマ</sup>  
約定<sup>アマ</sup>を取<sup>アマ</sup>お<sup>アマ</sup>う<sup>アマ</sup>そ<sup>アマ</sup>づ<sup>アマ</sup>先<sup>アマ</sup>も

僧都源信

今しきの如きと初めにけん佛の道すやすらも用

清涼ちもえ後々 安達は師

警のアラシの移りゆきのふる有明の月  
兔のほの月のか拂宮は春食はト聖宣を  
尊師より女郎むの枝にまわるの会は  
を行ひやはるれりすとていをか

大上天皇

名はうてこの娘の女郎も元を馬毛の経こよひや  
念はを未先して幼よ鬟鬟よまにあくを  
けりとみ  
意立たせ  
夏乞くしわうとけごみれいもと  
かくゆい四下

續古今和詩集卷第九

離別章

置周日

こりの女をうそつれてはけよ元斗も  
つよけれりし田能わらく近江國へとゆき  
付りわざれりとおでよととれけ

頭宗天皇御章

ナシ原アサムシモシモウタマテニヤスモモ  
シムの國モハケラモヤハドヘムアシモ  
ケラヘニ御衣をモリリシテ

延喜御章

古里のすみらまくらに旅人ひまをきてマキシモモ  
御乳母のまほ所とゆうけよ紫宸御子

三

天曆御章

様トモいとてあらじと身すうにゆう神社あけわをれ  
天祐三年十一月六日更上りく半佐使の餞  
をまよして下りとむうけよ紫宸

同融尼御章

万代をゆきよしめり後を引ひいやかにゆうを  
左寧太貳高をじくよくうとけよ紫宸

フジシテ

小野宮右大夫

りもくつあひすりうりよ列は父下とよお利國下

片

人富人貳高き

ちの代のリヤにみかう様かれいわくよのね京  
後京は昌朝ト丹後はやうくくうけく  
和泉或那思ひとくふくへんづけく

中納言宣頼

ゆゑゆすきつ角りくまにすよやとよしとあゆ  
大慶二年正月賜辰之臣高ちや九門よ度  
くうとけく三輪川の引とて度て轍すとく

後はけく

柿幸丸

そく我かくせやまひと考究めりとともくく  
卒玉也官の庵中流くを付素壁を代  
よりくまくせやまひとまねくくや  
のちよゆくとくとけくはやつれあじうえ  
もととくとくとけくはやつれあじうえ

源宗

わうきくとくの引を思ふきりよゆうとくか從  
東のくよぬうけくはよにうけく

躬恆

きくのよ路うるこ引ふうのむけくくつえ

紀貫之夷農のすけとくにわざでけよ

れりとくよも

一月にすの年ともいふ年とのよとをいへと

八月立日藤原宣雅納毛常陸从とトア  
けの府と大持跡じだの馬めかかけよかを

をさう

太中に紀宣雅末

やや草くさすすりやし引ひやの武檍ぶばのとの思おもうとと

ゆゆすけう人の許ようらととじききけけ

とくの思おもうととうもも向むかの思おもうととす

様ようのととちちとと人のととよよのととす

紀貫之

おみけわうそそくをうけけいいのととう

女め脚あし徹とおすすけけととうけけの

蓬よ子こ内うち親おや

娘むすめ乃のまうりととふけけよよととううははすすふ

女め脚あし徹とおすすけけととううけけの

まふまめめに娘むすめのの野のよよねねつつるるをを  
脣くち三さんののううななははけけよよににけけのの

一い多たに皇こう后ごえ

雪の匂ふすとひきのまづてあひそとのまづて

大内書經信にくよもくうとけつ対後頼幼た

こすりゆづけれかアツヤモイをくつこ

一けり

堀行院中宮上院

引きもあがむをつぶやの思ひうるゝ故め書

おとねと

源重之女

えぞれぬ我方やうをひ引路又今わづへいひと

殷富門虎大輔

つまきわすを西にて我方のうすて引やう

能引のと

前大内書信家

ゆきじ又あづてしゆのうたわ六八鳥ひもくとせ

文永元年九月外官群行ひまことあ死り

すくして

月光門院

わざともどもとあ死りへさせすうふる思ひのうとせ

甲群行の長奉送役りくゆひくまうと

つまゆの奥也肩の中(川)アリけり

信中印書長雅

みまえもわづ道の旅衣ふぼう外は他アモ代を

登革は師走所(ゆづけゆきわ行)子

に三佐頼政

假あれ我さへは様をうしはすが、まどゑを  
氣風すよにあくべくとひけり

清京元輔

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

安京弘仲納丸

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

印子とよみ 源孝行

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

景祐院百三十手うちけよ 安京清輔納丸

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

印子とよみ 源孝行

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

源俊頼切

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

延二位家隆

あくべくとひけりは浦派袖えらての引よしるやには  
堀川辺のち付百三十手うちけよ引のくを

14

慶政上人

もとへと存するもゆうじ三村をアノのへん  
やうけのりのり（ゆうけ）

辰三住行能

そよとちくす背ひるあそううふえこむふ下  
ゆうけのきのきぬよゆうとけよひ

つうけ

伊勢人浦

こよも印都ひゆうめきわくせすわを關にふ下  
きゆうけくよ 祝門慶仲

引ちよしゆ心のをれは引て引こひ思ひすや  
ゆうけのり（ゆうけ）（ゆうけ）とさ

恵慶侍

やうせじよをうじゆう鏡年月やくとゆうじゆ

登蓮は師（ゆうけ）（ゆうけ）

祐盛は師

うふううひ紙よけの又なびかの絶路を歌くよ

人よやうせくじ（ゆうけ）

麻中納言道舟

玉あとの月よらくよくゆくわすをゆうせ

ゆうけの考の山をく引きたひ

つうけ

麻中納言道舟

うやうへてもて門う者あらわねど、

いじこらひ

續古今和詩集卷第十

羈旅寄

羈中やとこらまと 中野卿親王

雲の井ふるごとのまか引くにねたけり道すらきよ  
桺の木を

三秋すく清み、用ひ浪ぬようすきえみきくのゆね

百丈寺中止 中納言秀氏

松上りみくにうゆをひしの葉にうくま浦のまつ木

さめけ、とよとよゆてよみる

人丸

と島乃路の坂のねぎを下して山更に

持流天皇吉野宮より一駒より

はけり

佐保丸人

うち山納凡なし一駒よりもよひゆわ

おれす。

大江あき

山木きちうきゆきを放錦よしにとよえて紺や僕と

枝の木を

貞慶上人

柳にておやかく古マキアリコリト思ひてふれ

源道所

あみ山の上に小吉アマリケテ行のうちつらし

桂の木とよす 千春山納丸

山<sup>ノ</sup>を乃らのうて京散れてゆましき二山<sup>ノ</sup>を  
一支旅こりへとよとけり

參議雅行

あまくとみてね夏のうすむかすとすの山

おれす。

承大納言伴平

波<sup>ノ</sup>西野山<sup>ノ</sup>、こきよ神也秋もすと秋雲よ

津の國すよごり、かよけり付済はけり

中納言行平

わんくは波<sup>ノ</sup>、かよけり用紙こゆすとまく

後東北持家家の十三三吉と故の様を

宗連は師

達坡をもくもくとてね放凡すとこう思へりの用  
福永の都にあつかけ、小生田ことよしらむ古  
アモヤアモイのアシメツリけり

左京大支脩範

思ひアセ正因のむちひ娘凡は放郎アヨヒのニ先を  
致一ノ子 人磨

アシメツリのアシメツリをげくもてのニモニモ代にげくがる  
都よりアシメツリニシメツリをこげつよよみる

麻右人将村朝

ようアシメツリ小篠アシメツリの尼をこせしにじつニシメツリの山  
一 沢内持家瓦三三

深壁門だせわ

あしけくまつ篠立アシメツリもて様の神也アシメツリ  
情けの石アシメツリよみけり

は下良守

伊と鳴アシメツリもゆの浦アシメツリの海アシメツリ月アシメツリ

善光寺にあづくけ付を持との葉もやまと

済ゆける

麻大僧正忠

こもいとれをすくの葉にく月からて後つき

桜の下の中よ 中納言為氏

よき野マタスくれくみよと空づりのつよ月をいさよ  
束よゆうとけのすともぬの桜やまとすく月く  
下すかけばみよ

平政村朝夫

みつゝタキシケルく葉するよみの桜を月とすふれ  
入通ニム通助次モ家スミヨ野径月

五三屋不家

しよく野、りまとく處よけまこというべじよくらとの月

桜の下の中よ 後ち好むけ

久々又雪が流すよ出よをつまうのちひよのと月  
一月十三日をすける付桜(10月)

是を后まつ支後廢女

袖のくへよめくくわくあるえぶ月にす桜のくへよめく

累池(たまいけ)百三十桜

徐賢門だ堀川

古郷よりすよの月をす桜のくへよめく

中務ア祝正の家ぬきよ

充後朝夫

月をうやうえことよきと聞かずとあすとぞ

後堀河院の月をも月前後こひと

をほほけよ

前人納言實季

都をいのいへつてまくやのすその月をうる

娘のは人ようべれてわくゆうして

橘忠幹

さく鳥かわア秋の月りはよ里のうちゆくも  
夷化するもあくくうて月のあくとけく

鳥東あ丈筋浦

正月都のうとうと雪のようももふ月ト

桂宿月

行人会は師

猿のする神ともあらまうと草葉にわる月をうる

一 宝治二年百三十二月

夏京隆祐納ト

かゝくわゆ野のうれわれねむしれれわ月をうるト

野宿月をうるを 前中納言實季

夕かの鳥の月をあくとせやとそくう野の猿人

建暦二年詠寺名よ霧中眺み

民二位家隆

うくれ用ひ戸たねはれ月をもんわくわくの

人道ニル道助親と家をすまし海橋を

參議雅経

朝う門う神うくわの我うふ月うますしも物ひき

楓のうや申え 錄念を大き

楓うすらいせぬ膚病あふうします(松)うやうも月丸

前人所言考家

ウヘ鳴のうの音うくそさわうかういの月うまを  
もう死うとくた音うちけうる楓泊因麻

皇太后また更後成

那うしろわうの月の五切う諱ようちのうりうを

三三三う薄ゆう。 中官人史雅忠

様うつうの草又うわうかうとむとくうとくれでう  
後京極持々家ナミうきよ

人二佐家隆

古鄉にカツサ一神もいりすうすれ様の故ひテつを  
ひくすうすれ

御奉人を

草花もひすうわれ様凡のうしとよくとくら鳴く  
草すねのうくもくうゆうけく立四上

日記

吉村は師

あくねのうをよすうり立四の上よすうり

よこへよやうてはけの故の凡事  
けつ夕日をよのこつてこゆきつけの事す

思ふと見る

捨てと見西

あしの指とまじり是のらうせま教マ吉  
伊賀より九月りう切のつけ。

女御徽子

放とく我ととまく脚よりものゆう引ひ  
式乾門地舟とまじくいきよくうげけの  
を思て後はけり。式乾門だれ便

都いて牛乳とすり鈴鹿町告じみどりす

建保四年百三辛

僧と行意

衣あよタ凡まじりとのあアキラの弓いす

歌

多京秀彦

都あーりすとまよ處よけますと見てこしむるの開

海路ゆゑと

是を后文と更後

袖わくはくのぬのともおねじし内あひを

建保三年内裏七とすとまよタ様

に二位家隆

まくとすの中しゆるとまよそのをとゆ

前中納言家

一引しむ草木と亮のやう卿はくさにしよをまつ

正月百三三中 オ子内親王

義あら野路のまよゑやといくえの都をまじて寺

二条院賛文

少鳥鳴すかの河風かうく風けびよみ

ナミテ満川一町用ひ雪を

夏至之後納毛

妹ゆくやのちよみ雪をもとすこねくわきの

わにゆくうとうてかけぬ様すわまよみ

生け草 陰三泣行旅

同くいきてアヌア白けの用ひあるのと下角のあ  
百首叶うの中る用路を

大内門内ひき

島の音トナヒアぬをのくとれひ切てとくとくとくの用  
大事ヨリトモス生け

佐行意

ちそしろすのちやぬ幼こいてよしにくまよ松

麻人信と通慶

雪つあるのとを通ゆみともやうかわこがせ

怪にいにじらしくよきはけ

持儀師教雅

日向國守方ハ江戸宮や又ア武田守内里ニ  
後も作れど名所テナリケン

赤穂雅行

あましむしりつ、爰づりのゆわくもねて下道

大寶元年十月天皇紀傳國より御入られ

せり

爰代のみこととゆく白妙の才、表ひ出されり

え

さくらくに障くらうあつみの春、うのうとし家とわゆ  
さすててやうのとるてうらきを草かのとてうる

前田人志基

ゑひつゝこゝれをうかくがふねアとゆきの白毛

山猿

前田人志基

やまとまよりみゆう里にて鹿走はまよ山猿今  
建に二年和三郎三郎守合と霧中書と

りんそ

西園も入道前人志基

苦やア我よりまことにゆきのまよあひのよ

名所テ後かけ

後鳥羽院下野

カノヨミからくね附名の幾日よ成りしのうの玉

様のことを後はうるる原信實納毛

風毛と野原のまれ夕日くいさく水やうす

中務卿親毛

いた秋くまくにすら草むわくやくみのこマの草上

きくよくうけすすのしまへよ

人嘗て人見高毛

浦風よよの里うへぬけたど流のじうむねもすみ

羽内持取家。万葉毛根

藤原信實納毛

背風よおひくわくまみよすうせわの毛あをねせよ

様のことを

後はれちへ浦原信實納毛

わよろとし磯はるの御のりうそそ草の毛やけ

よあへと

様のことをうへとわをのうとおけよもく

中納言家持

角れてすらかきに塩こあらぬやうの海ア波とすも

山毛赤人

凡吹ひ道アレしこれりとみじのうえよもく代

海路日暮こいを

麻用ひた人夫

りまかごゆう、じにくらのふるの處ちにじの事よけぞ

海路を

平も付

事人のごまわはんひすくじよくわはんひすくみ  
取へぬす

夏至基返

ねよりあやの附、ごよほきわよしりすまえはゆつる  
里ふくしぬけぬ又辛度盤納毛毛とすみ  
乃風にまづれだけよんすくちとすくやひて  
たるみの浦をもくとく渡ぬけ。

安志門也右車門佑

うそやまといだらすのうそ轟車ふるふるくろ見  
鳴海ちにくくま門をぬけ。

藤原光後納毛

あもれやうけじうちみのえれぬあくまで浦門毛毛

三百首のすみ中よ都島を

ト上天皇

都島うよくよくかくよ人わやアヤシミハシテ

八十七年も二年も一一百三の中よ河を

中勢マ親王

お里すましらふと詠をいづれ鳥に都こいま

百弓弓の様のくを 通周は師

思ひ人あやマジアハヤニ鳥きよとよめかきのう

ミ

因京天皇ヒテ

まやみの神吹つすやす風都をきもいもつて吹

け

大内言様人

都をあわれぬるに引つまひ様よみえり

後はせも入通前用ゆか古人をよなげ前も

百弓よ

皇太后又丈俊成

すゆよきこねつて都の外あそづり

歌ノ舞

後京隆祐朝代

ゑなば都もちつと達前用のあくよも

昇中晚凡こらしとよすととれけ

うち門にむか

吹風あしたとおとを都えよのよすと夕暮も

様行のく

白毛をえするや思ひいのよしき

えやまく

續古今和詩集卷第十一

應平一

彭一之

葉平朝夫

志より思ひやうむせ中の人にやまやまに  
延喜十三年亨子にす令に

躬恒

陸よどうとすいもとすとすのつゝや  
志乃寺にて 素性は師

みねんと引けによしわきはゆくとおとおと  
原中納言家

漫々とゆふわ人の事とへじつアヤクヒトを乞  
和音所とくと六三テムハケラヨ初志

參儀雅経

糸下ヲヤシよソモヨリ流つぎもとアヌ筋ひては  
吉人との物の百三十印ノニ

後はれも入道前院を

ソラノシキ無能才をつるむてかくわづか  
凡も元年万三千字

入道前院

もともとやゆてえをねとて神よとれのうしきを

初兵のことを あけ門にゆす

紅乃うきのじつやあせくのことをとくとく

坂上是則

くれすわ乃ゑよりアテシキのたまにトス

前大納言志良

思すすわふかしりやつはんくわまアタマシテモ

え羽手まちへ道筋持取家立たまのまうちよ

寄衣急

後堀河院民アマ典は

山姫のうきぬまくれすわめまくア今立

建に元年十二月和テ風寺今

麻大納言隆房

よきすすわすうりよアはてゆ出わすみもすう

内大臣の付百三十日所立

え羽手まちへ道筋持取左下

いづきと神よ外にすくのト草つぎハラヨリケレ

志喜うらく

信實劫丸

えぬへ門れ、伊ヒナリミトヤミヤ思ひうそ

紫は鹿百三十日ナリケン

笠を店裏あす後房

こひどいもいもつて成事トシをみすうまひとも

おとこち

前人内吉忠良

かのこのことすとらすとらよしむらのことをす

人處て玉家

下秋のいとくわくの事、計り難いしる候の初に

後玉放行劫た

人金子一五〇枚をねぐらうと雪ひうちと死を

せも二年を今又モア兵のを

前左人たら

もよそへよかう方をのいきじにきてもと涙を

人足りずとほげく百三十六中

中務卿親

みちろくのまのまひやこじめかどよと涙を

もよゑひくと

いそとひのまとこりくちよとやまくとあとも元  
とくさき毛にとけれ難波をくらのまじよとくを

新法寺今又寄旅也

左上天皇

もよそへゆゑ玉とよとせよとせよと

兵のゆうゆ

後兵取也け

よもじくゆくとくとよとあての浦のあよ狩くわ

衣笠前田人夫

我志いわよのいややせうちとももうひすよ御の綱を  
寄船物をりしと

前用口左木

いそひよかー船のひに我あづくせうほ  
彦治二年百三十日寄宿立

中納言為氏

立つてみやけよく白波のとアド高ノトナガニ  
ぬ百萬する。 野宮左人た  
まうの君つて國めもとてどうの波立ぬわこう思へ

身立のことをよろ。 幸政村納夫

みちた人立すらあらうの君か國の塵れむと  
後東基政

行のあき門を國めもとてあつてアキラム塵のことを

真照は師

あくと乃君の國のひもと大吉井のあきらめを

立つてみよこくせう代神よとわ國をあきらめ

五位知家

あけてもんうとくれやまの幼少との草へれ

ノも元年百三月初五

前内と毛書

ゆよひのとよかく一やうさてすりにまよいと

寄廉益ことつるを

鍊金右大吉

お

右馬門皆氣格

故に納房かくわく廉のいのじのとや固くとさき  
人されす馬の故もとのとせまめまよ生玉てま  
百三す中よ素凡益

右邊中將經年

とよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

せひよろ人のとよにづりりり

謙徳

ようやかくよへりよへ花落いよる野よくよひよ

麻門とよ 勇家百三す今

捨大内吉郎明

きよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

内庄持家百三す也益

藻壁門だあ

思ひのなよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

ルセ二年十ニテ薄レハ一ノ也無事

天皇

我ニ又以テアシテ御前ノ門ノ月ヲ三  
名所サムニシテ中止立ト

前門大木基

度ノリアツク代モトノ月よりも立テ  
ウリモラシキ

近ノ人  
旅恒

ミシニシテアツクモテハトニテハニシテ  
入道ニシテ助親ニ家又十ニ寄松立

西園ち入石前立致人木

ナリ又都乃ちうを立テアシテ御國の様凡

寄雪立  
は庭行家

ノキモヤシトリシカニシテモヒモヨシシテ

皇后御内

ナリカニテナリテアシテ之の上ノ御内白木

近ニ住家隆

附毎門ノ寄所アリシニシテ雪の立ツキモヒモヨシト

名所百モテノメヨシケン

順應既止

秋ナヒの見聞のうち也門寄也アシテ復見テ

卷一

麻中納言家

立りてゐる所への、山房と仰るもよみがへ

信實納ト

寺をさへゆうては神の下にまみてよしとすへよは

麻人納言奏良

いはともかくし神の初内あらはまよひうちやまつて

ち御門にひりテ

立つてお構い門のタゞれまこすとねやまきを

延ニ佐通氏

まのくらまよいにてはねうきいと年も神の内を

中務卿観

一氣すじて社をまねりああと圓すと大神のそつま

寄る立と

後鳥羽院官ゆ

えよいて是の神はまことか力あるれどもひには

立すの中よ

中納言

あくまくいと大神ト草木本木を吹きて有ひませ

之後納トすうちけり百萬の志のう

延ニ佐通氏

め思ふと想はまくわざきの神をとさきてかけり脣

西主あるのゆ

順に記述

御神ノ物のことを爲め草引へ門前よりいそむ

歌一ノ句  
夏至先後納ト

桔の葉車と草車と申すの名に氣入も詠

嘉治二年百三月の宣草也

前を取人夫

人持す草車と申すのうれすと見いえ

延喜二年三月一日也

左上天皇

小草と申すのうれすと見いえ

志の音にて 右近大持通忠

とねりと申すのうれすと見いえ

日大太

わく城乃君御よかま白波のうちとアリぬ立宮

百三月ナウケ高鳥立

辰三位高健

玉やき月ノツコ通トアカモテアシモヤヒノミカ

歌一ノ句  
躬恒

にうにゆるすとみづち我アシムヒタヒ

讀一ノ句

里ニモアセドモイロニテのまよ多モほてこさき

かくわく有どよめ原木の下へとさすを

弘むえ年百三十り。身立を

入道院を歴ひた

かくわくと人共アリ。声ねじる。年ねじる。の

身立を

捨中助言長雅

之れ多のうり。其のよき。人アリ。袖に是れ  
三月三日は。内也。

は戻れ家

せよ。かく。我アリ。うしゆ。と。きそ。下。裏。

建も三年。畠田。十三。三

夏至信實納夫

年。この後。立。立。立。立。立。立。立。立。立。立。立。  
後は。は。入道院。用。白。の。立。立。立。立。立。立。立。立。立。

そよ。 皇太后。文。大。後。成。

かく。この。洞。よ。あ。れ。也。袖。ア。ヒ。ト。ひ。く。つ。手。ア。ヒ。

支。方。あ。う。今。人。内。言。通。奥。

まつ。ア。作。も。袖。の。な。う。ト。モ。ア。ト。モ。その。い。や。う。

歌。一。度。も。

衣笠前内夫

かく。ア。多。い。人の。里。ア。シ。よ。か。ア。ト。モ。ア。ヤ。ウ。

伊豫

はまく思ひもみや川ごそくこゝでうすらぬる

廻籠門にせわ

袖乃へよこぬるもまへばよきこの秋の夕

中野マ親し家百ぞう立を

麻左翁は皆歎美

いじき思ひうすりる朝よりアテよすいゆふ出るハ

歌ノ子

わらは師

袖のそへぬかさざれあゆてはまくうやけりや廻籠

急鎮人ほ

わの廻りのけのりうはいかとゆの中よみづよ

せりくへよわすけり

和泉式部

何レモソシムトヨリもといて廻のまじよアセレ

支那番うなしに  
參議雅行

思ひきくの廻のやうにせてもじいのよよて思

寛治二年百三十二月嘗て廻籠立

麻左翁詩考家

さくすり廻の水と人ソリ西のソリ袖やすきは

新鹿井由体

きくすり廻の水と人ソリ西のソリ袖やすきは

立一ノ日

トスヘーハ

つまうのやめらく新をみてよう後もとわせと丁度

用ひ前左大太家瓦を正見立

前人附言考家

かやうあらの黒ひえの日よう號でもとすまち井  
印々をすまうとれけり

今上御年

聖アキトガミの后に黒ヘヤツシムノ神の也

前中附言考家

しめりあがから山の草内名よりもんじらへ

吹田ナミテ

前左大太

なまなまるみ門こうアミの聖アキトガミモヤウル神社

立一ノ日

上邊赤人

おじよいだりとてすみ根ひなまき者日よ立邊

四月一日は人の生れる日つづりけり

後玉花床納

うちけくまうとてて郭立ふま代也初吉を花

八重表段大太家ニラニに立志

左京人支那浦

立一ノ日はまくらう我のうるまううううう

歌一首

曾祢ねむ

初めもよきつとく先の事のゆゑよといひを  
かうえあらうるるものにまじては「うちよきやま」  
よみへ

鶴乃くわがりのようのときアヨヒアヨヒア  
寛平ウサギ原又うきよ

よす。すくは思ひし門を詠くへてうきよこころ代  
百鬼行中よ。 順應院比哥

今更よんぞうつ門をわらうとすすめにまき

寄稿書

便り行意

くれぬ乞食もとよからうのどうしはれせうとう

立乃すゆ中よ。 式丸門脇行運

仰せよゆのしきつとのじうく、かそぐてよ達すよ

家よう令へけよ

五三行

いづく立路のまきげ我思ひよく七年のへよし

歌一首

讀人不知

下野ア室のマーカは立候おとしわざと念社ノ代  
魚子もあれ三川のハ格セドよえよかは思ひよし  
か井行ゆきをもてり水のこすよのをよりよ

是乃乃とすをひく水のへすすもと立とてまつ  
住ゆる海のみゆくとあらのとおもへ人を立とてま  
するの浦にまとうすわよ衣袖引りのきぬやま

人磨

うのまにちてこ我みじう月のえむる事とするト  
かうじけくアマヤタマハのねの物の  
とくらうす

續古今和詩集卷第十二

魚寄二

熙治二年正月

まる月觀

うれしのや、富士のうづきよしわくふよしれい

立の月

藤原元真

思ふといそアリヒトツハシノカニアモ

うのまごとも高垣高木シテシテアムリ

けりかくよ 今工脚寄

やうのあちうづくまうもんくわ中のうえ

契不違立のを 左京久史弘浦

傳こりてかくすにあつしアヒのあまうを

賀彦祐するよ

左三佐志家

後のせをちるうとひきゆ立一やををか

高玉羅立ソリト

左三佐志家

川ゆくみれてこり違とのねくゑよけのむ

歌一す

麻人内吉基良

いあくとみづみくらうひく圓とくとくのとく

寄ふ立のを

新心井内保

思ひよむくまうのとあくとくとくアヒのとくら南

百尋三丈よ

衣笠麻引人

川ゆく、まのねのねぬち立ち縄にれきこえよとてこを

洞たおれ家の方えよ思立とくら

辰二佐家隆

人あそびのつりにゆくものかくらよだらもく色

歌一あか

吉部茂元良親

かくよくちゆすまくらふづきくとくをくら

不違立のを

捨律師隆昭

おねうめりすと違してよかくとけ人よまく我

はまき寛

百束用くわしていくつ令下すもうちもうのり  
文承元年内裏とくをう諸を代けに

鳥木立を

外庭行家

川主代りつちにやアマのゆうわかとくを立  
計へ

豪辟ち門に立

やまとての立木のふくへうそとくうとのせをやいと  
左京と美乃浦家立

民部ア殿頼

達しをきよつらうけたりまうこめり令下すうり

立のすして

捨忠内言ちむ

川代を立木とくをくみし我下す令下すうり  
もとすかしきいわくとくのせり我りもとすかや口ひし

西行は師

うゆよすまえを思ふ令下すくわせやうとく

文承二年九月十三日立木のうきよ不達立

用ひた木

ねうん神のゆき事とくねうて木を限こちくまく

前大内言考家

さうくうを限の令下す年月からとあるやう

人納言通成

中くようそとくわしまやいわづいとくかせア持す  
中官文史雅忠

ひめくようそとくわしまやいわづいとくかせア持す  
内裏百三十すよきよし

小庭行家

人ちも用よう外よあきとこゆらしのやとみる足  
印くそよもと抜け

ちぢ門院

まほりあわゆのぶ成つあがひのまうくさどす

立の立中よ 犯世

日出やつひとくとくおうちわくのぶ成つあらゆ

名所立よ 中務マ親

くへや立とすりあらわみとくわやの始よ

立と百萬すよ 二重院賛成

やのふと立とすりあを立とすりとくわよ

立と二年百三十すよきよし

皇太后文史後廢

いすり立の立とすり消アテ室の八幡宮をあし

印くそ

宋草は師

うすにまの八鳴の鷲<sup>スズメ</sup>よもじの是<sup>シマ</sup>やあら

支那之後納木

おすみりかのあひを焼<sup>ヤク</sup>いをあゆみ思<sup>モト</sup>ひくわ

平親清女

こやこのあひての浦<sup>ミナミ</sup>アキの鷲<sup>スズメ</sup>とゆきはうし

源後室<sup>ミタチ</sup>納木

トシキアツのねいづるへゆひうし

五三屋<sup>ミツヤ</sup>家

桂<sup>ケ</sup>の浦<sup>ミナミ</sup>のうすともあをえもくすくあひ身<sup>ヒト</sup>

門入未<sup>シ</sup>けの百<sup>ハ</sup>えよ名<sup>メ</sup>原<sup>ハラ</sup>志<sup>シ</sup>

吉<sup>ヨシ</sup>生<sup>シテ</sup>入<sup>ル</sup>道<sup>シテ</sup>接<sup>シテ</sup>左<sup>ト</sup>

往<sup>シ</sup>きうちの<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>つゆめりあひよ<sup>シ</sup>の志<sup>シ</sup>

文永元年十二月内裏<sup>シテ</sup>よ寄<sup>シ</sup>ね立<sup>ス</sup>

大納言良成

みうめうすね原<sup>ハラ</sup>をこそ我<sup>シテ</sup>我<sup>シテ</sup>まを手<sup>シテ</sup>

不遇志<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>右<sup>シテ</sup>無<sup>シ</sup>事<sup>シテ</sup>皆<sup>シテ</sup>成<sup>ス</sup>

妹<sup>シマ</sup>のねの梢<sup>シマ</sup>れいにれいにあらがひくは

順<sup>シテ</sup>代<sup>シテ</sup>付<sup>シテ</sup>名<sup>シテ</sup>所<sup>シテ</sup>百<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>う

赤中納言室<sup>ミタチ</sup>家

あく波<sup>シマ</sup>のあ<sup>シテ</sup>のあ<sup>シテ</sup>あ<sup>シテ</sup>ねむれすくは<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>よ

あま百番テトトヨタリとぬけ

後鳥羽院御

わのやみすのほくじわよへとむりと神のいしゆき  
を

赤隱尊

かねすの國をとおせとけむと立めつて地のゆ  
女帝廟すゑとぬりとくとくとあくととれ

天磨山寺

達レハシムラウカムサスアカミツカムセアキハ院  
百三十の立のくそ

キル門院

思所ナツトキムクニヤミハナリトヨトミ命とほのう

中納言告氏

立とひくやとひくや思アソノのうする命とほのう  
殿宿門院人浦よまとけく百三十

麻中納言宇家

さとうみすの初のとやくもよんのまにう

立のすゆ

醍醐入道赤友院人

个れわ神のみすのわ波ひのとくをこころよ

河内持教院百三十

支那事ちと前持教院下

因の事より一再とよりて一カ月三日にして浦河

歌

葉平納夫

因川を下る所へかけ代アカともあれてひまつまし

寄鳥居をさむと 平ち付

まく阿佐ノ中の里ひひふくあくやまひはね橋  
麻門木き基家の石まくすをめうと

源真氏納夫

年をふるぬよいよかすとほいきやうひまく風

寄綱車をすまう 逆二往成實

立すす神のアリ綱のためゆゑ御宿あり

百萬中、前定木奉

わいすみにいのすくひつゝとすとていたに因ふ

寄附る車と 入道前定木

神の事に思ひまくのくれを抱ゆみすましに寄付  
立すす

紀貫子

けじじや思ひ紅いなまくのとすらえよう有り

光明寺も入道前定木家百萬の事に

源有長納夫

と神のくわくあく因川を下ねまつて中づる

歌

新井山荷内

甲子の年もとより御内閣を勤めてすまうに

柿本人也

遣へて門へての間にものづくしを申す

周作人也

じつようどもさわざう海の濱の風ごとお教へます

名所志を

右邊中將行家

この年のわづくぬ浦の況ゆきこうからよしもとほ  
立のうちよ 皇朝后醍醐天皇後成女  
かげくにむじとうすまそのわすりをのせりよ  
寛康立を 爰ふえ後納夫

よきいとく袖やとれをきくらうもみまの浦の風はる  
宮本益のことを 後醍醐天皇後成女  
わづかやそれよりあわねてもあはアレの文あくほえよ

甲子

源後半

思ひよきりてアホをこよねつするよひの差を差そ  
後醍醐天皇家六百事の令に

前人所言集家

やうよしてまくとゆくうすく衣つす、わきと風ひとす

辰二佐家隆

かじくやうよしてゆき橋もすらめせりわてごちき

すうりけ

前中納言近旨

うるわすの聲はてくともやまとみをよくまわ  
人ふれとけり 一葉に脚す

我まじくさすがの行ひを告しゆふ聲を鳴くす  
歌へます 錄念をくた  
つまきをぬけらのよの鳥かげ ゆゆこひよまづく  
ぬせとねやうにうけり

たむへ持朝乞

くまくもうるにともああをきとくへとぬけうき  
奴を おとま

いよゆよゆくわつきてゆくこゑよあを奴にんじ  
百うすくとにするうけりよゑのす

後玉之後胡末

はの國乃こでのわやま野もしてひのねわまこくよを  
歌養立を 指中印言ら室

佐武うすく月日をかうて今更てよ年の高下

後東極持改家うちよ興家言立

前中納言立家

わくよ年年の高風にあくまくうちけのきこきには  
あひ高こうのそて二重ゆくこりうとけり

夷五高志

松川のやまくらよきれりへいとくらむのうちきを

呴ゆくすすむすうはーはーよを

入道前を取人未

わよゑ風よわち水の水をあきらめえ風ひのやくも

歌くすよとくす

廣原川神じくづく風くまんやまき我いふとも  
おほ仕よけくせつりけ

監令婦

かく木の木の木の木の草をいやさかばよつまき

歌くす伝遍歌

ねえのむちや下草をいのせみつる思ひ

あくこす思ひ

續古今和詩集卷第十三

立章三

五十音圖ノにナケルト事草立

後鳥羽院ちう

神主とくあひゆはを移代ひあてニ一尺のをめづる所、

建暦二年サモニナケル

足二位家隆

東路乃より本橋よりマハツメソツキアミ

遠翁立

麻大納言も實

我を毛絲すわづりてナガタシニカニヤツム

一法性も入道扇用白家立

左恭儀親隆

立多可口ノヨリノ木ノシモジル社いづれ松葉

歌一子

秀宗信實納

在等後院之

立のち立中ノ順徳院御守

候ミホリシムツモ鞠じ小豆丸セヘハシヤウ

寄水立の立

前左太也

立かげんを一トテヨリ立の立水立の立水立

魚の立

鷺可也按察

あそとくわゆるのまんき方にはせしゆかはねやか  
す乾門にち運

月のこいとをとるこ思ひよもて名づら神の月うを  
月赤ゑみを

新たにみゆゆふ

立キテ二月五日アラムラツハルアリトモ月のうよま

後鳥取にまく印合を

大納言通臭

御代タリヤドクマガの月ちひに秋ノ月うを

寛治二年百首うる寄月立を

後鳥取宿下野

月立にくわくねえよやかと二面をかくとく

寄西魚

ミテトモれめうじきひの初るようりのみ人のひをとえ

後京極持家白石うのちよ

は橋殿照

立キテ二月五日アリテシテアリテシテアリテシテ

松サ佐那瓦納

この人のあけやをアリテシテアリテシテアリテシテ

百三十中五立を 中勢ア親王

終之とてみまく川のうせやうをいふ乃モ六月

十ニ三月に寄月恨立

前を歎人也

有刃の刃をもいりけれどもやうりんのへもせみふ  
鬼立てるもと 人遁前を歎人也

あづみ鳥のあづわまきす我わよとお用の名見

歌一ノ音 大儀冠

むくを三事こし乃ヨ秋ツアキナシアキナシヤ

聖天天皇脚

すゞさるあまのをあひにこやかのうそよやいまわは

田原天皇脚

余ののじらせのいつくわつ身へりと今やうのや

後は忙ち入道並用の家ひ百もよ初違立

後はちちなみた

久文ゆくまごとく望ちトノムトツノ命なれど

寛治二年百もぬずよ寄れ立

後鳥羽院下野

きくはきよれのうたくもくくちとよのよし

歌一ノ音 夏至信實納ト

早いまとぞひと思ふかなばよの世ア初立すと

平政村納ト

ゆゑひ逢ふも門の間つるうとよれり神のみかよ

用ひ家百事すよ はほり家

うううう引をみてとくとくあらうとくよきあひに

寄り鳥立と

亥豆烹泡

立てぬれよこけねふ下泡をゆりをうひもねつま

後朝立のいを

亥豆烹泡

鳴のゆでゆ鳥の印紋は幾度かわせまし

通因は師

めやしてゆくとく鳥とくとくめうよ何與いえ

業卒納モアちよー秋リヤシハける事すよ

よアヘーッ

禁乃よみちとて下にちとてと約のうて鳥ア鳴を

元良親王家三う令行

限といふとねよをあうみか引のと乃がううと

鳥のすね中よ 亥豆烹實納た

衣くの被よつを一月氣ひぬ、固り、アヒアヒと

取ハく

小分段

あくとわね引のうとよ門代の御、也死ぬまし

鳴立と

ちか門だか

き鳥の力れやまとうよと鳴立ゆ鳥のあとも

うとすと姫のくものふるゆいこ後ふうすをき

をゆく

允恭天皇御三

さうゐの錦ぬまをさしきわまくにすよ一の

寛治二年百三十日よ寄り立

麻衣取下

すくもよむれどこちく様うにまくつたけとの引ち

乞物奉事も入通麻衣取家百三十日名取立

麻中納言家

アモリヒヌ出乞りても鳥のこひねの林よりのうす

寛治四年百三十日 住ニ佐家隆

くすれ入わいのひと御手すみえつらの筋の筋

内侍持取家百三十日後納立

幼ひみ人のよゆくおもがきみまで候うやひす

熙寧二年百三十日 留鎮入信

えれは門けと通まくともとくとくの内、

鳴無と 花都忠房

あつまひて坐くじつより引くよきこまくらを

住ニ佐家隆

を引つた道をひきくして月がよのとや思ひまほし

麻衣取家基

あつまつこれア限の月をし定めあるこそ世の神が列ま

寧月立と

真照は師

ミア神の引代ようめうも同上うつ有あとの月  
中支無事によくいはけりといとくく三いと

ひけ地ハ納下にリけ

安永實方納ト

久之乃あまの月あつて月のわえ入すえす年より  
室支家す今に

坂上乞則

移<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>も行<sup>フ</sup>る月のちうよもあひよしとづき

毛

左事佛敷道祝

我<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>無人<sup>シ</sup>と有物のえをすと仰<sup>ハ</sup>くふをけりか那

建保四年正月三日

西園寺入道麻友義大夫

独孤乃ももてくゆこ納充めきてきて何<sup>シ</sup>よとがこ是也

毛の寺<sup>シ</sup> 中納言

カヨウ<sup>シ</sup>と今<sup>シ</sup>といひ<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>引<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>と思<sup>ハ</sup>うとけれ

中務<sup>シ</sup>マ親<sup>シ</sup>モ家<sup>シ</sup>百<sup>シ</sup>三<sup>シ</sup>ト

みり度<sup>シ</sup>のこ<sup>シ</sup>くと<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>いた<sup>シ</sup>行<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>名<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>也

主<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>島<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>皇<sup>シ</sup>太<sup>シ</sup>后<sup>シ</sup>主<sup>シ</sup>後<sup>シ</sup>女

もあゆれり<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>嘸<sup>シ</sup>のや<sup>シ</sup>秋<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>け

寄鳥立

前人所言為家

有一女の別々今のからして鳥立もしくは御のとを呼

藤原重頼女

達とへ思ひてゆき鳴くやつわくむかうそあつう

家のうみよ鳴立

後は性ち入道亦用白象立

百三十中よ

衣笠麻けんた

そくむねいづりすなうすくこめにゆくうじ裡の差を経

立のす中よ

前用白た大

思ひ秋ね夏り立にむけ

よの名あひ行はぬうう

乞用筆も入道麻持役家十三十又方に高達立

羽化持役左大

うつすアテのよの差を了みえ況むとて血床のう達

後京極持役家百三十うちよ高達立

人無マ有家

林立ゆくむくうきりつアシモアヒウヌの通

建保元年百三十 僧の行意

達立ゆくいだらつるく明ゆしほせゆまううわすと

夏中達立こいへと

參議雅経

思ひゆあひうるまのこしら鶴鳥のゆきわりや先  
立のすうえすう 小野小町  
況くそくにうをすうてあそび人のゆきう下  
夏ゆかすすういともあやうけよ中のれゆくと  
みまう薄とくれけの付寄夏立

今上御三

伊人

或乾門也山通

思ひつむうと人のゆきう下立のみゆうけうと

立のすう

ちぢ門也小室相

ちゆくとくのせうと立と見とほくマツの夏の廻路

人乃をこどもけくのくよまくく用の多

書てかけれ、 番式部

くれのゆううういとあまねくじくの多きあた、  
寛平ル付后まうちのう

よみへ——

放ゆよ多すら康の歌ふて鳴うとゆてあらゆ、  
こきくゆけく人の行吉とゆていとく乃  
林のくらうとゆくに代りけんと見え

けりぬすよ

馬ゆふ

もすと放てどとねほの國のいと之の松を我力すと

宮ノ名前立

前人幼言停平

けつね洞よい下むろの下まめあと放すじをゑ

立乃立の中よ

中野卿親玉家小皆

限わづくさくとはまく余も見りけ後トおま先

今上御三

みづく人のひりヤ川りとせりすゑわざ引く

百三十の中よ

前ゆく長奉

しれすも雲淡は星のすとみかわすれ立れ風

え月事すも入道麻持取ゆくの付く百三十

名所立

前中幼言室家

わくわく地のりきあて河今い發力よき方よ

立すわくよけよ

限わく令もくさくとあすとあす月日ア

市内アの下アホ(こきけるよなや)

立きもあくう正義い又の日れをけよ

天曆也寺

移れれはまよみす毛やをあくみに(第)第

按察役駿け丸

アラミルカアセアヒミテ日枝トナリムテノ第

人は万代

思ハセモ思ハシムレアヘ野ナムニクルホアヒ色  
立の可して 後宮御持又麻衣改大木  
カクニカラ板舟の清水アヤウヘムテモシモキモ  
内裏百ミニト寄る事無

右邊中持經年

白鳥のアラミル達ニム代物ア御モカムアムシ  
六脂引スル人アテテヨリムハケアマハイ思

ルシシト 先後胡末

いはきアラミル是アカハ印限の今アシモニモ

アテテヨリテリフリケヌエ

皇太后文太史後成

カクヒナクち門ノ用ニゆすれアシモナシナシの聲

ルシシト 読人不知

みれ、國にうづく、かく行ひて、なまこもつて、

年のれト

續古今和歌集卷第十四

魚平曰

歌一毛也

よみへり

あくまか年のミシキを徳としてゆすりて社新松すれ  
先明事すち入道赤持及家ナニテテチトモ寄すれ

立

前中印吉山家

立歌とみとの後の新風くくうじりの月日既に

立のす中

前人内言え頼

キノノ里つりてつてつてわち代じてのひとめし

八事山高木

三ツのまきせらつ実のふるきとてうき昔のじとく間も

唐壁門にサ持

体なれタカモトかられめの人の乃わくとすよた

後玉音實納丸

いとく内りのとすよとふんをとれぬうううよと

源雅言納丸

毛丸ごりてりうの言のとすよとまやのとまやと

大江忠成納丸

冬されぬ秋やとすよとすよのこゑとよもやをれ

信人信都室因

是れ牛く承うるふうれ達との有し音マハシテ

多き也

藤原基紀

袖行うるあやの庭ひよりうよ乃ひ候てあはとけト

大詫見す中ニ

前人所言考家

高砂の山アふ鳥見りけるもいふの山尾もくえ  
女さむそらにやうけほのして山は風や

きすすうづくいじくすとて

本丸は後

外まゆよあやをみづに山の煙やいづかくも

近ノ内也

中勢ア親王家小猪

うしよよ人の男とくのひすあり

百首うの中に

前人所言考家

恨子くもあまのりむくは一卒もくふくくふ

恨方志こそすと 你戻り家

すすとく我力くもくわまのとじ里の上うとく人向て

もく百首ううちう 後京極持政前を以て來

きくとくとすうの宿の浦うとく波のうねりは

近ノ内也

桜本入也

くのあまは爐燒衣をすも立すわい三井の川

貞文家すちう

忠參

すすめら今いざやにちうまの風にむかひすと  
キナミテのゆる。衣笠原ゆく  
さてもゆくのゆくによろしく小舟はこつかし  
子へけぬのりくをくぬれとけとけとけと  
けとけとけとけとけとけとけとけとけと  
けとけとけとけとけとけとけとけとけと  
けとけとけとけとけとけとけとけとけと  
忠義

カのじきを身へてあわやつを何うそ  
まくす 旗人

北貫

よややく秋のす向のゆへすよとをさん人の事  
謙徳

かけくのまじらうてくつえきえ祐徳は義徳は義徳

車子だしき

くつう有けあはれある年ひの衣行ようせき  
中勢

人内言師

くつう内言とけよくともに僕つやうへ廻へる

意う中。

あうじやうなう、義徳の札をうそと神は義徳

人をひきとるゝ間のうりれこちづれひ宿す無事  
じまのやうもみをなす也に思はれて立てまふ

後鳥羽院

秋の年正月にじんをいれてこよてく文書の見

大内言國行

凡そそくもあくまくかといふにす幸ひあき

源重

故のちあくまくにあくまきといひてす

西元皇后

三死すわくまゆを中くにすよつと思ひ

邂逅逢ふこと

六条入道赤穂太夫

ゑくすりよあ妙の花やうとゆくらむ

後京極持家家の万葉詩合は徳志

前大内言兼宗

みれよ又ちよに一よのよれてすに我を思ひ

人處て有家

天河娘のすをふえいもやうすよまいけふ

柳邊主と

太上天皇

やうの柳がるよハ娘をまじ絶の様に我が身

百三号の中よ　臣ニ佐家隆

を乃門へいに移すのをえてつゝく人月の久絶

東立

信中納言國信

思ひわもあらしるもとくより月三我といたる所

天徳四年の裏手今よ

中勢

トトク雪の背に處すし事やとまゆり  
兵のすわぢよとけよ中よ

麻中納言守家

山中よはせす月新のぞくによしよし  
遇不違を　入道麻を改ふた

達うめより月のひよて後多くつまくには  
後鳥羽院に

うづけのひよみづちよいようれうれ  
床中納言守家

あらうき何ごよう面をうながすも周の既に

足もと年三三三とよ寄衣ゑと

比人内言典は

西行ゆうもとよすつれりの袖の袖よ

立

柿本人丸

後へともあをあつてト組のじよひをあすとくらん

山川の石函をもぐり水をあつてあじこすよ

高松魚を

皇女后室史後成

あうけろからひのひなゆかへいへんをみえ

後京極持取家百三三

高松鹿右衛門佐

我をつま笑へうき音をひいてとくとくとくとく

寄行志こりしとくとくとくとくとくとく

ちび門地ちず

喜行のうの笑へうき音をひいてとくとくとくとく

は成も入道前持取ふくまのとくとくとくとく

堀川右衛母

さうじとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

二日うちわいさくけりぬる五月五日ひにとく

とく

實方納木

あひやのけよおもあやう草木のとくとくとくとくとく

六日女のもとよひとくとくとくとくとくとくとく

道信納木

俺おれがきのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

後涼歎のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うそおうして抜け出せえ

業平朝夫

毛飛草毛の野へからくもくちを後れゆ  
百三十の中よ お子内祝と

めい毛飛はうこよす成みをとみう野の鳥の草生  
立うの中よ 中納言家林

ウの野の放放らうくいもくえつとのと  
まゑ元方

放放のうめん人あくわくたアくうりういきと

寄寒草毛こじまくと

俊吉師

日もうぐれぬゆかきりすがとのとしほとえを恨み

立う 曾祢好忠

因手毛のよこし吹きすいとむへを恨み

は手良下

あひてかのゆくとあとくア人の聲をもと

橘翁義納夫

うりてかのゆくとあとくア人の聲をもと

寛治二年百三十毛寄草毛

人翁卿有教

月草乃花もあくまや思はれぬす」のうのうを  
内侍持取家万々う中に

麻中納言宇家

えかりきみのゆ中一坂うて又をとくらめのま  
百々う中よ 中務卿親王

付こくえかりきし又もわす草もわゑみのまを  
け吹ふすのち名草のうとう三井山ゆく歎き

月花門代

今うつやまう草の邊しきつる門前氣也りすよが  
春のくさ

安藤門院も含

今うやじつかうに處をすつ見よくわ我力やうと  
建もく年こそうよせを立

人経言通風

偽をもひりゆふはく(はく)よう人の金うちうそ

歌へ

中務卿親王

な波うすも限りよつてはくはよりけりふ

ルも二年万々に遇不違立を

うけかくするわのうねわすアヒ一よづ

入よれとけよ、おおきに

人ののあまうこよ御波すらわのうゑの恨じる

お島を

御賀門に堀川

うみへとすゆく

あひのひをとふ

寄ふゑこゑを

ちか門に小室相

お蟬を

入道前を改へた

鳴くは洞の多も山すくえをうつて三日やうひは  
寛治二年百三十日おちを

麻たたた

かねづくさす一里、お蟬のせてもよめぬ人等を

せとうづくはいりうけ

業平納た

吹風にこうのこくらむうちあうのまくらまく

お蟬

小路小町

ほり野よおきけはるのすみよみ草とば

麻たたたせ

相坂の用のあうれいおれまくしてゆうよまくし

お子内親

まくこまくとまくとまくまく

文永のことを

後頼幼丸

アレも思ひうるまい文永アリヘア立アリスル

立すよ 小は

思ひやまう三のアリヨリの上にじよテ、廻今

久喜寺ニモ寺ト 变更清納納

かく計思ふハシトリカミトイシくよとすも廻アリ

中勢郷親王家十三寺ニモ

源内清

陸奥にあアリ川の埋立のいにやアヤテテアキモ

近ノリナシ 庚人アリモ

ちうろくよわをこり、あね鳴のよよきこく、

一のんがわくはけくはねよねのうみよくとも  
とすく書けり 仔煥

田門をくみあそししむけれた波のくわいにす監

ねよののつれを立ち

平氣感

アリセトアマニ所によかつてゐる余下ハ寺ニモ

延祐六年乙酉二月朔ノ日

前左大丸

年アリ修造レシ、是のまゝアリ立の余下ナリ

立の立中よ

薦壁門にせぬ

うれしきのまゝのいのちとすと幸よかとやふ  
遇不意のことを たば中の御  
あまえ思ひてもいはきいけをうやいのちふ

平改村納木

わが立としを今よくぞぞうめうともとす

乞内奉も入道前持改家立十三号と宣う

ら立

ひにほね家

まも又作やうそ様ぢいやこ人をあすみる

立の立よ

度三行船

かうてあまきよひれを死な候じゆくよき

中務卿親王

みえり思せにうごくのへし

延保四年百三十 先内奉も入道前持改たゞ

アラシ立とすやまととての思ひぬとすと  
中務マ親と家立に

小皆

いとも思ひとておこすに立とわよと

取へん

前内人太基

せよといひ立とよし立とアラシとわよと

坂上是則

年々の限ゆたむせやとひ年へくわく思ふましに  
士官引けり 中納言家林  
思ひよそみやと申く事あるをうらやまし

わいと初色

續古今和詩集卷第十五

慈平又

思意のこそ

用の前左大臣

よりうへ我とこすよと下経よしす草紙はなづみけ

丈百番うるす

惟内親王

うめやし人のつはすくはよじうす草紙はなづみけ

之後朝天ううはけも百番うるす

中納言為氏

うめうけよ爲ひあわれてとすくわくのつまむ

慈鎮大佐によくとけも百番うるす考査を

前中納言家

春の下の事はゆううえやも思ふのによし月の況え  
史に元年三月五日撫すとよ遇不違立

後京極持久前を改名

寺へうちわよわうこうててむのと月を経一  
史も三年九月十三日十三日令は寄月限  
立

秋だれあゆか

恨くともうてもなりをうめみよの月ひつまき

立一ノ子

春ゑ孝標納た女

あれ又いつれのせふうくまめりう有物の月を

小一条

かれくよるやくをぬけはやよかく

一られけは・堀川女郎

立よけは年忍がうと思ひくよりもやのぬけはよ

立す中よ・式子内祝

毛をゆ一子とくらうと古の年うをよび號

安志門院ちふ

立すにいきくうへうわゆほくうくうす

赤人納言忠良

さてもむかひけはせ小わてれ皆の世話つけは

家ナミテ吉よ 中務卿祝

今又けりよすとおもへのうみやつハ洞やちを立

寛治二年百三十六日寄庵立

安永隆祐納太

や人をもときつね庵にとのうよう、神よそすむは

寄庵立

寛永信實納太

あよやくとひそけ我様らむけい中のをうわ

寄庵立

寛元信納

の浦のほねにむかつとすじしめ人を因縁立

寄庵立

古門院小室相

よひくひつきとまゆくこそ枕うそぞいにまく

寄庵立

平改村納太

圓ううりのうそにわやうりで我多すと今後もあわせ

小町

もつれてこもれ一すりまの圓うりをひようそり

延喜家隆家もく遇不違立をよみゆき

ほ三佐春立

あひみくとほくれの思こふをいそとせしのを

寄庵立

醜陋入道前立改太

うそううるふらくとほくの立をよみ

六脂立

衣笠前ゆく

伊豆乃海のあまゆきよよこすとお印帳三一年をあ  
ルも元年百三十日遇不違也

志高ゆみゆの小ゆうとアツムハ通じてわたり  
歌一ノ子 よし人一ノ子

さよみさあよむよむわよみてかと懐すと他に思ひ

小町

人やつあらあまよれはううととのまひ等げくち  
小一束無端につづりけり

實方納末

あやめよそよそすすりとトクニを音と四つて母  
一束すて一 先有事ち入道前持取左下  
片かが下さのひよりれれ氣かえびてかね袖乃處  
寄鏡毛筆こづくと

ほほり家

あせよよひ音やまむ鏡うきかけりう行のとす

緋色

情すすしてゆるよくと種とわ我努力今す

歌一ノ子

前中内言ふ乞

さよみさあよむよむわよみてかと懐すと他に思ひ

ありは即

うふとあらわすゆでくよひやかふらひ  
うふ情り人の方のうちをうめだすとやうす  
色紙など

もあこがちはくたまをやし枝やねつまもあ  
立うわづよはけも中に

入道赤多良太夫

うきうきせきし中ひだてたまうつあよごれ  
タ兵のたと

うきせきにまてせせじ被うと同いもア板もたま

歌  
行舟

うきとをもきくとてよきだいもとのこみそ

清浦幼良

うきとをもきくとてよきだいもとのこみそ

賀茂祐子令  
左手中持弓削

一弓にいとうとま三とてよきとをもきくとてよ

立のす中に  
信中内言通後

情あいへんうへ思ひゆくとてよきもきくとてよ

五三佐和家

思ひへ思ひゆくとてよきもきくとてよ

高松院在奉行

遣へて乃ちもへ令下候事に思へてあらえけど

ちち門をあらう

まつりとおのきゆくやふと思ひ印圓ます

百萬あすね中々 順位にけり

思ひ出くふのこ空きの三木川アシヨシモ

寄木立

修明門に人貳

逢へてよてよのよれ火難御神事より受けた

火也ニ幸安内りく十日す傳へか

勤院年四は

兵卒すよなばよさくわざるお寺被ひ事し

一

移居せぬゆ

失わくよしよしよしよしものわざりしきをかどり

中務卿親王家百萬す中に

ちか門に小室相

いそみわづてアミナノ奥の名を清火ひけといたる

スナミテナキよ候事

大上天皇

アソコセレムシのうちれどもと氣に中付の火

喜川立 まつと 中務ア親王

幸運にあつた事の上りのいよいよ思ひえを

此處を家

あつて思ひやうけのいよいよ思ひえを

寄草を

中村ア親

兵部草をあわせに上りあわせのひまを

辰巳

もあつてもあつて印古でのわく草の名をもつて

歌

素還は師

宮本草をあわせに上りあわせのひまを

二条入道左介

あえず思ひてとこあらうやうの情をも

右兵衛侍有教

かうかくこうくはくはく年月をいたむけう令下すと

皇太子と史後成

あえず思ひてとこあらうやうの情をも

兵部草を

平政村幼大

あえず思ひてとこあらうやうの情をも

其式ア

かよいつかる力つかずと思ひて思ひて思ひて

恨無のを

或乾門に片廻

手すけうきと今のつゝこゑてうるさいかにゆうてゆふ

枝忘喜を

麻左美あ告教室

手すくわづかよし

喜可比拂客

うれりは思れどけとも只刻やつぬやおもひいじ

中納言

ちひりへやもつてくらむうう我の心方をす

本山は枝

きほりしこ思ひよしゆまゆうづくをすけう

後京極源家百三

小林枝

何よとすきくとくちやせうつよとくすけう

笠よ鄰のすとくわくうりつけぬよとみま

さとのとくねけうづくはうてにうづにつく

一けく

讀人未矣

折くにくこみてうかよのいた思ひゆうかゆうし

一けく

其よ

えつれの歳事にゆうづくのいづまむとくじゆ

御一介す

あ行は師

要をうご思つてやうかうかして人のよきを

立ちゆ中よ 俊馬原にゆ

旅館よりまひくよのとすかくとくとてみゆ

中務へ祝

田子の限一はのあく向マツ代くよすうじうへそ  
立すきくとくとくはからくゆわのねりのくよすう

承暦二年四月廿日裏う合す

京中納言近舟

思ひよひ合づ事のつとトヤハリの立す

承一

は橋殿昭

あらまきやこひくわく突モテフシトモ

前人納吉隆房

人終す立すうゆよくわよけくまつの様をスマアヒ

立す中

中務マ親と家倫前

金多くもよしよの又一祐アリシ

因に持取家百三十遇不違立

信實(納丸)

あらまきやこひくわよけくまつの様をスマアヒ

支那高島ゆ小は

あきよよのとをひといつをあふてみひもアモセー

文永二年九月十三日すちよ後赤

前大納言資季

有明よ別れゆのうへてほまくのるわいづらト

日吉祐志立そむく

前大納言隆原

よもよや面影のかくやこすにあつてこそよ

延暦院内侍

面影かくやこすにあつてこそよ

六脂院内侍

前大納言高家

よしよすすく方浦よぞくわゆどよそん

よしよす

續古今和詩集卷第十六

哀傷平

久在百丈寺ノ内

素波泥御子

かきアリ雨あらけのアラシテ氣をもせじとま  
万葉集乃木一木けりにあくよ淡け

源順

せ中をすりぬて風吹ゆあとせ事な雪

歌ノ題

唐玉孝標朝天女

竹しをやまほくとそをうのぼくようもなやわ

建皇子ノくれ今櫛谷よりこちはけりをる

けりかくよりとむへけり

春明天皇御子

いづき乃る外山雪下すとまくしてへ行つ歌

天祐天皇がくれゆくのりよまとねけり

倭左后

人づ思ひアリセモかくノミキトソアリモナズ

延喜元年二月又度たるのとを歌祭てよ里

せれけり

延喜御寺

春やみみよと教義を筆寫のやありえま

式部卿敷慶ひそかにうりて右房門寺三宿  
うすひてはけぬ事す

三条をへた

春ともも翁とも嘆息一スわざとふ人のせうよ  
延喜八年九月をと府入侍曹司ト出立と行  
けり付女郎更衣えふらあはければうのけ  
私のちやうて書付はけ

姓女郎

故凡とあるよそのアリてあらむりくらを弊し  
伊豫園のアリトムくじりけり

中納言朝也

夏つとすわづといゆるやまことよみれアヌアミシ

四

參議右古

矣こも思ひうつねうの生す。彦子を聞ふとあれく  
お人持定國力ゆづく後かの家のゆづく  
さうぢうけとぞくよとけ

絶貫

思ひうじうのあらうのむすびし神のゆゑ  
女郎はよがれすの者もとぞく

清慎

すこしはねうやうと徳化をより外れかたとくと  
天曆の門のと事といふとけみてアゆひ  
ちあむけれいことうく

宣撫殿女郎

とれてとけあとてのとくにとを何歌とそ  
一冬庵乃よまのう上ま門に松杞とのいわ  
けう日後はう 美式都

あきよをよみく 用ふてゆ 蓮宿うすく  
皇后宮の後はうのよ雪のうとほゑへ

國内三日

誰ともさきのとあくとあくとあくとあくと  
男のよけよけよけよけよけよけよけよけよけ

太皇后宮主文隆因

のううう歌くとこねんもと今えいとおとおとおと  
女の歌いよけよけよけよけよけよけよけよけ

擅人内言行成

都りくみつとくとおもひすとすとすとすと  
贈皇后宮がくれあおきはよのよみを即乞

坂井院脚

梓うるのうへひもじこうとく人のうみをす

後鳥羽院かぐれゆきの文

順信院行

の下りゆき考の處をとすてすしもあまえりも  
人ふるふこ先ちりよ用けれ  
いる月のちうの下りよすじよおを毛  
考の下りよまに因りともと見ひのしきよ  
坂けたとれせ後もむらこわよつ

リけり

中宮上院

有一の事ふゆに吉郷山よりしておきとうは  
花よゆよけよひに遍照山うやくも  
こうのちりけりとみ

漢守鶴峯

わすくすくひのとくの鶴尾わく昔の事やす  
九条左大臣とてこの年考家のとて  
のちりけりとく 心海上人

やせうあくともよもよのすくにじくことく  
建保百三  
光明寺もと左近院持久左末

社をうそとまのむね持よもよのをひだをすと  
後京極持久のことを思ひよかの遠忌の日を

事も入通持久 千代乃とよじりけり

前中内言文字家

をくれどもすへ一月日をもるつてすりれどもすとす  
正月をもとす麻疹の食  
正月をもとす月旦をつてと仕面氣の立つともせ也  
切腹持取のとくとくいとよとけり

麻右人忠

アヌキ山の考を思ひ立つてものうちえうるすよ  
人の多く脚とけらぬとく暮とてゆにこしを

ト先づ  
通令は師

朝らかくとおきつはりごしての下落と人アモト  
ト先づおけりよみはけ  
通

堀川

タニエラミテムシテトウガテスモキナカニセ  
トモシテシテの由ルクレの鷹をきて

梅金女郎

あらまくとく有つて方とと思ひりとくちやなを出  
前中納言ゆき家方ゆうて後方三年の佛  
事さの家とくとくはけりつりけり

入道前中家

よきの娘のことをある日あとてアーヤ人の神をも

前人納言考家

今日雨のち晴れをきいて、いつる代に三年のあらわくまつ  
ちの鳴ききて、雅虎親

つよぢの草の中なるきうとすいに氣の力とやうり  
まつし

殿富門代人捕

晴れとあとのあひをとむ、つまのへ草とまやくと  
丸つてぬきよみけり

た邊中野御

そとよみて首のひだれゆく跡のを簾の娘にうやく  
のこつとくとく、前人納言考

あらかずねあのかせうる人さにほりうすみやう引く  
月をすくよえろ 結賀門代堀河

ちづくと月よのこゆうとすとすとすとせめて  
すまや十三年又前人納言考家一ふ經音  
て人にうちうけけるにゆえは板懐旧こりす  
を

前人納言考

しりやうじゆめしゆれれて、因よのこは娘のよの月

家隆卿の十三年又隆吉納戻すうけり

三

平時直

きくとれうかの浦でもいつかお浦までりぞ

皇后宮人支後成宣家母也里人之少子

は橋殿原

かくことかくこめりとて回引にまじ我の身死よけらる

夷國門地かく北洋と後鳥羽の即てよむるは  
けりは原人納言威風のまことづきぞ

徐子望先生  
皇太子文人史後成

てくわからぬやうに此の状況を  
あらわすには、この言葉が最も  
適切である。

通鑑

卷之二

ゆきく今うみの煙うれやうともいひ事ふえよ清い  
式乾門也かくれどそのはく付まくよす事

卷之三

のうとめ旅のあくとめけねれいゆくまの行

親の恩はよきもとへ 惟宗忠京

まくをいふよりは、又ほんねは、正極のまく。

宣陽門にかく代詠よけの年の歌の書中み

風雨送你去  
風雨送你來

夏夜うぐいすの声一洞くうねの別れよ

高野にまきうけうけあゆとアモウアモ  
袖とよからむちうとけれとえ

源仲業

洞のうるご里の墨うとの袖ひぐもやうふのくふ  
母の房ぬうけくねのくれのうアモウ

源兼氏綱夫

りぬと余わくとくのうえと人のうれはるま  
いすくの房ぬうけくの竹に花くじふ  
一さくよみえ

通今は師

ちうまくよじねこてもきこせりをうかの花

弘一

高年二人

片手をうねまづうともあうとへ行ふよみて氣をうけ

ありは師

泣きてこゆくとわく野の草がとしすまつら

院人坊と典小

おけんよほのうめくやせうやいえかじと  
七条院松と丈

世中よそをわざといひよとすきをすくはだつてのう  
せの中らふくきをけは

義京高光

世ノ中いかくこすとあれ行くとこ思へりうらやま

母のふとひよけはるももえいわきの

許よつりけ、たとへる通雅

ちよきうそくよき事の力をよそ人の氣と神也レタ  
かわゆが人よそしとて駆けとゆか力及

わく後ゆる事とも門わづりけはけ代は

さう

母も「心大東

衰ようかのゆつ来とねぬけとき、おののくらまと  
こよなはる女の坂力ゆづりけ、秋二月の  
よしのつけ日度はけ

赤用白た太也

アラギー坂玉木山一毛洞、秋二月、ふ  
右へる通雅母力ゆづりくのは雪の下け、日  
よみはけ、入通前右へた

いたえうてと皆の「やうとがみてつじけの白雪  
卯月にとくわくくらの山底。トモウカ  
体のものほじりけ」

太上天皇

やくやうとこゆうてみもゆく爲ひまやまく春  
桜中幼言ら宗アヨヒのまに、さ方ゆうけ

社、後はけり

前、左人也

又トテニ奉の引をふけとし、とそかといのをもせう  
印は前左人也のトヨヌキツアリけり

前、用ひ左人也

立ツアリ、此をこそセテ、トアタマアシノ見しよ又むけくト

也

前、左人也

今コソモロニ、此をこそセテ、ヤヒテ、寺とねカと欲ぶ  
スマの服をもけり、以母又カ、ゆカ、よけ我をよ  
ヘム。

は下實(伊)

ねまわらしおみけたる文、又、よりえやう神のなまくよ

今中には、結宣納戸力ぬ、つゝ、写九日之内よ  
浦観(アラシ)、今、おつづく、けり、形えり、くと  
奥に書けは、今、大江(ヨシ)、御納戸

ゑくよ思ひ、うつ、代墨(モ)の被(ハ)、あけよ、代(モ)、周(モ)  
後堀川(ハ)、かく、代(モ)、付(モ)、との、れて、も、う、て  
年(ハ)、うつアミの、うえ、すよ、みく、この、ド(モ)を代  
後(モ)、つりけり、右(モ)、お、お、皆(モ)墓(モ)

支(モ)、も、うつ、一様(モ)、の、うみよ、き、う墨(モ)の、神  
御(モ)、手(モ)

わ、墨(モ)、高(モ)の、柄(モ)、と、ち、う、う、も、う、と、よ、と、ゆ、う、う、と、れ

よりすましとを身にまく雪のあ  
に慶政上人のことよりりけ

用ひ承たる

かきてじゆせりやまく松とす雪

ぬま取上人

うきやうやまとすては雪のせよもんちゆくは

九条左大臣とのいのいの年ぬき四月日  
あさわる雪やけと右馬門寺忠基詩

中つりけ

麻檜便と通云

のうすいのねひけたとこくわけこの白雪

は下寢寛力ゆうけく後よこなげ

は下寢宗

いふれうとくやいはのせようわ引の記をも

ぬま

は下寢宗

今更よもくうれまくふまよう後も覗やうを

ちむ門をくられて後のむわくの内よみを

けり

は下寢上人

思ひまもまくとく通まよをひ底のふとをだ

人紹く典は方ゆうてのは後けり

前人紹て為家

衰弱し仰臥にしてまくのこる思ひのあはれも

主事詩

清原源菴又

久々わねやれわやえとれもよみやうめ  
堀川市中まかにゆき後同轍にト申そ  
けり  
ニふるる行次

志乃のことをおゆくすむとももとをもとをねふよ

ケル

田舎歌

おじゆくまくまく引ひをつらアレシテ是  
き後朝たすさけく百三十六

前人納言若家

おまちねのまくら後ひまくをまくよむと仰す  
服ぬふけりよ先

源俊軒納来

おまくらえまくらう思ふ。胸をまくすりにふ  
おじゆくけりは都すしもそのあまつて  
おまくらく人のうちよ思ひにとけり

夏原能清納

あせらまくらまくらこ思ふ。うとせらまくらく心地  
なやまぬけりは枕のつとみよ書門寺まくら

一筆虎口唇文

きことよ枕にゆへ寝てくつましをすともり  
多至保昌納たるゆうて後かの八重山家よ  
ゆくはうへぐくとく

能因は師

ノヨリあきらめねれどこれかへ神子也我も  
五園もの庵をえ 入道床を教へた

きよ人のふうめ庵はとく今いよみのまよもそも  
隣ちよ誦経のみの間しなれ

天台院正澄覺

「丁度鏡のそじう衰るれいなめのそりや」と  
一八十より下くあまうてなまもあつてひふ  
「いは思ひくとみゆけ」

信實劫長

じゆのときの、はすこの、も又すと、うそも、かく  
焼の、をよゑう 雅成親王

我の又じゆるまわこうねゆく、焼の鳥のまくし  
和す所よく述憶す今はけよ

參議雅經

かくのまくわく、かのいくうもあく、我方の御は伏れ  
おもむれいやくとおりゆけは女御藏子

女とのかとよにうなれけよ

天曆御三

カクシモトモシタアモキシロホウケモトモシモトモシ  
モトモシ

尊母は親王

リニヨウ若ニヨリシテモトモシルノヘキモチノカタ  
辛重け方ぬつゝ後件事の折レモ又モ  
あつけアキモハツカヒメリテモシ

中務マ親王

思ひ出アリシテシモのよくせたニヨリの事モアラ

スマカニヨリアリトモシ

赤大納言基良

モトモシモトモシタアモシタモトモシタモトモシ

モトモシ

五三院和家

リヨウ行道のカツルのモアモトモシモシモシモシ  
參議摩カニヨリケレニヨリモモモモモモモモ  
欲モテ後件ける。前左無事皆准方  
ヨリヨリモモモモモモモモモモモモモモモモ  
ヨリヨリモモモモモモモモモモモモモモモモ

貢

ラモ代大いげりうて有ゆをも多カのニヨリモモモ

月のや島井上人の筆にゆうて多んも  
うめのとすとすとすとすとすとすとす  
すとすとすとすとすとすとすとすとす  
すとすとすとすとすとすとすとすとす  
すとすとすとすとすとすとすとすとす

やうとすとすとすとすとすとすとす

慶政上人

あくとあくじとすとすのねの骨をさうとす

と

西行は師

こくよくとせうへとせよとせよとせよ

をとをとと

續古今和詩集卷第十七

難奇上

文永二年七月七日白け

七百三十人とじよととほ一とよし年中三考

ミソシヒト

太上天皇

初音といふと音をいふと音をいふと音の宮

印ノ空

入道扇を取人夫

雪をうそとひまうそとひまうそとひまうそ

万首うそとひまうそとひまうそとひまうそ

五三佐和家

一  
よごれぬありゆうわくもゆつて年の初見

述懐百々三う波けの付

是を后文を更後成

春日野のねづるみのすよよりあてこむくは

嘉をよめら

人磨

春向のえくもよみてまき翁もれぬいとこゆく

ほを遍照

是のよへ今やとく嘉をよづくとく

羽に持々家百々と露を

前中興言家

ちすうとすりすりよい風の氣はまをえ

前參議忠定

りくくこゆしもよきくふじよさうすや旨す

お門にかう

産すとやの種はゆひくにうわくわくわくは

人秋官(万々かうくゆくゆくれけの付

後鳥外にかう

あそびとくとくとくとくとくとくとくとくとく

序柳を

花園左大木

皆々くわよのあとみやくト所よもすらすま柳の系

春雨のことを 亦か所を參良

もみのあさゆきみのやくともおじやくやうかく神下  
歌へす 赤けんに基

草木本とゆよわいりう春雨トよれもかく神ハ洞やすをア  
桃杞厥のしきの花こよりやうけとみくよみ  
はけり 民アマも家

むのうえりよゆのうくもひアリのうもやもし  
皆子はけり所のじうとけまようへきけふ

をみくおへふう

馬ゆ

名々くゆれきとめを梅のむねうちれのくわせ

歌へす

左兵衛者高官

神かれはれいそくし梅のむねうちれとくわせ

麻泰議忠官

りくく春のえととくわせよしう月の神よみを

順法院也

故にえこくい先ほの國の生のもの春のわざやの

ちか門也

ゆう原玉あるひなれもよきへうよく春の通院

堀川北ヶ付百元 爰至暮後

世中ハノハノアラシニシテモアリテハナリ

御花ノ事 入通麻を致人

セナヨリトキアリカガタのハノアリテモアリ

三百三十三年 中智卿親

花さねまつりのハナマスニシテモアリハナリ

麻け太夫暮家百三十三年の考

用に家民アマ

ミタヒアゼルのハナマスニシテモアリハナリ

花中 中智卿親

ちよこ子ノアリテハナマスニシテモアリハナリ

麻大納言暮家

花さねまつりの考のハナマスニシテモアリハナリ

延暦二年二月南風のハナマスニシテモアリ

花さねまつりの考のハナマスニシテモアリハナリ

ウゼヤハナマスニシテモアリハナリ

參議雅行

矣や、もつ仰伏よりアリハナマスニシテモアリ

ルモ元年百三十日モ

麻大納言暮家

サツのハナマスニシテモアリハナリ

文永元年春物の花のひくすは山内

や上天皇

かくとあたう匂被か外代の昔の花の香瓦

兵部ア隆親

あけみのあらわ花瓦をもよえう

近ノ所

後鳥羽院

おれゆうせん瓦をみのる山の花あそちに

中務ア親王家百草中

友京寺後納毛

うせもすくすく思ひもすく風を吹

殷富門

大納ニ稀祐に

はけよ

棟中ゆきも

ふくへやの香の思ひてよしの花、ア花ト

草巻の麻るむの匂もす

貞慶上人

あくつれ香のくを今ようやくよもぎもす

多魚信實納毛口吉祐もくう名(はけよ)

山花

祝部處賢

桜を咲すゆに白さのうすある匂もす

文集三百花唐如雪及鬢ま似系ごゑと

按寢皮隆倒

みくすじうのまつも受けたるものとてよし  
性行へはけむけ花のとをよアすとてよしは  
けり

ありは師

カヌクテモ余花もあくれ今いくい春よおさ  
先後花をえよも、前律師を遥

たるの今ううてやゆトをい考うやくおやうをれ  
たのすて「もうち」 檀林師に覓

西勢うじねおぞもむうううとくもとのづみめ  
麻人學年平

じうするようア、ものるい皆の東印くつこく  
歌くは  
ほ現

かわすよそし、じうをぬいもんくしま御社るるれ  
カ為よすよわえ春のせじこと見る軒を尾  
原中納言隆家雪林院の花みよ風うてかじ  
うけくえをせせくみどるにうりあをれ

小野宮右衛末

折角のゆふと今もくねかよ考ううつるもひや、

たう中よ

ありは師

かくしたのとくく考うすま二月のう月のこう

夕花を

亥承行も納毛

すともほあねのわやさにゆへゆきもゆひまふ

尚嵩會をくすいはけの付

藤原清浦納毛

ちばたは後の春とてゆれりうそもくあくよやつう

支百萬す今又 亦中納言家

梯花うりうるまをあくとくかえやうせん葉

春す中

亥承行也納毛

山陰のやうとの萬すくもといひをあまよ花のす毛

百毛う後は今又 平政社納毛

梯花ちどりをなす一思ふかいくてみゆくや今す

秋すよ 父承櫻京

こけうちもすくいとよれりし傷こつりとすくもおぬ

平時序

人れわゆくれのこくにいたいゆにちもまやへ毛

平内廣

みうとすへこの傷よ思ひやすやものちも見

ちく門だ小室相

うすれぬ我力もつゝ梯花うりうるまう

ちく門だちう

トアヒトアヘキツコ考のリのトモモリニアホ代

百三三十九時 皇后まつ師徒

タリウムリトヨリトヨアヌサヌトヨシ考マリヒ

暮考のニ

五三後家

セを捨て後スニキトヨシニア告三代也ハセキモセ  
この考の列アツコアコ内カのひいてスル小余アスル

走ほ百三三

に二往家塗

セニセのワニカのたのミテアシハタリムト考ト

支のリアリ

源重

タリタリムのタニヤヒトナウタリタリタリタリ

ヤモリタリト官の鳴を取てスルムハナ

小野町

ヤモリタリムに付キテワタリタリタリ官の多

東ラモ

はテ度覺

リトヨウ鳴リトヨウリタリタリタリタリの奥モリ

源俊於納丸

キモヒハシヘリリタリタリタリタリタリ之枝モリカ

素還は師

トモ房にづきうるの郭ラ後よゆくまく物名きほ

中務卿親王家百三三

文系墨段

明與秋之使もゆきてやうとくもぬよゆる郭うト

後はせち入通前用白右太の内百モテ

射鳥

アマ類捕

松門をくとーときりはるえのむすまある

歌一ノ子

近身を后官大捕

今してのをあらわすいする有ゆすしと

雅故親

いさみ消くつてりとおとせよやねりは

百三三の申

前大納言家

古事記いにせ

守玉あるりとく称社す北

支革を後ほり 静には親

夏うちやあやまとく水鳥のよしゆじえもすと

八月とよたと は下尊海

あけの入江乃ち川流みてよしもく青面

支凡とあしと は下寂信

かじの川柏のみとよも内に生くす内のちる

凌々とこゑと 幸田親

タミのちくとよねまにのわゆる葉うづれの原

歌一ノ子

本多門左右馬元

人れす秋こすあられす蟬のあはきとれり思ひを

六月板のことを ちかにあらう

みすすすも彼よやく人をのぞへわくじゆ

ひづか 忠義ら

えどん焼のゆの戸ハ明の後ア清アうけ

中務卿親王家百三十三姫

前左兵衛告教字

うすにありアリ我地の先の洞と故い是より  
寛治二年正月三日早春

夏至後卯未

主

けりぬ力ともり故くれづはくもあけよほ

娘す中に

藤原冬翁

此ごとのゆきの處にあづれぬをよしと故の初見

冬至度も隆覚

凡りうきつねやり故くれづれの夕くれども

光明寺ちへ道旅持取たる

ほと鳴ややかねゑみとくといづきを故にうぐ

百三十三姫内海院を

前印久良喜

ねけぬ入海きくとくとけの棲吹こす姫の塩泉

詠

宇治入道原用白石取人

紫色引ひては秋こちのとむとわの天の河を  
桔梗數より多くありこのやれのを

愛慕義を

うりと秋くじき七夕のけときつゝやすと見  
又すすりとかけよ

ほにほに家隆

娘のわこの秋ねうすすりとアキアキアキアキアキ

拉入納まら實

えまびらりへきる娘秋よ花のさざれをとおせ

同九月用白石人たのれ十丈三のさくとよ  
トとほげよゑとふごんと

おほに家

七月のてくろくの牧草にとすいあまうとげかふ  
け玉だりく淡けよ

恵をほ仰

草一けとてくわの牛とせんとあめのとくみ

娘すゆよ

源道源

りりくわうじ娘とくみとをてかやうすとく

おほに家隆観

故をくふりあうの歎あて涙うれのよへけ

本院のすみ中よ 源兼康幼女

やうけまつぱりのうのとくさうるの歎の福充

三言三事中に さよ天皇

黒みすらつれどこしとくわつともゆいのえを題

日吉よむやけまうちよ

ご三郎の家

夕すよりあうとゆうね小秋ゑみうと後の故め文瓦  
やまとこの花るにけくつうけく

栗田園の贈お取入

胡づの向くま、花のあよむとえもつるせよせよ

源兼翁幼女

人のせつあつたよそとすらむちも詠ひけらのむ

百事中よ 順はんむか

今すれ見るよすよすよみのとくは故の文書

故父と 中智ア親

哀うる故の文書いふかとては達者(主)

林のす中に 横久納言家

林のゆく所いわけれどむかくのあくみ丈言

友五康林幼女

トニシカニ雪のうのうの月ニヒトモトタタタタタタタタタタ

藻壁門にナラ

卓乃キのあとや房アハタヒテヒのミヤカタのタモ

百事中

順位ル

タリナシの日ノ板のいくとむのとアケラウ日ノ

シタ

後を取ル

ナリナリノヨリヤシモタタキノタタキノタタキ

五三屋家

いはゆる奴のタタキタタキタタキタタキ

月子

平義教

月子と月子と月子と月子と月子と月子と月子

辰巳

忠兼

ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

檀中内言も雅

豪毛も神モアタマタタカタカタカタカタカタカタ

枝二佐成實

幾度アヌヨリノ月ノ数アタカタカタカタカタカタ

平時成

カノアタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

カイ

雅歌観

いはくかはくとえ故の月圓のとくよよよよよよ  
旅宿にそぞろを後ひけり

承人納言也言

むらのやうのとがまことゆうの頃のとめ月  
とすつ月をか焼く

東三室化

いはくや早うの月けよもとくる他のおけり  
月十日寫ときぬけり

天鷦<sup>ササ</sup>

月とよみ月とてあの月とての月とて月とて

立<sup>タチ</sup>ます 承人納言也言

いはく立れやまとの故の月、いはくよのうを思ひしと

中に 入道<sup>スル</sup>也改人夫

さくともやせあをやみづく月を徳よアテて  
後も月にあにかりゆける所<sup>シ</sup>いのア  
モヤアヒて大日東の山ゆういてけるをな

う先かきうれけま

東にほれど

まくらのねゆうの月のはやうめ出でアモルカモムアト

ミタニモ、順便に叶三

やうよの雪の月の月マモカシモヤツモ物のと

右吉麻告墓氏

じいのよりゆくよきえのこすまに方乃ナガ

サムテム月と

中野マ村

もとあ神、月の新ヌ一圓アダハシモトノヨシ  
ルも元年百三十六

エホ信実納木

くわ然、是モ萬葉版の月ト家ノ乃ナシ、  
百三十六年

順便に叶三

旁もれ、あすよくも鶴をいのそひ等一毫

故ナ中ノ

能固は師

夏の日、氣すすやか風のうずがねうじよ

を後、落葉をそく

入道麻衣良人

ようてみ代、潤アヤシムアモヒキモテのま

故ナと

エホ信実納木

木の葉、うれのうれ、うれ、潤アヤシム

源親り

萬葉集傳と申ゆる事もさういふ事ある程で

佐中國湯川にソムリ

佐都玄賓

山中月夜の如きに於て是れは良しとす  
月のつゝよりの山に夜にうちへれども  
多きなまえと お邊人將通はゆ

袖無れぬをよこす 月のやうもかく  
神主月の山へゆむよちむけよゆる  
かけり日暮の山とよすとくつむ

麻生大丸

千代ノミシハサカヒトケハ都の人々には

山

天皇

山中うそとしの里の初雪あらわのまゝよぢま

立木大子

平素時幼丸

山乃もアラシシトテ下のまゝよぢま

はく覚寛

真木の山の美樹々トヤウツレ神よこの木、國に言葉

源真氏納丸

あらこの木もよぢまア山野も思ひまゝやう廣り

山路あると 中野ア祝

うまくも神多きアセのまちやかの壁

きそく  
衣笠麻印太

秋育月へくれりうそやうやせと我力のよそにしに是ひと  
かう月はあら雪いもれすをとし我をもや我をも

三三寺遠かに夕附ふと

夜至花毛望夫

凡そく夕のいのじくもに思ひあすやうけふる

中務マ親ミ家万三そよみ

前左吉馬告教字

いぬ摩々洞へきて秋育月わゆやうむちめ柏木

平政村納太

一ノ行けりあひて秋の夜月よりひづる玉山也

三三院家隆

かくづすすくすよ年やうてカニキテうれ育月ト

百三十九の中よ 順祐鹿ちう

いづかやひとの黒志くまをとすくつて西村え

延保二年八月よ 僧を行意

こよすくよ野のふくと鳥ふく雪やうじゆるふる

歌一序子 你辰興字

川越ゆ更に走るやうにあらうとすの初雪

冬中

藤原信納

降りて幾日かの雪の間の事

平親清

凡てあまきる雪をぬりやがれ月の氣うき

五三住家

幼いよそもみゆすみじつひの思ひ移らゆ

萬雪と云ふと 西園ち入道前を取人

の母は雪とやうすとありくわまきとす有月も月

きの寺 中官榜ノ内書

ゆの雪からぞ引れてうりおめしゆ

け下寢寛ううかけをすものう襷掛け

中に

皇太后主と夫後成士

にさとすゆくとせをあしりア我カよりう年うき

景吾の子 信忠は師

毛無也とす年うき小首もす年う月日を代

人内言通具

ひまく月日は雪とあしア我カもす年うの言ふ

藤原信實初見

年うひくとす又言ふとまくの

ものね

續古今和詩集卷第十八

雜詩中

神龜元年十月紀伊國引幸の所より

山邊赤人

力乃浦より水を流すとてもいづる  
越中すとてあけの付波はけ

十納吉家林

漆風こしくやあきの江にぬりしもくは

歌

讀人

みづくに雪いふとくらと淡泊の鳴よみづく

五百三十字の中よ 後鳥作也

かの鶴ねゑよりよみづくと有明の月よお門う鳴けむ  
寛弘二年百三十日 鳴彦

今上天皇

さくわまくらの一曲あらずすもみじうのうち序

辰二位成實

文彦のひれゆくと皆すてやぬれれよそのどうき

百三十の中に 前右人夫也

くそつこのへ江の川のあらわく文子もあらわく松門也

歌一首

小野小町

す爲乃あよみへ博多のうきよとくらをもとめ

人九

こよ更と堀江ふくたるまつりあらもとしもとや  
ひとごとくわく七百もえんとよつまつとほーつ  
かくに轟中船と お上天皇

神のうやすばじゆくと立つて、一風よよくよよく  
洞門橋の家方まうすよ眺望

亥年、憧憬切

限わればうちぬと浦の波よりんこきゆくわよみぬ

歌一

平春月幼女

世をうきよのぶゑの門をすきとくわよみぬ

因勇法師

芦がり入江のうねはすけむよつて世を海うト

中務マ親モ

立つてよくうやうやのひづりしけよし居や

月照庵火こづく

後京極橋の前象木

よ人のえすくし白妙の月ふうとくわきの庵

布引庵と

冬至拂観

水上ひうこすくし白妙の月ふうとくわきの庵

仰庵子ゆうてどもはけ

源俊頼納夫

山娘のまほ情に引けてうきよのや庵の／＼流  
えま方あすかよ 大聲と有家  
匂吹いわま乃じゆアのわれまくそくはつ破正年りは  
中勢ア親ニ家百もすの中よ

鳴りを肺

明るる流のもよアトナス浦よりぞらぬすの内凡  
八情三千もする浦煙を

秀宗信實納夫

黒雲を極アシテムサテ煙よし萬中は／＼流

歌ノ音と

柳草人丸

今とハ鳴トアズニに海モアス翁アテ流よたてうわ

式アマ宇合

寢の寝よみにアシテアのまくす流の／＼けてう思  
百もちうの中よ野と

ちか門だむす

いはき野やよ希とくよくとふたよゆくねの日立

二万さうゆ中よ 中勢ア親ニ

すもといはれやくよゆくよ小ねうれみつる白浪

佐吉の社にまくさけろ人ゆうぢゆてしもす  
すもけらぬ

清サ納言

行ゆくとけりあゆまこ馬車どうひきのゆくとてす  
無野にゆくとけりゆえ佐吉とく浦の  
ねを

や上天皇

みに降とまつらうに成る今うすき佐吉のね  
車よむよむせとくとくとくとくとくとくとくとく  
けりとくとくとくとれとれとれとれとれとれとれと  
れとれとれとれとれとれとれとれとれとれとれと

走あむ

あさわう野の川の水とアリとアリの中をゆくと  
月だめとひよかりゆくとゆくとゆくとゆくと  
ソレと歌わく後はけり

春深伊御

江よやく年へよけちねあれごとあれごとあれごと

坂上毛則

戸川の入はね先をとらましゆふとマニは

歌

中勢

か川をすみゆからうのからねをせせ(ま)

轟の内ゆく夜は一の中

天皇

我やし乃あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

三百三十の中よ鷦

有切ひえよやれりいすの鷦よ月うのとれふ

後法性もへ遁前用の家百三十

後法大ちた久を

もゆくすし月歌を切めとマサの凌よおよりや

お載集よ素寔は師の賓ちとアモキム

アモキムアモキムアモキムアモキムアモキム

けり

ま後法師

月歌のあきよのゆかよよよよよよよよよよよよよよ  
勤むいます即ちくろの阿都鳥のぬけをひ  
くろくよすよしよせよせよせよせよせよせよ

サねゆ

吹風もとけきむの都鳥ヰゆみちせのくよよよよ

源氏ゆううとのすまのまくまでちうけき

フスニ死けり

月花門だ

濱よ鳥わくとみよと袖立てじつよつよするの匂流

ぬ

醜駒へ遁前を改入未女

今まよすよすようちのまよ草がようきよよび

五ノ子

五ノ子

うきよすこ儀よわきよあつとく門代の鳴のわきよ  
熊野よぬくくはくくるや賓めく後かさ  
けく

前中納言資實

りくの主門してもすと我力さへ行くをせよしすり毛毛

本懐すの中よ 反二佐家隆

金やうくこくくくしれあくゆくのをすくよ  
延保四年人くよ百三三すくけくじゆくよ  
トよぬけく

後鳥羽院

そく門くよ多きよくよくわくもくち衣原マミキは

志明寺も入道麻持久た矣

軍の海じくにづく院のくよくぬ御くよくみくよく  
六脂院のうね中よ國と

后天皇

久く乃わ先よすらうす玉鉢の遁わく國う今のかく

明治持久家の万

入道院を表人

世を四月月のえくくいよくわくじゆくくくいを

日本紀をみて延暦天皇と

用ひ前大丈

くわくとゆうこの鏡をうらうすのやか考のよ月  
五治二年七月うるる水邊月

西園も入道前を歎く末

青羽けせきこまく水よりをこちて人のことを月よりうふ

歌くとも 夏至為繼朝末

報のまや入江の底に神をきてお門から新月月よりれて

中務ア観世家百三三

麻ゆえ大基

六十のまよみにけりとる何にてのこの月月よりあし

月うの年う 中務ア観世家右馬内侍

何にてにそとうく有内の月よりとせやえよしとし

夏至信實ノ納末

カムシの見いをうりうりとせらひや月を下  
せとのつれていいしおこすりくはげづ月を

桜中納言義懐

人見のじつうくみ月新を都よりてうそとす

歌くとも 按家系後隆例

かづの身のつれぬれや氣入をすくう道をうちとや

文右衛門うるる 前人納言忠良

うらうくとゆうじちあくづけとあらやうとむうけ

妹のはる里又はうく彦介

東三條入道前用白文

も爲ちゆうせやうねのまゝ人の限うえに行うる  
延喜三年九月十三日十時三十分よし家娘凡

入道前古大王

吹風たゞ、門の外の風が吹ふかず、やうやくのこ里

中勢の觀之

中粉了觀文

寄人道懷子  
憶人納言歌納

まくへりよすしやを家をいてゆいこねりあそ  
山家のことをうる 指人後教宣

かくよの事としのうのうちにおこなひたる事  
右無縫等其事

卷之三

卷之三

山里もアラスの風アリヤナムトヨウモシテモ  
タマシタ  
前人納言為家

あけ門にゆう

すくすしもとへや下門をまわるにゆう

正月二年万歳すよ 亦中納言家

あが乃をくわす家すてこく、神のむちつみ

お下りより通せりよおのおりわや

おひよめくわばく通ふことをきて

後はけ

若御部

すくすしもとへや下門をまわるにゆう

本懐のくを

さやくマハキ人ひとすきにかきやめすよ

後鳥羽にゆう

せ中といづみをす行きの内國のあそき白波

藻壁門にゆう

わす川からあらうと有あそきる三年の邊

源光行

あらいたらみれこあすく沈じくにうせま

今古の見ゆくう後はけよ

正月三日家

すがけやあやうやうをの波アラともちくゆう波

正月三日家

思ひておはなこをもにあつてぬのやうしもくと年の人

麦京え後納替

行田くつ被さらかすには水のまよをくわあ思ひえ

人ほ頼む重

子すくでせよやうけのうよれ伏りとよくあよせ伏

百三十七の事よ 順法也ちう

思ひてかばいにくよくの海のうみやまも波はく

思憶のことを

並ゆくとま

付くのいじあつて思ひくつらぬうせよ門代が見

貞慶上人

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

を人思憶といふことを

平政村納木

思ひてせつゝへつゝ思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

道同は師

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

百三十六をうけつよ思憶を

入道麻呂ひぐも

因今もあそれど思ひを思ひも思ひやうじきやすう

熊野玉ゆくはけのけのうす後け

リリミ野原に里に廻りけまねうともきの経ひとす

ひーす

真服は師

たゞこの尾とのまの處ちつわれす後も我せへとし

麦原基政

マセニテ思ひて思ひて思ひて思ひてのまやま

元け日羽恒

水の面よみれてうるうる草の波のうちや経をゆゑ

ス百三十七の中よ 後もゆく

人皆すのくまかうり野中の清水くみるくみる

刑アマお捕

リ

リキハシツキ義もこころかくと計ありアハすま  
林もく思ひてくむすけれど世のまことにまご

百三十九一燒を 入道風を賣る

じつ人里のこゆはえ小鳴りうや鳥飛鳥す

印を残はる 衣笠翁門人

鬼乃島のまきあわづといねえうよのむとしき

前人所言高家

カバ身ねえの身がこゑまに鳴つける島のまつ

大僧正隆年

うや仕えをみれやまへて鬼ノ鳥のま

建保元年百三三  
赤中内吉家

わをやしてゆけ馬のあすやくわれの神とし

用路鶴もしくて 心向は師

用の戸も明るく聲とて今鳴鳥かくねすら

ひくと 蝉丸

相坂の用ひあつてのをとよちくう升る

せとすまじて

續古今和諺集卷第十九

難奇下

寛治二年百三三  
ちりけつ海眺うき

入道麻を致ふた

うみづかともかくや波のえよしにくわしもむをか

麻人納言考家

月はるあづかの波呑ようのたづきうちか雲

洞門抄改家百三三

源家長納丸

併駒とすにすとの沖よくめもかくねまのわま

後鳥羽院よりうけむ有も三う中

愛玉秀祐

凡吹ハいにれ乃鳴こしゆしつつアヒムアモのリヤホ  
ミー

麻人納言為家

凡吹は演久の様ねタトトヨウツセのドロアモアモ爲永

中勢ア親王家万三ト

愛玉充後納良

月出くゆまこアツル秋きのきよタリシテアモアモ乃物承  
ルも二年勅撰のアホトキシテ後ナニテ

萬一ふによ海邊月を

季春一拂アレーネ情うときせかよやうと月をうト

月すの中よ 中五り實

更ゆきよアリモト吉野ナリムカレの川が故の月

右を中わ行平

翁カヘメ思ふヒトキナニ風うとよの月をみナト

あくゆううくわいに風うとよの月を後ほり

瞻室上人

草の店と月うとよの生ねまに新くすとよの月をう

ミー

ちち門内也テ

モおうちアヒアヒヌクシの月いたゞれうすくじつ

前文所言停車

月移すとあけやのこゑしわすらあくわの船の旧工

百三十の中工 麻用白たたた

昔もいっかくせしりこどもくろのいもつゝ月をうら  
くまみの家すく月あつてけよしりを畏  
おと淡けけ 後納納

ゆくの面けとさくさくすいすくすく月ト

月朧思に事こりへと

中丞師季幼良

古き是れもけふじれやえきくよくとほ月う

五音は師

じくと鳥すくまみのられアて月の都にすじりひは

通令下は師

夕くれぞうこすいとをはせよとてく月のつち

故人對月こそへと

今更や后えを更闇後

月ういとれりとくとすよ秋をひめれふむいと

月朧迷懐こゑと後はくちたたた

今更秋月とみえへ時アねやうともくとくとすよ

小野祐三とよ庵迷懐

我も又のとちり有明の月をあくせこみうそちゆ

歌一ノ子 惟明親王

あしきる三輪のむらにソレシよみかづるおき

よみへんれ

古のいとまわせ我みくとえくさうのくと

柿本人九

年月日もすくのよひのやうすむじきもの等

やうけのあつてゆきのう極しけよ元たてし

多喜白番うきう

皇女后宮人丈後成

あら庵じちのふりれいにわざとうねわくもつは波

一百三十吟野り幸を

後京極後成前左兵衛少

あけの波とじつよきつアヌカくとてとねこつもと凡

建治六年正月柿本部信一公一正真新を

じよくはうすとてりみ紙上書しを公一

とと天皇

うきいとみうすじつともちかくもみだる氣

歌

正三院家

ありやくよしの先ねまゆとのそよがれ我毛の先

百事中す

あか門也

かく乃やつる道いとし後も後はのくら

歌

中納言家林

みちう令ノモトをじよんまくこす

佐吉よ落とす

後玉墓隆

佐吉とみづへ御ゆきそひうけのうと

佐吉祐多

ほ三佐教

ひめよ年じむの浦に生ね我力のうひや

さる砂のねをす

能因は師

ほ産れにわうかとよむ沙の尾よもてむね引とせ

ナケのよ門を

後玉墓後

せよあくべヌアラ(は)の國のみけのねよかとくわす

行路にくまえゆけはがままでのわしよ

うけ

源後頼朝

みてるのまみくれて鶴の草くもうちうらうら

歌

ほ三佐教

よしやいの濱夜風吹れやくよまくもくうこ

本懐中す

後鳥羽院下野

りまくす外よをふじりてもんよつ

すと人のためにつりよつてよ

未承本部

やつまうらじつのこととぞ門もく観の水ひきくやう  
懐旧の心を 交玉信實納毛

古ふきこいとあゆしきづかへとてとくうかよ  
思ひてのあまくあく古をもる人のうらうとくし  
前大内吉高家

みくらのじつのたようすみわせをもくすくやう  
中くに思ひてうきこしむれわざう者をくじく  
交玉仲敏

やつまうらじつのたようすみわせをもくすくやう  
をの後後けけ 入道前吉久人夫  
きてともよ門へるをうかびよくひやごよくまき  
立ても  
前大内吉高家

やつまうらじつのたようすみわせをもくすくやう  
をの後後けけ 入道前吉久人夫  
きてともよ門へるをうかびよくひやごよくまき  
立ても  
前大内吉高家

言のまよはれよみのことを思つてのまくやう  
後玉隆祐納毛

やつまうらじつのたようすみわせをもくすくやう  
をの後後けけ 入道前吉久人夫  
きてともよ門へるをうかびよくひやごよくまき  
立ても  
前大内吉高家

やつまうらじつのたようすみわせをもくすくやう  
をの後後けけ 入道前吉久人夫  
きてともよ門へるをうかびよくひやごよくまき  
立ても  
前大内吉高家

三万三千はくよト本懐を

麻衣納言考家

百三三

左無馬考高家

詔あれどもうち道トモトモうめい今まのゆくりすとま

左大將とけく付家の方三三

後京極持政前多良木

八雲三三三アツマテアシノたつてこと

十三三中

麻印久長基

八毛み門通ひやうきをあこへあくと人の里といふ

本懐のくそ

佐行家

今も又入とれりとぞうちむをよへずすま

よみ方高うち

源真親証

石上やうや半通立アヒツヨガヤアゆしまま

モのから都をすとうつれく野中のや冰を

是を后えす後壁

よりれねりのひあつて野中のよ冰をよ

見一子

藤原景雅証

つまみて人うこひのいの野中のや月ナシし

又秀林のすと三けく付よ

藤原秀茂

祐也さちやの事ことみちうをつまつま不草書ふくじゆをたのやみゆ

中務なかつかの風かぜをけむ草子くさごのあくよもす

のまよすとまほりつるこみてなけれ

天曆贈てんりきよ、是これを后ごえ

みれみれな成野なりのれとね玉たまのあはりもきせ

本懐寺ほんぽい

や上天皇

ま行まわのややのりりかかままののれれととややととふ  
もの後ご後ご後ごけけ百ひゃくううち中ちゆう

辰二辰二家隆

いよいよすすははししてて年とめめとと人ひとをを衰これれせせてて那

治じ二二年年百ひゃく三さん十じゅう入いり遁と麻まをを改かへへ

かかるるよよくくむむききううそそううよよそそしてして社そののうう鳴鳴

歌うたののううおおははししにに通とみみ

ままくくああ思おもううままののううよよううれれううううきき

前まへ内うち言こと也よ良らう

むむけけくく衰こそそるるそそるるそそうう聞きううううききとと通と

堀川ほりかわにに付つけ百ひゃく三さん十じゅう行ぎょう

後ご教きょう丸まる

是これ乃のううやや上あげげ廣ひろををこのの下すもも思おもトとゆ

夕ゆふ事ことのの行ぎょう下す蘿蘿のの鳴鳴をを聞きて

日くあれ行のうやくよめうちふとくともすと

高處遠憶

藤原基後

竹とよ見いきゆと納あらうと我かくにあれいをす

達也元年もう所の遠憶ニテ

麻中納言家

思ひきく爲のうひの草もそくめじ方ハ清や

夕のちづを

ちぢ門限

夕暮のむくゆるり雪のうひの空もあわいもとも

宵もむすの中

順徳院

うきゆもあしゆとあけれどもとね人の令にけん

庄懷寺

延三佐引経

思ひきく爲のうひの草もそくめじ方ハ清や

古ふよも思ひよう 鴨長明

じくうの高きよ樹うへりとくじくまゆ白毛モ

堀河院内百二十の遠憶

安原院仲納

氣もうへつけれどもたゞ思ひとぞいとぞ

院一亭子

安原基隆

わうとうの方へ秋のこ思ひよ詮ぶじきくうせむ

源後院納

すとたぬきせうじう波のと門うふじやをと  
後ちか門ひだ

鳥と鳴き名あくうむをけの下にあくえ

車子院ち寺

せ中をじにうじとせんじうあまくうま

三百三十九年よ

天皇

わううううういのうのとよしとくいとく

寄宿連懐

用の前左木

うようざまてめのわう初めううもかく歌く

た木

うううううううううううううううう

長元年百三十五

衣笠前け木

ゆうじゆうのえうううううううううう

中勢卿親

まうまうばしりとくとくとくとくとくとく

休庭行家

ううううううううううううううう

源興房納木

ううううううううううううううう

拉僧と耶真

信實幼大

國やうりやうりやうりやうりやうり  
詔書ア命令をあこへて、うえをそいひまくわあけ  
危後本憲ごりつらーと

裕盛は師

ううううをもーうも御事だくいくとえ世をお

蓮生は師

中勢卿親王家サクニウキテアモニシハケヨ

ヒテトセトモうる 大臣正隆年

今うれれりに被の志のみのアモトカニカニハ成

邊子内祝王賀彦の門をもひれてのりとも、そ

有けりにゆく 入道寺承ア昭平親王

弘一と 後鳥羽院御三

いじまくつまくよーとかちと先の社をいちどく

東達信ごとくと ちか門也小室相

まつ下の社をうめ入社計うと世をいとひうつやうと

平坂村納夫

私にうすらうりの心地やく思ひうるわ方にあは

中勢ア親王家百三よ

捺斗傳教院納

うへやく夏をうめもとての秋をうよめの音をうき

述情のくそ

平田廣

年くゆけ、いざつてせじゆく上色のくわせにまう

寛を述情を

麻人納言翁家

歌くそよかのうを紹へしむすてよすら雲を波を

日暮山中よ

順治院寺

うそきいようひくとくえいと先せどくの思ひうる

歌

用ひ亦なたれ

うそきいようひくとくえいと先せどくの思ひうる

よお高島うちよ

高陽門虎越原

思ひくそよにやとくせよ義すくせ情うるわき

中勢卿親王家百三よ

夏至能清納夫

うふにうれすして年いわいとあまうつ世をばくとも

内門持取家百三よ

正三住家

うへもつて我よりらくかきそくはまのへを

延保四年七月十四日有三

延鎮大僧正

力ちうづかむる世をうじらやへあてもよみりく

おとづれ

後柳幼

せ中のうしもとす方の程を思ひとども今はやう

入道院を表大夫

・ おとづれいわせうすゆゑ御そぞくまが里にて  
・ 重いもにまづけうひくよ重いじとけく

五三佐家

・ うすいとつるのとみて家をいとこ思ひと  
・ まわらと見ゆ后えつとむととれければ所消  
・ きはけくま ま三三番

・ かくにちハ被すもれもあこえ思ひもと強のうす  
・ 上ま門にうとうとぬけ、時よりて

赤染屋

・ かけこみてととくとくよもよと強のうす  
・ とアラあやしむけ、人のまつまゆく年で  
・ のうせをうしくこ因てゆけりけ

本山門に在る屋

うそてに有しとあくわ向せとうじゆこ國をひと廻

藤原仲絹納戻出家してひけらえの日より

うけり

後三臣若続

そにあらね夜の妹の凡いとあるまよ吹くうらまし

火

多原仲絹納ト

ゆうふうにあらねえすとらかうじねにうれ

ま家の後後はう 麻大納言基良

守りとねむるも死を今更と云ふ氣に

内歎は師

うそてあくゆと見下すとう墨塵

小はほ

うそてあくゆと見下すとほせにうて墨塵の御  
事可む掛案あくまく世をのれひけりと  
ふけていひつりけり

陰明門院大東

あくゆとみども有るうのやまとうの世や

火

事可む掛案

りうそてあくゆの外にうて月とくのアヒミもるけり  
高年上人よヤフうけり

子泰川納戻

思ひてあくゆがよがよともうとあつしに見て

人とあれす里すまうつやうてうりよゆとれうとえすくら  
百三三の中す

門すれぬ後のあうアコムモニキシテ皆せくら

よおあうちよ 大庭ア有家

晏あうねに代きてもくすたわし我方のまかがい事

まくす

まきに接客

あうさの人にあすくもく洞ハ袖よもじくもけ代  
あち門だき

ほせにうれしくこじゆれけめとひもねわの洞下

右近大内通也

一すらに入アア比せの中のうる門をかどう帳

衣室前門大内

もくせの人へ更よづかねわくよかばい思ひ

床御は師

晏あうとまれゆあらう門をかせをとぞ

壬生也冬

深けれどちうのゆりしとや人の思ひこむ及ゆ

小野小町

カヤくもかくもふくふくと桂の月とみゆ

人納言良房

うせていどり捨てていりせうじゆすを放すわ

本懐の三中よ 振手傷都ら朝

いりへりやれト門のひげれどそくり月日ふ

清浦納夫家三合よおうと

祐盛は師

思ひや又風引ともあけ代たすにせこす捨ア此

前律師承觀

もうよも歌くもあよよきよとすといふ人ふとし

前人納言修平

いどりててむよつてせのうと身引よ六代ねふ

え明幸も入道前後改家百三中よ

夏永え後納

今ゆくとあひ思ひの歌を我がみけつましの

本懐すわまよよみけ?

行かへよまよよせよよやうかうとくの

私こうあまえ

續古今和詩集卷第二十

賀章

後來蕉院しまたれて西日の東すとれ  
けり

一葉庵

ニ至すつねやひを思ふにかくとの物ごみ  
此身たゞ年のあ屏風のう

躬恒

か世をやむむよりれき若き年をかくゆけよ  
上東門庭入りか屏風によ

花と庵

吹風のそよごとやくわまほい花と門に匂ひすと  
因だ乃后やまこ申けづ付すとものえよ拂のむ  
えうそつれてはけるつるべくちくまうとを

みく淡けり　伊豫人捕

じよもとさうひえとあらの拂風もくまうとす  
弘治二年二月謹上仙洞羽翁草玉毛更匠  
年をいととを傳ちうれい

今上御

きいわまえあねくゆとあゆことを花ひをすと

中納言

花みくものけかつらわせよめ漫とての考の左  
ちつてのほひかとくわよぢむと書のゆ  
か梅のころにいきとくちと書行ゆ

左上天皇

梅の色にゆのじの考けてうきわを書のゆ  
正元二年三月とまだあ園もとく一切経代  
養うれり日行幸はるまえもあすと  
利賀あつてりとの日とく祝花う庚はるよ  
きよもとづかてはよきと花せ今こうづ  
入道前左衛門

さくよこくくわ(構はる我まみくわちのう)よ  
麻の衣木(ひき)付を追大内

あすよくよか子構たわよよみの考すと  
けつての後穿うみ花をみく淡けく

入道前左衛門

おちうくのよしけわすかわうの花みくし  
富家入道前用白山わすくの清水院附  
の衆人行うけ舟京船前用白の家と詩  
こゑてうことをゆけ

源頼經題

嘆すしおかうの花はよせをくこみくわくにをせ  
あ承ニ年三月鳥羽より幸かけ朝附池上花  
ミソヘラシを薄あざれぬけよ

中ち門右太夫

ちよきとくゆくゆくすもむにやくじるに花ひま  
はと六年三月西園すくに肯うなよ櫻を

麻左太夫

うくのゆきとくすもむに花のこころ寄もなま  
内裏百草と禁中花

左太夫

樂考とくとて花のゆきと花のこころ書ひくえ  
三月三日康義らのとに清くつづけ  
紀時文

ちよくとくとて花のすとよの花のこころのとを  
たとへ将をあひくく寂勝詩よゆづくふ  
けよくとくいにづけ

後鳥羽に下野

義すみ乃とすみよみとくよまくわう梢をそえ

舟

入道前左太夫

思ひあれどこのよみえの花をまよひけりけりふく

は處も入道麻持役を始てり又、扇のとみ矣  
けむけぬるにもアミリムもつれてひそこよ  
々々度へかけれり又にひづこれけ

後朱雀院

みづれのゆくまきくすりくいもひじづくまをち  
那芳門院の根合の

春宮大主師頼

みづのあももとくほのわやう草ちくうてひくもくよ  
延保六年八月十三日中殿宴の池月久内

參議雅經

一池水にまくこくして石のくらわくよすみ角を

醍醐入道麻持人末

毛の代のすととのをくさりてく月アモセアマク池水

延祐二年九月十三日午

麻中幼吉雅真

せきてくまく達ツアヌ骨郭ハ皮はくゆみのやくくもし

まは傳院の所付は金剛也よ行幸ニテ南院

お城こりしと薄うれしかけ

絵賀門院堀川

雪かくの是とみゆきままでりえようじとねまく

九月つうまを 聖天皇行

百敷にうりてひよの花の花をうぬま世も故  
雪のりとやうにわうけとよのうじく  
空をぬけようのまことうすじうぬじく  
れすまとれけ、後生産にちう

天地とうきふ年のちやうもやう白雪とこゆし  
左大内の大表すりく年月づく後すくよ衰  
きよほくかけく付入通亦と表大た家主く感  
きのう後はくよ 前表大内

雪門よちねいを又こ思ひうこうよ花をく年か言ふ

祝う後はけく中に

後京極持家表大内

秋風アヤですとけのふれう月日こせにすじわをれ  
後一表をしまれとれてのち又十日の付は成  
も入道前持家うよ先ミアはきれ

表大内

いたつをうすくちとあわすくえふもくみそく  
内院持家くよ百もすうよとけ

前中納言家

毛を引らうのふうこくはせうみと  
つる

吉慶アトツミシテモハタキハモアチャヒリハシテ

源家長朝丸

トナガモキアシモキモタガシテモモカニモミヨ  
取ルモ 入道麻を致ヘタ

アタシテ何物ニシモモセモモリヤマカニツケ

文永二年九月十三日す名トけ月を

麻開白た大丸

万代にツツテモ三七月モナシラシモシテ鹿の抜け  
ホキナシラシモテニトアモトヨメノは家族

無ニシムシテ た邊中持と雄

朱引の故ニヘヤシマツシのくらア所の上ひとも月

素德也万ミテ 皇太后宮太史後成

もつ代まくもくわアシヘのちかひアシモトケレ

承保二年二月大井町の行幸にヒツア風口で

よみはけ、 郡中納言近舟

大井町より下すじ水のくのあきにあいよ名

七葉ノミテモクムシテスミヨ書付

ホシ

前内大臣奉

ナシルニ波よと見テモハ鴻みくニシニホウク

サ

天皇

李寄ゆる波よとくはいりて草なきあめりてすよ  
元久二年三月廿六日勤吉今集竟宴をこそ  
れけよゆとれけよ

後島伊代也

至るを今よやく一旨のわざをゆくうひ  
後京極源兼右衛門

まへゆよと言葉のゆてきうひしよくつむ

後は收もへ道前用白家右衛門

後惠は師

ちづれ川のうにやまとくみ秋よ年を内に

そよ海ねのれいゆうとみ

恵慶は師

うきなきもやる秋うりとねのちととくれぬ波のうす

建保三年六月某所の又三三吉よね経年

捨大納言忠信

限ゆくとれりとちよゆくとみ瀬ねいくせ(や)

祝事の中に 錄金左大夫

あつやとおせりにしる川アミのそしこ豆え  
えねやとこくと百代に今うこうてかぬくとも

辰三佐頼政

毛子代はまつをすくへてけりうづてむあ

ひへすよとよとよ

秋千のよかへする清氷りしてうし万葉のこえ

ふ事こきよみけ

傳ひり意

うへる節のけのミヒアモヤチのとよこを  
ひへす。

前大納言吉家

八百万神とこくハ國をもててうめくに國門をこそ

正元二年大嘗會のは候け

中勢マ親

すくまろくのねふとアヤギのりちか

日ナ紀竟上嘗寄活日入彦又十役弟天皇

清慎

地火にくよこけゆくとくのあらとの凡ハもあれど  
後朱雀門内付大嘗會也屏风

贈參議義忠

正月乃からのよる家やてくわゆるやよわふ御ト

承保元年大嘗會も琴方也屏风

前中納言庭房

いもよがのよのうきよきよきよきよきよきよきよ

久壽二年大嘗會書

官門マ承範

あさはれうらにあまのやま行ノ幾度アシタスす風(手)と  
延暦二年大嘗會カツハ悠紀方屏凡アシタスも等

承中納言實實

す乃御のまつゆのまひねもくもく代の事  
ニ治三年大嘗會カツハ屏凡アシタス

人臣ア為長

多ようすあくね松葉ちくよをくたにこつてもえとと國世  
多々百番アシタスもくよ ちく門り人アシタス

カタニシのうかきよみ代アシタスよせをなみよ鷹の毛衣

延二位家隆

久壽二年大嘗會カツハ月日アシタス

我毛アシタスくわ

續古今和詩集序

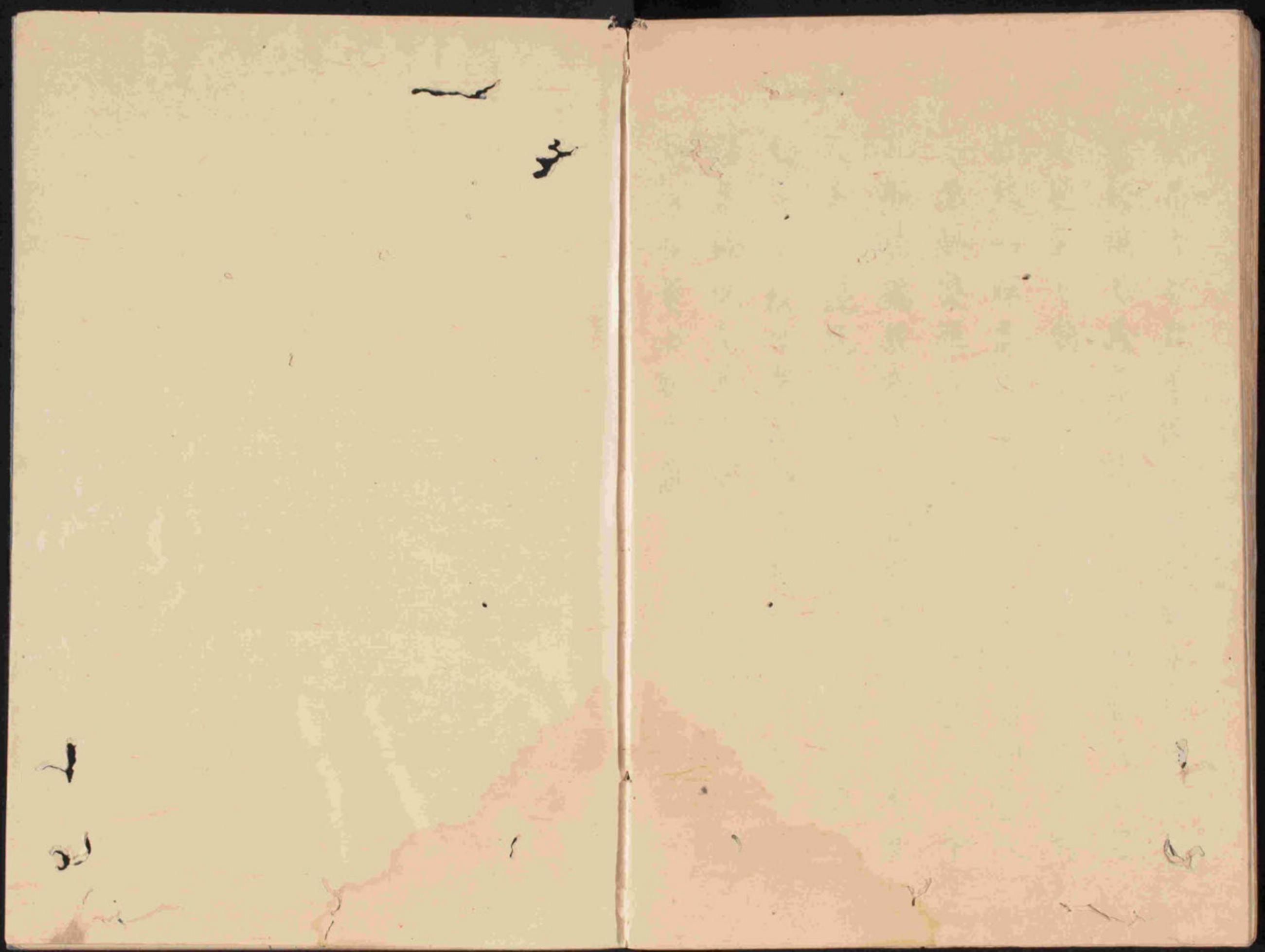
夫天地之二儀共成一物化神雌雄之兩  
元相遭八列分號有日月然後有人倫有  
人倫然後有和歌起自素鵝沉鳩以門鶡  
被干柿奉山邊秀士以降千立石故之地  
年紀雖廻環三十一字之篇夙軒猶連  
綿源浚若流遠根固者木長皇澤洽若山  
通化此通化者其國昌宜哉上好而賞之  
下舉而從之蘭芬菊韞之方互競陶染之  
功尤心月忙之客各為周旋之媒於毫釐

改事之次命侍臣而曰

皇帝君臨之第六載遍梁恭寧民黎子吏  
而自萬方皆獻毛稅衆々聖旨易史萬  
機之諮詢多隙屢更餘周將撰一集萬葉  
集者平城皇朝課英俊多被降詔古  
今集者醜陋聖代勅曰人而欲傳百王  
自爾以來繼芳塵示總編及十代挺佳句  
而類聚餘萬首案之以附何有遺漏然而  
霍山之玉拾而不盡糴水之金接而至餘  
也皆如此詩亦相門肆賞始喜元之勝  
跡殊卜枝幹相連之佳期已者木也其狀  
如室虛厥形空花葉壯觀無過之即為歌  
一杵旦者土也居終始之際得紱結之名萬  
只頭自之又為歌德云乙云丑月賦曰德  
故古今集序曰和諧者訖其根於心地發  
其危於詞林上句者土也下句者木也大  
理相當此感快弘義道古文集有以有  
由哉仍詔承印大臣騰原朝良民郭邪麻  
京朝長者家休復騰原朝良民郭邪麻

唐永朝臣充懷等人家家集尊卑編  
書之次皆完精要各令是進最初萬葉集  
依考盤觴猶挾之其後十代集雖多缺玉  
患除之伏惟道臣於九禁為父干二帝桃  
花源之春禹花源之嫩留春故於始峯之  
卮色青松洞之凡赤松洞之月移凡月於  
仙汭之松陰孰巧方外之居而握乾引彼  
端名之才而琢磨搞卮搞寶深索凡骨之  
妙或訛或吟廣披露膽之訣取捨寫得二  
千首都類兮為二十卷名曰續古今倭歌  
集方今主勵托撫目不暫捨雖隨後鳥  
跡上皇之獻襟心闌波鳳毛中無之秀章  
一云今上陛下天才日新月麗仙院那言  
耽道之志懸聚難周之向還恐令後之覩  
今勝今之覩古於歟天生萬物万物之形  
容區分年有四時四时之景趣互好互外  
之難類毫繁意謁之感思非一釋門之他  
神道之詠緯在幽玄尤貴情素此中昌泰  
之右相者絕妙之才也累代集雖加歲

氏鼎後之號尊德之餘今載藜祠篇什  
字修撰之義蓋云脩矣允和致者志之所  
之也氣之動物物之感人情蕩於中言形  
於外以暉庶三才以和理万有營國營人  
之要無雙照古照今之羣第一璧猶說令  
孔昭能礪殷本丁之全微諫不晴誠為唐  
天子之鏡匪啻比三易之報衆驚亦將何  
无怪之歟合應蓋以三代古今之撰宜為  
諸集編次之最文永二年玄陽季月大綱  
之題名筆而勒之爾



7

2



